

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書X

横マクリ遺跡II

2015

新潟県教育委員会
公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書X

横マクリ遺跡II

2015

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育員会は、道路建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断して京都市に至る幹線道路で、北陸地方と京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の発展に大きな役割を果たしています。しかし、国道8号のうち糸魚川市間脇から押上地区では、道路幅員が狭く人家連坦部を通過するため、交通事故や渋滞・騒音等の交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていました。糸魚川東バイパスはこのような問題を解決し、地域の幹線道路としての役割を強化するとともに、現道を地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は国道8号糸魚川東バイパス建設に先立ち、2007年に実施した糸魚川市横マクリ遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、平安時代には小河川が平行して流れていたこと、古墳時代前期には玉作が行われていたことが明らかになりました。

今回の報告書が、糸魚川地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただきました糸魚川市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただきました北陸地方整備局高田河川国道事務所に対し厚くお礼申し上げます。

2015年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字田伏字横マクリ 749-1 ほかに所在する遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は 2006 年度・2007 年度の 2 年にわたりて実施されているが、本書は 2007 年度の調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道 8 号糸魚川東バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は県教委が調査主体となり、公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し実施した。
- 3 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記は、「ヨコマ」とし、調査年度・出土地点・層位などを続けて記した。
- 4 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 5 遺物番号は遺物の種類に関係なく通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 6 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第 VI 章については各分析の文末に掲載した。
- 7 各種図版作成・編集は、有限会社 不二出版に委託した。
- 8 調査成果の一部は現地説明会、埋文事業団年報、埋文にいがた、遺跡発掘調査報告会などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 9 自然科学分野にわたる各種分析は以下の機関に委託した。
 - 樹種同定……株式会社 パリノ・サーヴェイ（高橋 敦）・株式会社 バレオ・ラボ（黒沼保子）
 - 放射性炭素年代測定……株式会社 加速器分析研究所
- 10 本書の執筆・編集は、坂上有紀（埋文事業団 専門嘱託員）がこれにあたった。なお、第 III 章 2・第 IV 章については、松永鶴知の原稿に加筆・修正したもの、第 I 章 1・第 III 章 1 については既刊の横マクリ遺跡報文に加筆・修正したものである。また、第 II 章については、既刊の糸魚川東バイパス・北陸新幹線関係報告書を参照した。
- 11 強生時代後期～古墳時代前期の土器については、滝沢規朗（文化行政課埋蔵文化財係 専門調査員）、古代～中世の土器については春日真実（埋文事業団 課長代理）、石器・石製品については加藤 学（同 班長）・高橋保雄（同 専門嘱託員）の指導を受けた。ただし文責は坂上にある。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所　糸魚川市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	3
C 整理作業	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	10
1 グリッドの設定	10
2 基本層序	10
第Ⅳ章 遺 構	13
1 概 要	13
2 古代～中世（上層）	13
3 古墳時代（下層）	15
第Ⅴ章 遺 物	17
1 土器・土製品	17
A 古 代	17
B 中 世	18
C 弥生時代～古墳時代	19
D 土 鍋	21
2 石器・石製品	21
3 木 製 品	24
A 記載の方針	24
B 各 説	25
第VI章 自然科学分析	29
1 樹種同定	29
A 2007年度分析	29
B 2014年度分析	31
2 放射性炭素年代測定	36

第VII章 まとめ	40
1 土器	40
A 古代の土器	40
B 弥生時代～古墳時代の土器	41
2 玉作について	43
《引用・参考文献》	46
《観察表》	48
遺構	48
土器・陶磁器	49
土錐	53
石器・石製品	53
木製品	53

挿図目次

第 1 図 国道 8 号線魚川東バイパスの法線と遺跡の位置	1	第 10 図 木製品の部位名称と計測部位	24
第 2 図 IT ピット検出状況	2	第 11 図 挿物・曲物の部位名称と計測部位	24
第 3 図 試掘確認調査トレンド位置図	2	第 12 図 木取りの分類	24
第 4 図 横マクリ遺跡周辺の主な遺跡	7	第 13 図 木製品の光学顕微鏡写真(1)	30
第 5 図 グリッド設定図	11	第 14 図 木製品の光学顕微鏡写真(2)	35
第 6 図 土層柱状図	12	第 15 図 木製品の光学顕微鏡写真(3)	36
第 7 図 遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類	13	第 16 図 曆年較正年代グラフ	39
第 8 図 田伏山崎遺跡との位置関係	14	第 17 図 土器無台輪の法量	40
第 9 図 麦の口縁部形態	19	第 18 図 弥生時代～古墳時代の土器	42
		第 19 図 壺玉の製作工程	44

挿表目次

第 1 表 石器・石製品の石材別集計	22	第 6 表 曆年較正年代	38
第 2 表 2007 年度分析 樹種同定結果	29	第 7 表 古代の土器 器種構成比率	41
第 3 表 遺構別の樹種構成	33	第 8 表 古墳時代の土器 器種構成比率	41
第 4 表 器種別の樹種構成	33	第 9 表 麦の口縁部形態比率	41
第 5 表 放射性炭素年代測定結果	38	第 10 表 玉作関連遺物の集計	43

図版目次

【図版図版】	
図版 1 全体図(1)	図版 6 上層 分割図(3)
図版 2 上層 分割図(1)	図版 7 上層 個別図(3) 河川 6, SX4・102, P9, 杭 11～23, 47～49
図版 3 上層 個別図(1) 河川 1～4, SD10, 杭 43・46・50・51	図版 8 下層 分割図(1)
図版 4 上層 分割図(2)	図版 9 下層 個別図(1) SK130, P, SX119・120・152
図版 5 上層 個別図(2) 河川 4・5, SX2, 杭 24～42・44・45	図版 10 下層 分割図(2)

- 図版 11 下層 顕別図 (2) 河川 7, P108, SD151, SX101 ~ 103・105 ~ 107
- 図版 12 全体図 (2) 下層
- 図版 13 古代の土器 (1)
- 図版 14 古代の土器 (2)、中世の陶磁器、土製品
- 図版 15 弥生時代～古墳時代の土器 (1) 下層の造構
- 図版 16 弥生時代～古墳時代の土器 (2) 上層の造構, V層 (1)
- 図版 17 弥生時代～古墳時代の土器 (3) V層 (2)
- 図版 18 弥生時代～古墳時代の土器 (4) V層 (3), IV層・IV b 層、試掘確認調査
- 図版 19 石器・石製品 (1)
- 図版 20 石器・石製品 (2)
- 図版 21 石器・石製品 (3)、木製品 (1) 河川 1
- 図版 22 木製品 (2) 河川 2・5・6, 杭
- 図版 23 木製品 (3) 杭, IV b 層
- 図版 24 木製品 (4) IV 層 (1)
- 図版 25 木製品 (5) IV 层 (2)・IV a 層・Ⅲ層
- 【写真図版】
- 図版 26 造跡遠景、河川 2・6、基本層序
- 図版 27 土層・下層完掘、杭 46、遺物出土状況
- 図版 28 古墳時代の土器、古代の土器、墨書き器、玉類未成品、糞玉未成品の穿孔部断面
- 図版 29 上層 造構 (1) P, SD, SX, 河川 1・2
- 図版 30 上層 造構 (2) 河川 1 ~ 3
- 図版 31 上層 造構 (3) 河川 4 ~ 6
- 図版 32 上層 造構 (4) 河川 6, SX, 杭
- 図版 33 上層 造構 (5) 杭、遺物出土状況、完掘下層 造構 (1) SK, SD, P
- 図版 34 下層 造構 (2) P, SX
- 図版 35 下層 造構 (3) SX, 河川 7
- 図版 36 下層 造構 (4) 遺物出土状況
- 図版 37 下層 造構 (5) 遺物出土状況、完掘、全景
- 図版 38 古代の土器 (1)
- 図版 39 古代の土器 (2)、中世の陶磁器、土製品
弥生時代～古墳時代の土器 (1)
- 図版 40 弥生時代～古墳時代の土器 (2)
- 図版 41 弥生時代～古墳時代の土器 (3)
- 図版 42 弥生時代～古墳時代の土器 (4)
- 図版 43 弥生時代～古墳時代の土器 (5)、石器・石製品 (1)
- 図版 44 石器・石製品 (2)、木製品 (1)
- 図版 45 木製品 (2)
- 図版 46 木製品 (3)
- 図版 47 木製品 (4)

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道8号は、北陸自動車道とともに関西・北陸方面と新潟県域を結ぶ主要幹線道路である。また、地元においては、山地と海岸を結んで、南北に延びる道路を東西方向に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。しかし、近年の交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川市域で慢性的な渋滞を引き起こし、地元からは渋滞の解消や交通安全の確保を含めた交通環境の改善を求められていた。建設省（現国土交通省、以下、国交省）はそのような状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実・強化を目的に、国道8号糸魚川東バイパス（糸魚川市間脇～同市押上に至る6.9km）の建設を1989（平成元）年に事業化した。これを受けて、国交省と新潟県教育委員会（以下、県教委）は、計画用地内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

国交省から依頼を受けて県教委は財團法人埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に当該地区的分布調査を委託した。埋文事業団は、早川左岸の梶屋敷地区から海川左岸の押上地区にわたる予定法線内を対象として、1999（平成11）年10月13・14日に分布調査を実施した。その結果、調査範囲の約半分が山林・宅地・盛土であったため、採集された遺物はわずかであった。しかし、遺跡の存在が予想される地形的特徴などを加味しながら5か所の遺跡推定地が存在することを県教委へ報告した。



第1図 国道8号糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置

（国土地理院発行「糸魚川」1:50,000原図 平成8年発行）

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

調査の経過

2006(平成18)年、糸魚川市田伏地区において、国道8号糸魚川東バイパスにともなう工事用進入路ならびに水路ボックスの建設工事が進められることになった。国交省から依頼を受けた県教委は、埋文事業団に当該地区的試掘確認調査を委託し、同年6月に試掘確認調査を実施した。その結果、1,340m²の本発掘調査が必要と判断され、新発見の遺跡として、小字名から「横マクリ遺跡」と命名された。本発掘調査は同年8月から12月にかけて行われ、発掘調査報告書が刊行されている(第188集 横マクリ遺跡、以下、この調査区を06年調査区と呼ぶ)。

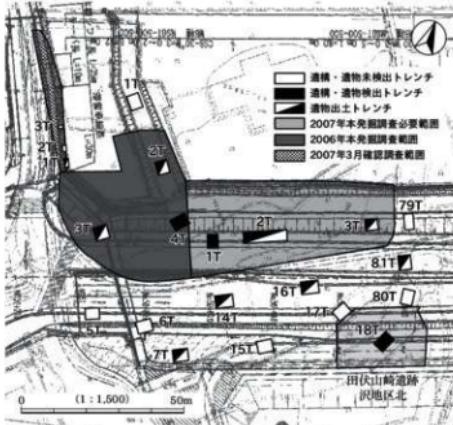
2007(平成19)年、本発掘調査実施範囲隣接地で市道拡幅と河川切り替えの計画が国交省から示されたことから、3月6・7日に確認調査を実施した。用地内に試掘坑(トレーナー、以下T)を任意に3か所設定し、重機(バックフォー)及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

調査対象範囲は250m²、実質調査面積は8m²で確認率は3.2%である。隣接地の本発掘調査の結果から、遺物包含層は地表下約2.5mにあると予想されたため法面を設けて掘削し、最終的に掘削深度は約3mにおよんだ。調査の結果、1Tでは古墳時代包含層で確認された自然流路から土器が多く出土した。遺物は流路以外からは出土しておらず、廃棄された出土状況を示さないため、流れ込んだ遺物と考えられた。そこで、流路が存在すると推定される範囲では工事立会いを実施し、工事中に遺構・遺物を発見した場合には別途協議するという判断となった。

また、2006年に行った調査の結果、遺跡は東側に広がると予想できることから、2007(平成19)年5月21・22日、06年調査区の東側1,480m²について確認調査を実施した。調査は、バイパス用地内にトレーナーを任意に3か所設定し、重機(バックフォー)及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。実質調査面積は64.0m²で確認率は4.3%である。その結果、1・2Tでは古墳時代の遺物包含層が確認



第2図 1T ピット検出状況(西から)



第3図 試掘確認調査トレーナー位置図

でき、古墳時代前期とみられる土器などが多く出土した。また、1Tではビットも検出され、木が出土した(第2図)。これは本発掘調査でSX102cとして調査を行ったが、木は自然木(275)と判明した。2Tでは古墳時代包含層より上の層から珠洲焼が1点出土し、トレンチの西側では古墳時代よりも新しい自然流路とみられる落ち込みが検出された(河川6)。3Tでは平安時代の遺物包含層が確認でき、土師器碗や製塙土器が出土した。なお、このトレンチからは古墳時代の包含層は検出されなかつた。3か所のトレンチすべてから遺物が出土したことから、調査対象範囲全面について本発掘調査が必要と判断された。

調査の体制

期間	2007年(平成19)年3月6・7日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己) 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)
総括	木村 正昭(事務局長)
管理	齊藤 栄(總務課長)
庶務	長谷川 靖(總務課 班長)
調査統括	藤巻 正信(調査課長)
調査指導	寺崎 裕助(調査課 本発掘調査担当課長代理)
調査担当	渡邊 裕之(調査課 班長)
調査職員	澤田 敦(新潟県教育庁文化行政課 主任調査員)
期間	2007年(平成19)年5月21・22日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)
総括	木村 正昭(事務局長)
管理	齊藤 栄(總務課長)
庶務	長谷川 靖(總務課 班長)
調査統括	藤巻 正信(調査課長)
調査担当	田海 義正(調査課 試掘確認調査担当課長代理)
調査職員	田中 一穂(調査課 専門嘱託員)

B 本発掘調査

調査の経過

2007(平成19)年7月30日から事前準備と並行して表土除去を開始した。表土は、調査員立会いのもと重機により掘削し、夏季の作業休止を経て8月23日に完了した。8月2日から6日まで開渠掘削を行い、続いてトレンチ掘削により遺跡の内容を確認した。8月27日からは古代の包含層であるIV層を人力で掘削したが、古代よりも古墳時代の土器が多い状況であった。9月11日からは一部遺構精査に着手したが、9月19日からは同時に並行で発掘調査を進めていた伝極楽寺跡の空撮準備のため、一旦作業を中断した。9月25日に集中豪雨に見舞われ空撮が延期されてしまったこともあり、10月2日によくやく作業を再開し、遺構掘削を開始した。10月16日に上層(古代)の西側を完堀し写真撮影を行った。17日からは上層東側の河川1~3の調査と並行して古墳時代の包含層であるV層の掘削を開始した。上層で検出した河川1~3・6はV層を掘り込んでいる。V層は河川3以東では薄くなり平面的には不明瞭で、遺構・遺物は希薄であった。下層(古墳時代)の遺構は疎らであったが、土器片が集中する箇所がいくつか認められた。それにともなう平面プランが検出されなかつたことから、1点ずつ番号を付して出土位置を記録しながら取り上げを行うこととした。11月30日から遺構精査・掘削・遺物の取り上げを順次行った。

12月8日には地域の住民を対象に調査速報会を実施し、53名の参加があった。調査終盤になってから玉類未成品が出土し始めたことから、一部の周辺の土については土壤水洗を行い微細遺物の収集に努めた。12月18日に空撮を行い、21日にすべての調査を終了した。調査面積は上層1,240m²、下層800m²で延べ2,040m²である。

調査の体制

期間	2007年(平成19)年8月1日～12月21日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)
総括	木村 正昭(事務局長)
管理	齊藤 栄(総務課長)
庶務	長谷川 靖(総務課 班長)
調査総括	藤巻 正信(調査課長)
調査指導	寺崎 裕助(調査課 本発掘調査担当課長代理)
調査担当	石川 智紀(調査課 班長)
調査職員	樋口 重正(調査課 主任調査員)
支援	株式会社 古田組 現場代理人 竹内 一喜 調査員 松永 嘉知

C 整理作業

整理作業の経過

遺物の水洗などの基礎的な作業は、2007(平成19)年度の本発掘調査と並行しながら進め、本発掘調査終了後1ヶ月～3ヶ月は上越市柿崎区に所在する古田組遺跡調査研究室で遺物の注記・一部の遺物実測・原稿執筆を行った。本格的な整理作業は2014(平成26)年4月から開始し、印刷・刊行まで行った。

自然科学分析については、2007年に放射性炭素年代測定・樹種同定を委託したが、分析点数が10点のみであったため、2014年では本製品の掲載個体全点について樹種同定を追加して行った。

なお、報告書の編集作業(本文・レイアウトをふくむすべての編集)は、理文事業団の報告書作成基準書により、有限会社不二出版に委託し、デジタルデータ(DTP)で納品を受けた。不二出版には以下の資料を支給した。

本文・挿図：ワード形式、エクセル形式データ。挿図原図、図案。

遺構図面図版：原図、レイアウト図案、文字データ。

遺物図面図版：原図(石器・石製品)、トレース図(土器、土製品、木製品)、拓影、レイアウト図案、文字データ。

遺構・遺物写真図版：データ(CD)、レイアウト図案

整理作業の体制

期間	2014年(平成26)年4月1日～2015(平成27)年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会(教育長 高井 盛雄)
整理	公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 高井 盛雄)
総括	土肥 茂(事務局長)
管理	熊倉 宏二(総務課長)
庶務	仲川 国博(総務課 班長)
整理総括	高橋 保(調査課長)
整理指導	春日 真実(調査課 整理担当課長代理)
整理担当	坂上 有紀(調査課 専門嘱託員)
作業	小熊 紀子 小出 有紀(調査課嘱託員)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

横マクリ遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川市は、古くから史跡松本街道の日本海側起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る道として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県へ通じる国道148号線とJR大糸線、海岸沿いを通過する北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所である。

糸魚川市は、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にある「糸魚川・静岡構造線」が分布する。この構造線を境界として、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海一蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩より成り立っている。青海一蓮華変成岩帯は、その断层面に蛇紋岩・輝綠岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、「ひすい輝石岩」は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉产地」・「青海川の硬玉产地及び硬玉岩塊」が天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地質は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩より成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる〔鈴木2000・小林2000〕。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は北に進むにしたがい高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」である。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域にはここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積岩が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には焼山（2,400m）が位置する。標高400m以下の小起伏山地域は、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水水量が増大する融雪期・梅雨期・初冬などには崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地滑り等防止法制定のきっかけとなった柵口地滑り（1947年発生）など、著名な地滑りが多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。その中でも姫川はこの地域最長の一級河川であり、全長約60kmにおよぶ。長野県青木湖北部の湿地を源流として、長野県小谷村を経て糸魚川市で日本海に注いでいる。これらの河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下るにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている〔寺崎1988〕。

これらの河川はいずれも急流で、かつ改定が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東～南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1982〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く展開している。

2 歴史的環境

糸魚川市における弥生時代～中世の主な遺跡分布は、第4図の通りである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、横マクリ遺跡に関連する弥生時代～中世の遺跡について概観する。

弥生時代

現在確認されている弥生時代の遺跡は、大塚遺跡(12)・原山遺跡(46)・一の宮遺跡(18)・後生山遺跡(20)・笛吹田遺跡(22)・本遺跡(29)などがあるが、数は少ない。遠賀川系土器が出土した大塚遺跡は前期末であるが、一の宮遺跡・後生山遺跡・笛吹田遺跡など後期～古墳時代前期の遺跡が多くを占める。また、すべての遺跡で玉作関連資料が確認されていることが特徴的である。沖積地を見下ろす段丘所に立地するのは後生山遺跡と大塚遺跡に限られ、多くの遺跡が沖積地に立地する。

後生山遺跡は後期を中心とする遺跡で、竪穴建物4棟・土坑・溝などが検出され、北方に広がる平野部との比高差は約30mであり、いわゆる高地性集落と考えられる。ヒスイ・緑色凝灰岩の原石や筋石などが出土しており、集落内では玉作が行われていた〔木島ほか1986〕。また、3号住居跡から出土した土器群は北陸系土器を主体とし、後期初頭に位置づけられるもので、新潟県内における弥生時代後期の基準資料となっている〔滝沢2005など〕。笛吹田遺跡は後生山遺跡の北方に広がる平野上に立地する遺跡であり、弥生時代後期の方形周溝墓と推測される溝が検出されている。

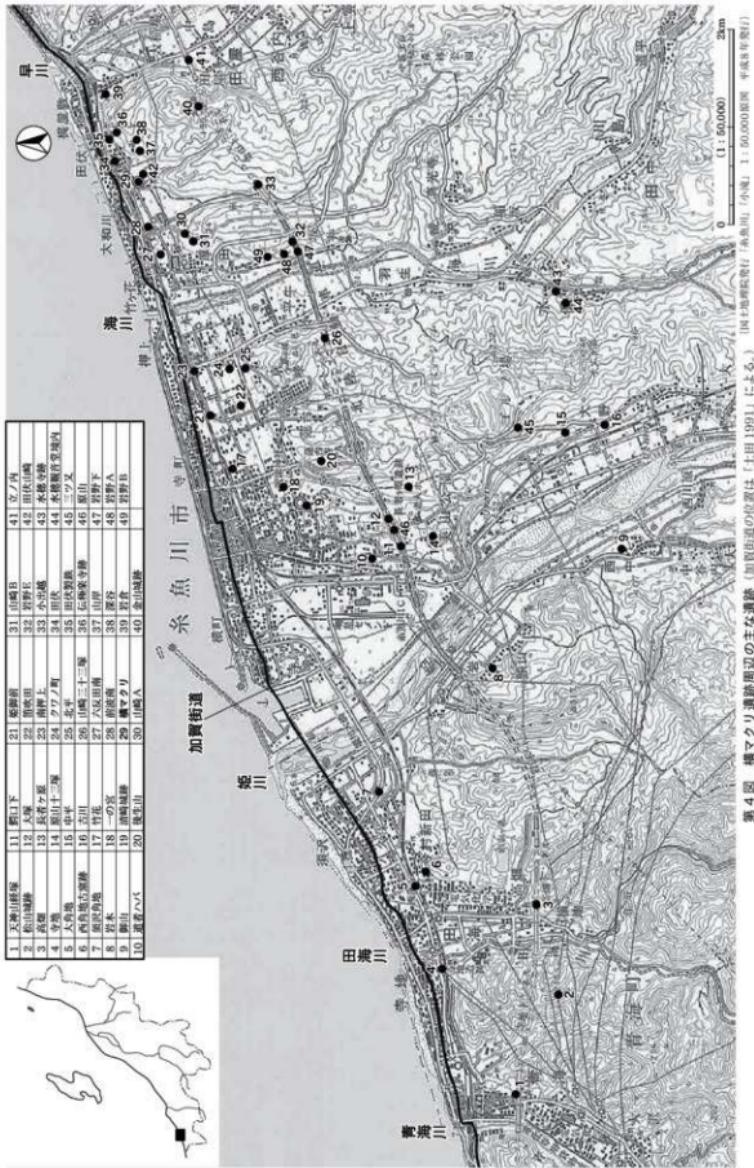
本遺跡と同時に発見され、発掘調査された田伏山崎遺跡(42)〔佐藤ほか2009〕は、狭い谷の中に立地する弥生時代後期～中世におよぶ複合遺跡であるが、低地を志向した当該期の遺跡の様子をよく示しているように思われる。なお、本遺跡から出土した遺物の大半は、田伏山崎遺跡に由来するものと推測できる。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が多いのが特徴的である。

笛吹田遺跡は弥生時代後期から続く遺跡であるが、前期から中期を中心とする玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔安藤ほか1978〕。また、近年都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴建物や木製釣瓶を伴う井戸の検出、琴柱状石製品の出土など注目されている〔山岸2005・2006〕。なお、笛吹田遺跡と姫御前遺跡は、昭和50(1975)年に別個の遺跡とされるまでは、「姫御前遺跡」という名称で同一の遺跡としてとらえられてきた経緯がある〔土田1978〕。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから無関係とは考えられない。

大角地遺跡(5)は、昭和10(1935)年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町



第4図 横マクリ遺跡周辺の主な遺跡（加賀出遺跡の位置は「土田1991」による。）

で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」[寺村 1966] の標識資料としても知られるようになった。昭和 45・48 (1970・1973) 年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ピットをもつ玉作工房跡が検出され [寺村・安藤ほか 1979]、中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成 17 (2005) 年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土した [加藤ほか 2006]。

田伏遺跡 (34) は、中期～後期の遺跡である。昭和 45 (1970) 年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や鍍錆車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている [閔 1972]。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている [糸魚川市史編さん委員会 1986]。

一の宮遺跡 (18) は、天津神社境内に所在する。大正 8 (1919) 年に高橋健氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円板・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土した [糸魚川市史編さん委員会 1986]。稻山林縦は一の宮遺跡を祭祀遺跡としており [稻山 1972]、一の宮遺跡から出土した玉類は笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性を指摘されている [閔 1972]。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に記載される「奴奈川神社」に比定されると考えられており、奴奈川姫が祀られている。

さらに、北陸新幹線・糸魚川バイパス建設に伴い発掘調査された南押上遺跡 (23) [小池ほか 2011]・姫御前遺跡 (21) [加藤ほか 2008・2011]・竹花遺跡 (17) [加藤ほか 2011]・六反田南遺跡 (27) [春日ほか 2008 など]・本遺跡 (29) [渡邊ほか 2008・本書] においても玉作の存在が確認されている。小規模な集落においても、数は多くないものの、未成品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作が盛んに行われていたと言える。

古　代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統 6 (692) 年 9 月の条に、「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。このころの越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝 2 (702) 年 3 月の条に、越中国の 4 郡を越後国に分割したことが記されている。この 4 郡は、頸城郡・吉志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられている。さらに和銅元 (708) 年に越後国に設置された出羽郡が、和銅 5 (712) 年に出羽国として分立され、これにより佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられる。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国最南西端に位置し、天平勝宝 4 (752) 年 10 月、造東大寺司牒 (正倉院文書) に頸城郡の郡名が初めて見えるが、『和名抄』(東急本) には「久比支」の訓を付している。天平勝宝年間 (749 ~ 756) の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久正郡」と記されている。頸城郡の郷は 10 郷が記されており、本遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。沼川郷は、『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』(1907 年) では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼川保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海 8 疋、鶲石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各 5 疋、伊神 2 疋、渡戸船 2 艇、伝馬頸城・吉志郡 8 疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道

越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海駅 8 歩」とある。他の駅が 5 歩に対して、越中国佐味駅と並んで 8 歩と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推測される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が発見されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和 62（1987）年・平成 17（2005）年に発掘調査が実施され、7世紀～10世紀の集落跡であることが明らかにされている〔土田ほか 1988・加藤ほか 2011〕。また、須沢角地遺跡の西南西 1km の丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており〔寺村・安藤ほか 1979〕、8世紀末～9世紀初頭の窯跡と考えられている〔春日 1998〕。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の姫川右岸に位置する道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・綠釉陶器が出土した。当地方の中心的役割を担った遺跡と推測されている。このほかに、8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）〔鈴木ほか 1988〕、多数の製塙器が出土した立ノ内遺跡（41）〔高橋 1988〕、数百点におよぶ土師器を廃棄した土坑が注目される山崎 A・B 遺跡〔木島 2007〕などの調査事例がある。

中　世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高 328m の勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている〔平野・渡辺 1968〕。寺地の南方、松山の尾根上に南北 500m にわたって築城された松山城跡（2）は、標高 170m の地点に本丸跡があり、空堀や帶曲輪・裾曲輪で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚（1）は、大正 8（1919）年に調査され、仁安 2（1167）年の銘のある珠洲焼の經筒が発掘されている〔金子 1975〕。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水穂観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・竹花遺跡（17）・山崎 A・B 遺跡（30・31）等が知られており、観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水穂観音堂境内からは中世陶磁器類が出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられる〔山岸・田村 2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）〔木島 1989〕が分布する。

当地域における中世の集落については、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数存在することが明らかになってきた。特に、山岸遺跡（37）においては、鎌倉時代（13世紀）の大型の掘立柱建物や庭園が検出され注目されている。出土した銅製品には傘紋が施してあり、鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋であると推測されている。文献資料によれば、13世紀末頃に越後国沼河郷の地頭として「備前々司殿」と記述があり、この「備前々司殿」は能登・安芸の守護などを兼任した名越宗長と推定される。これらのことから、山岸遺跡は沼河郷地頭の名越氏と深く関係のある、中心的な屋敷と考えられている〔春日ほか 2012〕。

第III章 調査の概要

1 グリッドの設定

横マクリ遺跡の周辺では、4遺跡の発掘調査が同時並行で進められた。一般国道8号糸魚川東バイパス事業では本遺跡と山岸遺跡・田伏山崎遺跡の3遺跡、北陸新幹線事業では山岸遺跡・深谷遺跡・田伏山崎遺跡の3遺跡である。これらの遺跡は、樹枝状に入り組む谷底と尾根上に位置し、今後この地区的試掘確認・本発掘調査が進むに従い、さらに多くの遺跡が発見されると予想されたことから、遺跡間の位置関係を正確に把握することが肝要であると判断された。そこで、田伏地区で最も早く調査を開始した山岸遺跡の基準線を活用して、本遺跡を含めた周辺の遺跡をカバーするようにグリッドを設定した。北陸新幹線のセンター杭210K000杭(第5図、X=116927.489、Y=-53071.157)と210K140杭(世界測地系X=116906.032、Y=-53209.497)を結んだラインを主軸として、それに直交するように南北方向のグリッド線を設定した。主軸は真北から $\text{az} 30^\circ$ 西偏している。

グリッドには大小2種類があり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは西から1・2・3・4、南からA・B・C・Dと呼称し、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドは1～25の算用数字で示し、南東隅が1、北西隅が25となるよう番号を付し、「35N12」等と表した。玉類が出土した一部のグリッドについては、さらに小グリッドを4分割し、ア・イ・ウ・エとした。

なお、グリッドの基準点である210K000杭は9D1グリッド、210K140杭は23D1グリッドとなる。横マクリ遺跡は33～43・M～Pグリッドの範囲に位置し、34O1グリッドは世界測地系X=116997.877、Y=-53335.049、38N1グリッドは世界測地系X=116981.863、Y=-53373.044となる。

2 基本層序

調査区内は南東から北西に向かって傾斜する微地形を示し、2007年度調査区（以下、07年調査区とする）内の比高差は1.1mで、本遺跡全体（06年調査区を含む）では2.0mにおよぶ。遺跡からは傾斜と垂直方向に小河川が並列して検出されており、土石流が流れた痕跡も認められることから、水の影響を受けやすい場所であったことがわかる。いずれの土質も砂またはシルトからなる。

基本層序はI～VI層の6層に大別できる（第6図）。ただし、同一の地層でも土質に多少の差異があり、層によってはさらに2～3層に細別される。このうち、IV層が古代～中世の遺物包含層、V層が古墳時代の遺物包含層および古代の遺構確認面、VI層が古墳時代の遺構確認面である。06年調査区との対比は、本報告IV層が06年調査区VI層に、同じくV層がVI層に相当する。以下に、各層の詳細を述べる。

I 層：盛土および水田耕作土。上から順に、I a層（盛土）、I b層（水田耕作土）、I b'層（水田の床土）に細別できる。

II 層：2.5Y6/2灰黄色～10YR5/2灰黄褐色シルト。地点によって層厚が大きく異なるが、土質はほぼ均一である。ただし上位・中位・下位で色調や混入物に若干の差があり、上から順に、

II a 層 (2.5Y6/2 灰黄色シルト)、II b 層 (2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、砂が混じったり鉄分が著しく沈着したりする)、II c 層 (10YR5/2 灰黄褐色シルト) に細別できる。

細砂層 : 5Y6/2 灰オリーブ色細砂。II 層とIII 層の間で局地的に介在する間層である。

III 層 : 10YR5/1 褐灰色～10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトまたはシルト。砂礫を極少量含み、わずか



第5図 グリッド設定図

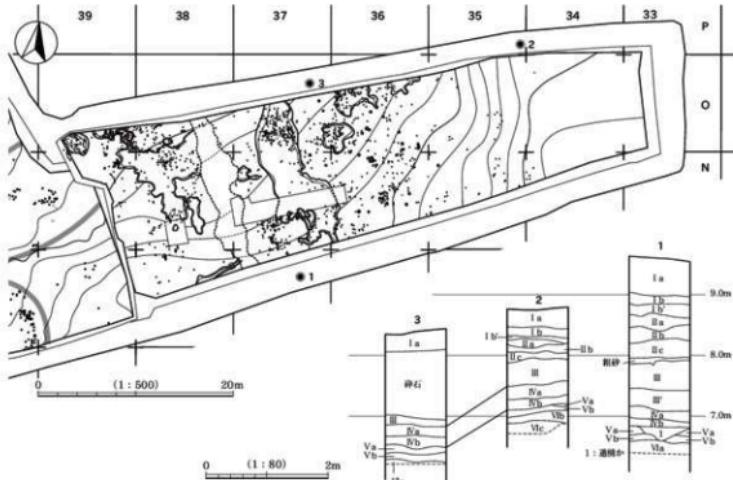
に鉄分の沈着が認められる。II層同様、地点によって層厚が大きく異なるが、土質はほぼ均一である。

III' 層: 5Y4/1 黒褐色シルト。III層の堆積が厚い調査区南側に認められる。III層とほとんど同質だが、色調が明らかに異なり区別される。

IV 層: 10YR3/1 黒褐色～10YR4/1 褐灰色シルト。地点によって量の多寡があるが、粗砂・炭化物粒子・腐植物などが混じる。古代～中世の遺物包含層である。上位のIV a 層 (10YR3/1 黒褐色シルト) と下位のIV b 層 (10YR4/1 褐灰色シルト) に細別でき、前者は古代～中世の遺物を、後者は古代の遺物のみを含む。

V 層: 5Y5/1 灰色～5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルトまたはシルト。古墳時代の遺物包含層および古代の遺構確認面である。色調などはVI層に似るが、時間が経つと若干暗色気味に変化するため区別できる。また層の上下で土質に違いがあり、上位のV a 層 (5Y5/1 灰色～5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルトまたは砂混じりシルト) と下位のV b 層 (5GY6/1 オリーブ灰色～2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルトまたはシルト) に細別できる。

VI 層: 5GY5/1 オリーブ灰色～5G5/1 緑灰色シルトまたは砂礫層。古墳時代の遺構確認面であるが、地点によって土質の違いが大きい。全体として下位に向かうにつれ砂質が強くなり、VI a 層 (5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルト)、VI b 層 (5G5/1 緑灰色シルト～細砂)、VI c 層 (5Y5/1 灰色～5G5/1 緑灰色砂礫) に細別できる。なお、場所によってはVI b 層より下位でも粘質シルト等が認められ、それらはVI b' 層 (5GY5/1 オリーブ灰色～5G5/1 緑灰色粘質シルト)、VI c' 層 (5G6/1 緑灰色砂質シルト) として区別した。



第6図 土層柱状図

第IV章 遺構

1 概要

本報告で扱う調査区（07年調査区）では遺構確認面が2面あり、上層からは古代～中世の遺構が、下層からは古墳時代の遺構が検出された。上層の遺構は古墳時代の遺物包含層であるV層を確認面とし、下層の遺構はVI層を確認面とする。V層では自然流路6条、溝1条、ピット1基、杭41か所、性格不明遺構3基が検出され、VI層においては自然流路1条、溝1条、ピット21基、土坑1基、性格不明遺構9基が検出された。いずれも建物や戸井といつた遺構ではなく、生活の痕跡は乏しい。

遺構種別の略号は、土坑=SK、溝=SD、ピット=P、性格不明遺構=SXとした。本文・観察表における平面形・断面形の分類は〔加藤1999〕を、覆土堆積状況の分類は〔荒川2004〕に準拠する。遺構の切り合い関係は、「新>旧」のように示した。

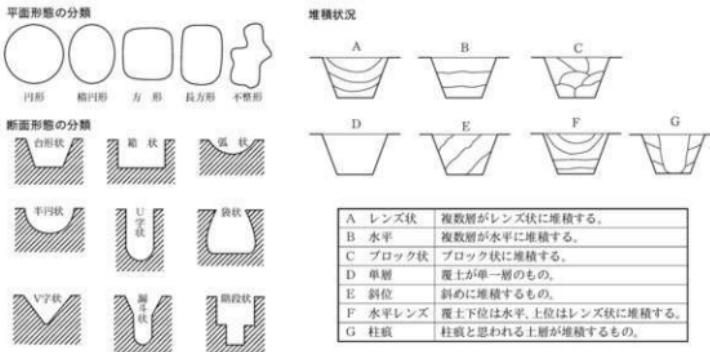
2 古代～中世（上層）

ピット（図版6・7・29）

1基のみである。P9は調査区の端で検出された。埋土中からは古墳時代の土器片が1点出土しているが混入の可能性が高く、覆土の特徴や検出状況から判断して、古代に属するものと考えたい。なお、P9周辺にはピットが一切認められず、掘立柱建物や柵列のような組み合わせを復元することはできなかった。

性格不明遺構（図版4～7・29・32）

3基検出された（SX2・3・4）。3基とも近接する河川6に連なる遺構である可能性も考えられる。いずれの遺構も良好な遺物は出土しておらず、不整形で掘り込みもごく浅い。それらを考え合わせると人為的



第7図 遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類（加藤1999・荒川2004を改変）

な遺構ではなく、自然地形上の落ち込みであった可能性も否定できない。

河川跡・溝（図版2～7・26・29～32）

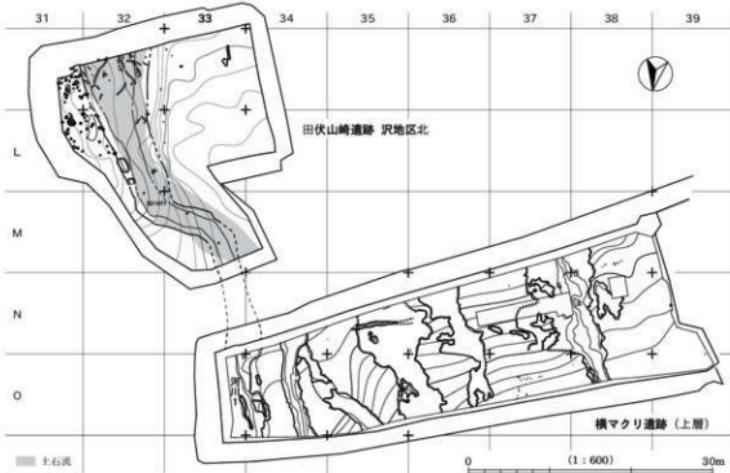
古代に属すると考えられる自然流路が6条検出された（河川1～6）。幅や深さには差があるが、いずれも方向は近似しており、自然地形の傾斜によって流れが定まったものと推測できる。

河川1は33・34ラインに位置し、調査区外へのびている。下層には拳大ほどの礫を含む砂礫層が認められ、ある程度の流れがあったと推測される。遺物は、土師器無台椀・製塩土器が多く出土した。特に製塩土器は下流側（北側）に多く分布している。

また、河川1と2を覆う礫層には人頭大ほどの大きな礫が多数認められることから、河川1・2が埋没した後に土石流が流れたことがわかる。この土石流は田伏山崎遺跡沢地区北で検出された土石流と同一であろう。さらに、同遺跡SD1077と河川1は同一の河川跡である可能性が高い（第8図）。SD1077の最深部は砂礫層であり、出土遺物の主体は製塩土器であることも、このことを裏付ける。

河川2は河川1と約3m間隔でほぼ同一方向に流れる川で、ほかの河川と異なり幅がほぼ一定である。河川2は河川3を切っており、河川2のほうが新しい。340グリッドでは河川の流れと直交して板杭が3点、川底から10cmあるいは40cm程度打ち込まれていた。遺物は少なく、土師器無台椀と古墳時代の甕が少量、製塩土器の破片がわずかに出土したのみである。河川3は上流部で河川2に切られ、河川1・2とはやや方向を変え北西に向かって流れ。中央付近から北側にかけては非常に浅く、確認面では途切れ検出された。遺物は古墳時代の壺・甕、製塩土器の破片がわずかに出土したのみである。

河川4はさらに浅く、一見不整形の落ち込みとも言えるような形状であるが、主軸や幅の共通性から河川4として調査を行った。右岸北側には深さ70cmほどの土坑状の落ち込みが認められ、覆土は単層



第8図 田伏山崎遺跡との位置関係

であることから人工的に埋められた可能性がある。埋土上部からは自然木が絡った状態で出土した。なお、覆土はSD10を挟んで上下に二分できるが、(図版5-11 上層：砂礫層および1層、下層：2～5層)、SD10河川4の埋没過程で機能していたものか、あるいは河川4よりも古い別の遺構である可能性がある。なお、北側では局所的に深い落ち込みが検出されたが、中には倒木と考えられる自然木が残っており、年代測定したところ8世紀後半～9世紀後半頃という結果となった。よってこの倒木よりも上にある砂礫層および1層は、古代以降に堆積したものであると言える。

河川5も河川4同様、不整形の浅い落ち込みに見えるような形状である。古墳時代の蛇紋岩製玉、滑石製白玉の未成品などが出土しているが、図版31に見える古墳時代の土器は、河川5ではなくV層から出土したものである。覆土が非常に浅いことから、これらの玉類はV層から出土したものと認めたか、混入したものと考えられる。

河川6の底部では拳大～人頭大の礫が認められ、ある程度の流れがあったことがうかがえるが、上層は砂とシルトの互層が主体で、流れが緩やかになったことを示している。38Nグリッドでは、墨書き土器が2点、完形に近い状態で出土した(図版31、13-29・30)。いずれも2層からの出土である。この2個体の帰属時期は、29が8世紀末、30は9世紀前半と判断される。遺物はほかに、古墳時代の甕・高杯・小壺が少量出土している。東側は浅い落ち込み状となり、単層で底面に凹凸が認められる。

杭(図版2～7・27・32・33)

杭11～杭51は、杭状または棒状の木が地面上に突き刺されたものである。37Oグリッドで21点、38Mグリッドで11点集中しているが、それ以外の地点でも疎らながら8か所で確認された。その多くが古墳時代の遺物包含層であるV層の直上～上位で検出されたが、上部を大きく欠損しV層に短く刺さったものが多く、本来はより長い杭・棒が突き刺されていたものと推測される。さらに古代の遺物包含層であるIV層の発掘調査時からすでに検出していたものもあることから、古代よりも新しい時代に属するものと判断した。特に杭50・51は、河川1が土石流で埋没した後に打ち込まれており、後出のものであることは明らかである。これら41本の杭のうち、比較的遺存状態が良くV層に深く刺さった杭39に対して炭素14年代測定を実施したところ、13世紀末～14世紀末という数値が示された(第VI章2参照)。残りの40本も形態や素材に共通点が多いことから、同時期のものである可能性がある。なお、中世にこれらの杭が構築された理由については、明確な手掛かりがなく不明である。

3 古墳時代(下層)

遺構は調査区西側(36ライン以西)に偏って分布している。上層で検出された河川1～3・6はV層を掘りこんでおり、下層においてもその痕跡をとどめる。

土坑(図版8・9・33)

平面形が円形で直径40cm以上のものを土坑とし、1基を確認した。SK130の底面からの立ち上がりはほぼ直角であるが、掘り込みは比較的浅い。土坑の周囲からは古墳時代の土器が出土しているが、覆土中から遺物は一切出土しなかった。

溝（図版 10・11・33）

1 条のみ検出された。SD151 は調査区南西隅を北東方向に走るもので、規模は小さい。遺物は出土していないが、東端が古代の自然流路（河川 6）によって切られていることや覆土の特徴から判断して、古墳時代に位置づけられる。

ビ ッ ト（図版 8～11・33・34）

21 基検出された（遺構番号は図版・観察表参照）。直径はほとんどが 20cm 前後で齊一的であるが、深さは 11～45cm とばらつきがある。断面は U 字状、覆土は単層のものが最も多く、地山土に炭化物がわずかに入るような土質で判別が難しい。遺物は、P110・115 から土師器の壺の破片がそれぞれ 1 点出土したのみで、柱痕なども検出されなかった。なお、これらのビットの多くは調査区中央に分布するが、平面配置が不規則で掘立柱建物などは確認できなかった。

性格不明遺構（図版 8～11・34・35）

9 基検出された。いずれも平面形が不整形で掘り込みが浅く、底面には凹凸が認められる。さらに調査区北側の標高が低いところに位置することから、自然地形上の落ち込みであった可能性がある。SX102 の北側はごく浅く、深さ 15cm 程度であるが、38N13・14 グリッドで徐々に深くなる（SX102b）。その南側は試掘トレンチのため堆積は不明である。試掘確認調査の際、トレンチの底面からビットらしき遺構が検出され、本調査で SX102c としたが、自然木であった。年代測定を行ったところ、1 世紀前半という結果が出ている。近辺にも腐植物や炭化物を多く含んだ土層が認められる。また、断面図をみると SX102b の下は VI a・VI b 層が堆積しているが、SX102b 覆土同様に落ち込んでいることからも、古墳時代以前の擾乱である可能性が高い。SX106 は調査区西隅で検出され、調査区境界付近で土器片が多く出土した。（図版 35）。深さは最大 19cm と浅い。底面付近から出土しているものは一部で、多くは層の上部から出土している。

河 川 跡（図版 10・11・35・36）

1 条検出された。河川 7 は、上層で検出された河川 4・5 などと同様に不整形の浅い落ち込み状を呈するもので、方向も上層同様に北西方向である。遺物は北側を中心に古墳時代前期～中期の土器が多く出土しており、該期に位置づけられる。

第V章 遺物

07年調査区から出土した遺物はテンバコ(内法54×34×10cm)57箱で、内訳は弥生時代～中世の土器・陶磁器29箱、石器・石製品11箱、木製品17箱である。上層の遺構・IV層からは主に古代～中世の遺物が、下層の遺構・V層からは弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が出土した。しかし間層が存在しないことから、上層の川跡やIV層からも弥生時代～古墳時代の遺物が定量出土している。

1 土器・土製品

弥生時代～古墳時代、古代～中世のものが出土しているが、主体時期が明確に区別できることから、時代ごとに述べる。その中で遺構出土、包含層出土の順に述べることとする。土製品については、土鍾のみの出土であることから、本項で一括する。

A 古代 (図版13・14・38・39)

1) 概要

古代の土器には土師器・須恵器・灰釉陶器・製塙土器がある。帰属時期は幅広く8世紀末～11世紀前半で、主体は10世紀前葉～11世紀前半、春日編年Ⅶ・Ⅷ期〔春日1999〕である。河川1から出土した土師器無台椀のほとんどがこの時期に属する。記載にあたっては〔春日1999〕の分類・年代観に従った。

2) 分類

食膳具 土師器無台椀で口径12～14cmのものが大多数を占め、口径16cm程度のものが少量見られる。その他、土師器有台椀・柱状高台皿・皿、黒色土器有台椀・須恵器無台杯・有台杯、灰釉陶器椀がわずかに認められる。

煮炊具 土師器小甕の底部2点を確認できたのみである。

貯蔵具 須恵器甕・長頸瓶と壺または瓶が数点出土している。

製塙土器 定量出土しているが、すべて小破片で接合せず法量は不明である。口縁部は様々な形態が認められるが、分類できるほどまとまらないことから、細分は行わない。底面にハケ調整が施されるものがある。

3) 各説

河川1(1～28) 1～10は中層あるいは中～下層出土、11～28は下層から出土したものである。1～6の土師器無台椀は口径11.1～12.9cmで、比較的小ぶりなものが多い。深身のものとやや浅身のものがある。3は歪みが著しく、器高の差は1.2cmにもおよぶ。内外面にススやタールらしき付着物が確認できる。付着物は器高が低いほうに偏っており、灯明皿として使用したものと推測される。7は黒色土器有台椀で、台の部分が欠損している。8～10は製塙土器である。8の口縁端部は指でつまみ薄く作出するが、9の端部は面を作り出す。10はハケ状工具の調整痕がわずかに認められる。

時期は概ねⅦ～Ⅱ期で、一部Ⅸ期に下るもののが存在する。

11～22は土師器無台椀で、口径が大きく浅身の11・12はV期、その他はVI期に帰属すると考えられる。14は横位で出土した（図版29）。外面3分の1ほどスヌが付着しており、器面は荒れてい。20は逆位で出土した（図版30）。全体的に厚手で、口縁端部もぼってりした印象である。見込みには黒色付着物が認められる。何らかの液体状のものを入れていた可能性がある。22は口縁部内面の一部にスヌが付着している。

23～27は須恵器である。23の甕は口縁部のみで、逆位で出土した（図版27）。写真に写っている以外の破片は接合せず、また同一個体と思われる体部破片は出土していない。23・24はV期と考えられる。26はいわゆる「壺G」と言われているものである。胎土により撇入品と判断できる。底部内面には出ベソ状に粘土塊が残る。底部は回転糸切りによって切り離すが、その後周縁を打ち欠いており、調整は粗雑な印象である。外面の大半は降灰が認められる。IV 3期の所産と考える。27は壺または瓶の底部で、高台は外端接地である。VI～VII期に位置付けられよう。

28は製塙土器の底部片である。底部は垂直に立ち上がるが、体部は聞く器形となる。

河川6(29・30) 29は河川6の中央付近から逆位で、30は左岸側から正位で出土している。いずれも2層からの出土で、底面に墨書が認められる。29は精良な胎土で白色を呈する。IV 3期に属するものと考える。墨書は「〇」に「十」が接しているように見えるが、一文字の可能性もある。30は口径10.8cmと小ぶりな有台杯で、高台は内端接地である。高台内側に墨書が見えるが、褐色の付着物が除去できないことから全容は不明である。右側に「十」、左側に「□久太」の四文字が書かれている。V期の所産である。23・29・30は胎土の特徴から高田平野の西側に点在する窯で焼かれたものと推測できる。

河川1の上 土石流(31～36) 31は須恵器の壺または瓶である。この層からは須恵器の出土は1点のみである。32は土師器で柱状高台を持つ皿で、出土はごくわずかである。33は灰釉陶器の椀である。破片資料のため断定はできないが、高台の周縁を打ち欠きしている可能性がある。VI 1～2期に帰属すると考える。34～36は製塙土器である。34の口縁端部は面取りされる。35の底部は垂直に立ち上がる。外面にはハケ目が見られる。

IVb・IVa・IV層(37～54) 37～45はIV b層出土である。37は口径16.3cm、底径7.4cmと大きく、V期に帰属するものと考えられる。38は有台椀で高台の高さは1cm、体部は比較的急角度で立ち上がる。39～45は製塙土器である。口縁端部の形態はそれぞれ異なり、41は端部をわずかにつまみ出したもので、このような形態は1点のみである。43の底部は薄い粘土盤を重ねて成形したことがうかがえる。45は底部と体部の境が比較的明瞭で、粘土組巻き上げ痕が観察できる。46～52はIV層から出土したものである。46は小甕であるが、小甕自体、本遺跡では底部が2個体出土したのみである。47は黒色土器、48は土師器の有台椀である。48は見込み中心部が出ベソ状に盛り上がっている。49～51は小皿で、49・50はやや小さく厚手、51はやや薄手で口縁部が聞く器形であるが、時期はいずれもVI期と推測できる。52は器壁が薄く、胎土の特徴から小泊産と考える。

53・54はIV a層から出土した。53は内面黒色土器であるが、口縁部外面も黒化している。口縁部と底部は接合しないが図上復元した。V期に属すると考えられる。

B 中 世（図版14・39）

数は少ないが、遺物の年代は12世紀～16世紀と幅があり、遺跡は断続的に続いていることがわかる。掲載個体数も少ないとから、種類ごとに述べる。白磁については山本〔2000〕・森田〔1982〕、青磁は

山本〔2000〕・上田〔1982〕、珠洲焼は吉岡〔1994〕、土師質土器は水澤〔2005〕の分類・年代観を参考にした。

55は四耳壺である。口縁部が内傾する器形で、頸部には細い突帯があげられ、耳の下には横沈線に入る。沈線は直線ではなく、わずかに弧状を描く。器壁は薄く、調整が粗雑でないことから、中国製の褐釉四耳壺の可能性がある。外面は二次焼成を受けている可能性がある。56は瀬戸・美濃焼の天目碗である。高台と体部の境は稜が鋭い。15世紀後半頃と考えられる。58～60は青磁である。58は龍泉窯系の盤または杯と考えられ、13世紀中頃～14世紀初頭の所産である。59は稜花皿で口縁内面に片切彫りの文様が描かれる。60は端反りの碗で文様は認められない。14世紀末～15世紀前半と推測される。57・61～64は白磁である。57は碗であるが小片のため分類等は不明である。61はやや肉厚な玉緑状口縁を有する碗IV類である。57・61は11世紀後半～12世紀前半の所産であろう。62は碗で、体部下半に縱方向のケズリを施す。外面下部のわずかな部分は無釉であることから、高台も無釉であると推測できる。14世紀後半頃と考えられる。63は碗の高台周縁を打ち欠き、平面形を略円形に仕上げる、いわゆる「加工円盤」であるが、高台も一部欠損している。高台部分は無釉である。64は全面施釉するもので、底部外面にも釉が厚く残る。63同様、底面周縁を打ち欠いている。帰属時期は13世紀後半～14世紀初頭と判断できる。

65～70は珠洲焼である。65は壺R種で、広口の口縁がつくと推測される。66は壺である。外面は平行タキ、内面は頸部のみハケ目のような調整痕が認められる。13世紀後半～14世紀前半頃と考える。67～70は片口鉢である。67～69は口縁端部が内傾しており、67・69は波状文が施される。14世紀前半～中頃と推測される。70は他と若干器形が異なり、口縁端面は水平でロクロナデの凸凹が目立つ。12世紀後半～13世紀頃と考える。71・72は土師質土器の皿で、手づくね成形である。口縁部下に段を持つ形態で、16世紀に位置付けられる。いずれも口縁外側～内面にかけてススやタールと思われる黒色付着物が認められ、灯明皿として使用したものと推測できる。73は瓷器系陶器の壺で体部下半と考えられ、押印が施されている。

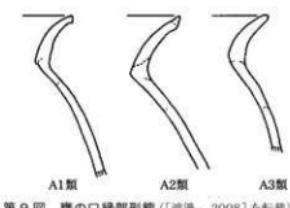
C 弥生時代～古墳時代（図版15～18・39～43）

1) 分類

器種ごとの概要を述べる。壺以外はまとめた量ではないことから、壺以外は細分類を行わない。

壺 06年調査区の分類に従った。A1類：口縁端部が面取りされるもの。A2類：口縁内外面を強くナデ調整した結果、つまり上げられたような端部を持つもので、端部内面は緩い凹線状を呈する。A3類：端部が丸いもの、面取りが顕著でないものの。B類は有段口縁を持つものである。口縁外面が無文のものと擬凹線を有するものがあるが、いずれも弥生時代後期に帰属するものと考える。このほかに頸部の屈曲が弱い小型品が1点出土している。

壺 大型品は明瞭な稜を有する二重口縁壺のみである。中型品では二重口縁でも口縁が内湾するものの、広口壺、内湾口縁でなく肩気味の球胴を呈するものなどがある。小型品では、短頸で口縁部があり開かない丸底のものが目立つ（126など）。この形態は法量が2種類認められる（124・126など）。その他、



第9図 壺の口縁部形態（[波造, 2008] を転載）

口縁部が開き球胴のもの（96）や、細頸の装飾壺（128など）がわずかに認められる。

鉢 4点出土したがすべて異なる器形であり、さらに06年調査区と同じ器形は認められない。

高杯 全形が明らかなものは1点のみであり、口縁部または脚部のみの例が多い。脚部はこの時期に特徴的な、いわゆる「畿内系屈折脚」を有するものがほとんどである。杯部については、口縁部の外傾度が比較的弱く身の深いもの（80）、口縁部の外傾度が強く身の浅いもの（98・110）とそれらの中間程度のもの（109）が認められる。

器台 受部が内湾して立ち上がるもの（06年調査区のA2類）のみである。

瓶 1点のみの出土である（146）。口縁部はほとんど開かず、なだらかにすぼまる器形で、把手の位置は体部下半である。

3) 各 説

SX102・105・106・120 (79~88) 調査区北側に点在するSXから出土した遺物は壺が主体で、少量の壺・高杯が認められる。接合しない小片が多い。壺は79・81・87・88がA2類である。遺跡全体ではA3類が多数を占めるのに対し、SXではA2類の比率が高い（A2類55%、A3類40%）。80は全形のわかる高杯である。口縁部の外傾度は弱く、比較的身が深い。屈折脚を有するが、脚部が膨らまない形態である。83壺の口縁部外面には、鋭い線状痕が斜方向に平行する。ハケ目を意識したものであろうか。86は頸部の屈曲が弱く、なだらかに体部へ至る器形である。摩耗が著しくハケ目は不明瞭である。

河川7 (89~98) 89がA2類、90・92がA3類である。90は肩部が張らず、体部最大径が中位となる長胴形を呈する。器壁は厚く、底部内部の調整は粗雑で凹凸が著しい。内部調整は圓化できなかったが、体部下位に斜方向のハケ目が認められる。91は口径13cmを測る小型の壺で、頸部のくびれがほとんど認められず、体部も張らない器形である。口縁外面のみヨコナデが施される。92は口縁部から体部の部分と、体部のみの破片を復元実測している。体部上位の横方向ハケ目が目立つが、体部すべて縱方向ハケ目の部分が多く、横方向ハケ目は一部に施されたものと判断できる。93は歪みがあり左右対称にならないが、部分的に底部境が明瞭である。95・96はいずれも小型で丸底を呈する壺であるが、形態は異なる。95は口縁部の開きが弱く、肩部は張らないが、96は頸部がややすぼまり、肩部の張る形態である。97はしっかりした底部を持ち、ハの字形に聞く鉢である。器壁は比較的薄い。体部外面はミガキが施されるが、口縁部に明瞭なハケ目が残る。そのハケ目を施した後、口縁部に沈線を描いている。98は高杯の杯部である。口縁部は大きく開き身は浅い。

河川2~6・SX4 (99~112) 上層の遺構を一括した。99~101は壺A3類である。厚手で口縁は「く」字状となる。102は口縁が内湾し球胴を呈する壺である。肩部の把手は剥落している。土器本体と把手が強く接合するように、接合部分に凹凸を作出していることがうかがえる。103・104は高杯の裾部で、おそらく屈折脚であると推測されるが不明である。105・108は口縁部があまり開かない小型の丸底壺である。105体部は斜方向のハケ目が認められるが、体部最大径付近でハケ目の方向を変えており、綾杉状を呈する。106は平底であるが、薄手で外面全面にスジが付着していることから壺の可能性が高い。

109・110は高杯の杯部で、109はやや身が深いタイプ、110は口縁部が大きく開き、身が浅いタイプである。いずれも模様を有するが、109は鋭い。111・112高杯の脚部は膨らみをもつ屈折脚である。形態が非常に近似している。いずれも内面には接合痕が明瞭に残る。111は杯部との接合面で欠損している。112は脚部と杯部を接合する粘土塊が単独で出土し、整理作業段階で接合した。

V層 (113～146) 113～119は壺である。113はA1類で、07年調査区では少ない形態である。115a・bは接合しないが、出土位置が同じであることと胎土の特徴から同一個体と判断した。全体的に器壁が薄く、口縁端部も厚2.5mmと非常に薄い。117はB類で口縁無文である。弥生時代後期の所産であろう。118は丸底で、底部は2cm近くの厚みを持つ。球胸を呈し、最大径はほぼ体部中位となる。120は平底であるが底面の厚さが3mmしかなく、非常に薄い。

121～133は壺である。121・122は二重口縁壺で、外面、内面ともに稜を有する。いずれも口径29cmの大型品で、07年調査区ではこの2点のみの出土である。123は二重口縁壺であるが内面に稜を持たず内湾する形態である。体部外面のハケ目は条痕のような粗いものを使用しており、部分的にミガキが認められる。124～126は小型で丸底を呈するものである。126は口縁下部から体部上半にかけて流れのようなハケ目が明瞭である。その後口縁上部はヨコナデされハケ目を消す。127・130は広口壺である。130外面はミガキが施される。体部中位から底部にかけてスヌが付着している。128・129は細頸の壺で、台が付くものも多い形態である。体部は扁平な梢円形あるいは菱形を呈し、頸部と体部中位に突帶を有する。突帶には擬凹線が施され、129は棒状浮文も認められる。128は赤彩される。131底面には圧痕ではなく粗いハケ目が施されている。

134～136は鉢である。134は透かしのある脚を持ち、ミガキが施される精製品である。135は丸底に近い底部を有する。調整は粗雑である。136口縁部は内湾する器形で、比較的丁寧に調整される。137～141は高杯である。高杯は脚部の出土例が多い。139は脚部中位の影みが顕著である。142～145は器台である。すべて受口状を呈するが、142は受部径が大きいなど若干の形態差が認められる。146は瓶で、本遺跡で唯一の出土である。現状は破片の状態であり、口縁部と把手付近の部分を図上復元した。

IVb・V層 (147～150) 147は壺B類で口縁部には擬凹線が施される。148の高杯は杯部と脚部を接合した際の出ベソ状粘土塊が認められるが、杯部内面にも粘土塊の接合痕が残る。149は口縁部がやや長く、球胸を呈する壺と推測される。150は短頸の小型壺で、体部最大径が下半にくる下膨れの形態である。

試掘確認調査 (151・152) 06年調査区の試掘確認調査で出土した土器である。報告書(188集)に掲載されなかったことから、今回掲載する。なお、07年調査区の試掘確認調査では良好な資料は出土しなかった。151は小型の壺である。口縁部の形態から畿内系小型壺の可能性もある。152は有段口縁を持つ壺で、弥生後期に属するものである。器壁は薄く、底部はドーナツ状を呈する。調整は不明瞭で、胎土中の混入物が目立つほど器面は摩耗している。

D 土 錘 (図版 14・39)

7点出土し、うち4点が完形品である。やや胴が張り短いもの(74・75)と、胴が張らずやや細身のもの(76)、胴張りで直径3cm程度の小型品(77・78)の3種類が認められる。小型でも孔径はそれほど変わらず1.3～1.6cmを測る。指頭痕が残るものと、磨耗が進み調整が不明瞭なものがある。

2 石器・石製品 (図版 19～21・43・44)

出土位置・層位は様々であるが、概ね下層から出土した古墳時代の土器に伴うものと推測できることから、出土層位などは一括し器種ごとに述べる。

横刃形石器（153～157） 片面に円錐面を有する剥片を素材とする石器である。「貝殻状剥片」「内磨砥石」などとも呼ばれるものであるが、姫御前遺跡〔加藤ほか2011〕では「横刃形石器」の名称を採用しており、本書もそれに倣い「横刃形石器」と呼称する。なお、06年調査区の報告書では、「内磨砥石」としている。153・154については内磨砥石に相当すると思われるが、中には、磨痕が中央付近にあるもの、あるいは磨痕の認められないものがあり、それらについては勾玉の「内磨」が行われていないことは明らかであることからも、総称として「横刃形石器」が相応しいと考える。

前述した通り、153・154は刃部を持ち、幅3～4mmほどの面を有する。刃部のみならず、正面の一定の範囲でも磨痕が確認できる。155～157は刃部を持たず、周縁に細かい二次加工が施される。155・157の背面に磨痕が認められるが、この部分が最も厚みを有し凸状になっていることから、全面を研磨した結果、盛り上がった部分のみ磨面が形成されたと推測できる。

石核（158） 横刃形石器を1点採取した石核である。158から得られた横刃形石器は長さ112.5mm、幅139.0mmである。厚さは15mm程と推測される。石材は硬砂岩である。

石鍤（159～161） 159・160は繩文時代以来の形態で、左右を打ち欠くものである。161は中央付近に抉りをめぐらせ、上部には表裏左右から垂直方向の溝を入れる。この4つの溝は頂部には到達せず、それが独立している。このように四方からの溝を入れる例は、「有頭石鍤」あるいは「中部型石鍤」などと呼ばれ、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて盛行する〔和田1985〕とのことで、本遺跡の時期と一致する。しかし161のようにすんぐりした形態ではなく、幅に対して長さの比が大きい。石材は安山岩で、触れるだけで崩れてくるほど脆い。

磨石類（162～164） 磨面のみで構成されるものは認められず、敲痕のみ観察されるものが5点、敲痕+磨痕のものが7点ある。このうち、磨面のある表裏面に敲痕が見られるものが2点（163）、そのほかは上下または側面への敲打である。磨り潰し痕は認められなかった。163は下半が欠損しているが、一部剥離よりも新しい磨痕が認められ、欠損した後も使用したことが推測される。164は下端にわずかながら敲痕が認められ、表裏の剥離は敲打によるものと判断できる。石材は、敲痕のみのものが硬砂岩3点・砂岩2点、敲痕+磨痕のものは流紋岩2点・安山岩3点・ヒン岩2点と明確に区別される。

砾石・台石（165～167） 165・167は砾石である。165の底面は縁部分まで一様に滑らかである。河川3底面から出土した（図版29）。167は表裏面と右側面に砥面を持ち、表面には線状痕が見られる。166は台石である。表面中央に磨痕と敲打痕が認められる。

玉類の各説の前に、玉類に使用された石材のうちヒスイ以外の石材について説明する。分類にあたっては南押上遺跡〔水落2011〕に準じた。南押上遺跡ではA・B・Cと多いものでは3種に分けられるが、本遺跡では基本的にそのうちの1種類しか認められない。蛇紋岩は、南押上遺跡の「蛇紋岩A」（やや軟質で透綠閃石を含むもの）のみで、最も多く出土している。滑石は南押上遺跡の「滑石B」（黒褐色でやや硬質なもの）のみである。緑色凝灰岩は出土しなかつたが、06年調査区で緑色凝灰岩A・Bが出土しており、Aは石核・剥片、Bは管玉に使用されている。

ここで、06年調査区の管玉未成品について訂正しておきたい。報告書刊行後、近接する南押上遺跡の

	砂 岩	硬 砂 岩	凝 灰 岩	安 山 岩	ヒ ン 岩	石 英 岩	流 紋 岩	蛇 紋 岩	青 銅 岩	不 明	計
横刃形石器	6	6					1	1			14
石核		2									2
打製石斧							1				1
石鏟	3		2								5
磨石類	3	2	3	2		2					12
砾石	4	1	1								6
白石		1									1
墨石など				1				1	6		8
洞片		1					1	1	2	1	6
不明			1								1
計	17	13	1	6	2	1	5	2	8	1	56

第1表 石器・石製品の石材別集計

（玉類除く）

調査により、この形態のものが東玉未成品であることが判明した。実見したところ石材も全く同じであることから、06年調査区で滑石製管玉未成品とされているものは、報告番号261以外、「蛇紋岩製東玉未成品」と訂正する。なお、261の石材は滑石Bである。

東玉未成品（168～181）40点出土した。すべて多角柱状で研磨・穿孔段階のものである。長さ：幅は1:1から2:1程度まで認められる。中央付近がやや膨らむ樽形を呈するものが多い。研磨は長軸方向に沿うものが大多数であるが、稀に垂直方向も見られる（177）。なお、長さ：幅が2:1程度の171・179・180などは、管玉未成品との区別が困難であるが、明確に管玉未成品とわかる個体がないことから、東玉として一括した。

168・169・171～177は穿孔前、170・178～181は穿孔途中のものであるが、前者、後者のサイズに違いは認められない。孔径は1.6～2.0mmである。170は穿孔痕が認められるが、その深さはわずか0.1mm程度で、直径は1.3mmと小さい。穿孔具の先端が触れた程度、いわゆるアタリをつけた段階で放棄されたものと推測できる。穿孔は両面から行われている（図版28）。石材は蛇紋岩が38点、滑石が2点と、蛇紋岩が圧倒的に多い。なお、次に述べる白玉に蛇紋岩が使用されており、東玉との区別が困難なものもある。ここでは便宜的に、長さと幅が同等程度までのものを東玉、幅が大きいものを白玉とした。ただし、177は長さを幅が若干上回るが、樽形を呈することから東玉に分類した。

白玉・臼玉未成品（182～189）16点出土した。182～185は蛇紋岩製で、研磨・穿孔段階のものである。183は多角柱に研磨する段階、182は穿孔途中、184・185は穿孔後の整形段階のものであるが、184は約半分が欠損している。断面から両面穿孔されたことがわかる。185は両面穿孔であることが確認できる。186～189は滑石製である。186～188は研磨した扁平素材の周縁に二次加工を施し、穿孔している。3点とも片面穿孔である。この後さらに周縁を研磨して円形に仕上げていくが、その段階のものは出土していない。189は完成品である。なお、同じ滑石であるが186～188は黒に近い灰色、189は黄色を呈する。

勾玉未成品（190～194）5点出土した。半月形に成形する段階（190～192）と、抉りを作出し逆C字形に成形する段階（193・194）のものがある。完成品の形態は、190～193は断面板状の扁平なもの、194は丸みを持つと判断出来る。190は半月形に成形していく段階のものと考える。最密には191・192と区別すべきであるが、数が少ないため一括した。191は背面を丸く整形する前の段階であり、稜が残る。193は背面にやや稜を残すものの、腹面に抉りを入れる。194は研磨が進んだ段階で、完成形に近い形態と思われる。190～192が蛇紋岩、193が滑石、194がヒスイである。

原石など（195）玉作に関連するのものとして、ヒスイ原石・分割・剥片が15点で356.5g、蛇紋岩は剥片・碎片が236.9g出土した。ヒスイの原石は小指ほどの大きさのものと一辺3～4cmのものがある。蛇紋岩碎片は東玉製作によって生じたものとも考えられるが、原石や荒削といった段階の資料は全く出土していない。

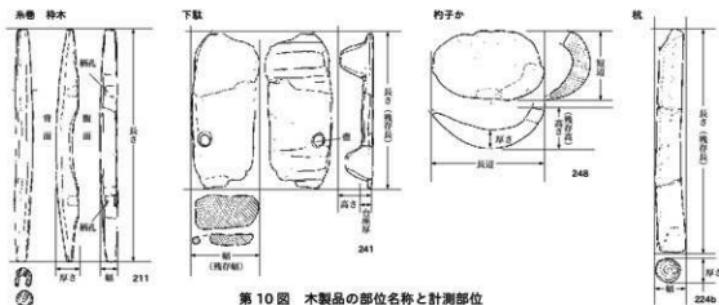
なお、玉類未成品は主に34O25、36N8・13グリッドの2か所から出土している。34O25では滑石が1点のみで、36Nグリッドに集中する傾向が認められた。ただし玉作に関連する遺構は検出されなかつた。

3 木製品

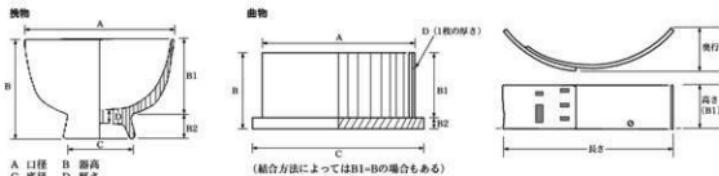
全体の出土量は、テンバコ（内法 54 × 34 × 10cm）17 箱で総数 572 点である。小型の棒状材、板材が多く、器種の判断ができるものはわずかである。集計したところ出土層位は IV b 層が 167 点と最も多く、次いで IV 層 146 点、 III 層 62 点である。河川では河川 1 が 57 点、河川 6 が 40 点と、包含層よりも少ない結果となった。木製品については帰属時期が不明なものが多いことから遺構・層位ごとに説明する。

A 記載の方針

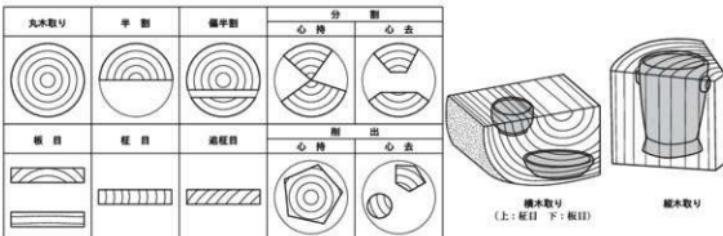
分類・呼称 器種が明らかなもの、推測できるものについては『木の考古学 出土木製品用材データベース』[伊東・山田編 2012]、『木器集成図録 近畿原始篇』『木器集成図録 近畿古代篇』[奈良国立文化財研究所（以下、奈文研とする）1993・1985] に従ったが、特定できないものも多く、『木の考古学』に



第 10 図 木製品の部位名称と計測部位



第 11 図 捣物・曲物の部位名称と計測部位（撊物は【春日 2012】より転載・改変）



第 12 図 木取りの分類

おける木製品分類のような器種の細分までは行っていない。曲物底板については、木釘孔の認められるもののを底板とし、認められないものは円形板とした。そのため、本来は底板であってもその個体の残存率が低いために木釘孔がなく、円形板としたものもある。

それ以外の用途不明のものについては、形状・断面形から、便宜的に以下のように分類した。棒状（円）：断面形が円形の棒状のもの。ただし、断面が多角形でも、円形を志向したと思われるものは、ここに分類した。棒状（角）：断面形が多角形で、幅と厚さの比率が概ね2:1未満の棒状のもの。棒状（平）：断面形が多角形あるいは楕円形で、幅と厚さの比率が概ね2:1程度の扁平なもの。棒状としたものの幅は小型品であれば4cm程度におさまる。板状：幅と厚さの比率が概ね3:1程度以上のもの。短冊状：板状のうち、厚さ5~6mmまでの薄いもので、幅は3cm程度までのもの。加工材：棒状にも板状にも該当しない不定形なもの。ただしこれは記述する際の便宜的なもので厳密な分類ではない。

器種の特定できないものは、遺物の天地の判断も困難な場合が多い。天地が不明なものについては、レイアウト上、長い面を縦方向とした。上下とも欠損している棒状や板状のものについては、図化あるいは写真撮影での設置の容易さから決定している場合があり、本来の天地とは異なる可能性があることを予め了承いただきたい。

部位名称と木取り 部位名称と計測位置は第10・11図のとおり、木取りについては第12図のとおりである。なお、断面図の木目は、木取りを示したものであり実際の年輪幅とは異なるが、幅の広いもの、狭いものがわかるような表現となるよう努めた。

B 各 説（図版21~25・44~47）

遺構・包含層の順に述べ、さらに分類ごとに述べていく。分類の順序は『木の考古学』に従つた。

河川1 中層（196~200） 196・197は曲物側板の一部である。196はケビキが一部のみに施され、継じ部に近接して木釘孔が見られる。197も木釘孔が1か所見られる。198の斎串は下端が欠損している。上からの切込みが3~4か所認められるが、劣化が進み不明瞭である。199は片端が斜めに加工された棒状の材で、同一個体と判断したが上下左右とも接合せず、個別に図化した。左右側面も割り裂いた面（以下、削製面とする）であることから、との形状は棒状ではなく板状であった可能性もある。200は棒状で先端を細める。上部の刃物痕は新しいキズである。

河川1 下層（201~207）・層位不明（208） 201・202は挽物無台盤でケヤキ製である。底径は201が11.8cm、202が11.0cmと小ぶりである。201は内面に刃物痕が少々認められる。202底部外面は一部炭化している。203は曲物側板で一部にケビキが施される。片端のみ残存しており器高は不明である。204の斎串は198同様、頭部を山形に作出し側面には上からの切込みを入れる。左側面は細かく切込み、左右非対称となっている。205は左側が欠損しており、円形板であった可能性が高い。206は左側縁に抉りを入れているように見える。左側は欠損しているため、あるいは孔であった可能性も否定できない。下部には刃物痕が認められ、うち1か所はうまく切れずさくられが生じている。207は下端をV字状に作り出した棒状材である。3片が接合するが、この状態ではほぼ完形と考える。208は箸状木製品で上端が欠損している。断面を六角形に作出している。

河川2（209・210） 河川2の底面からは板杭が3点出土しており（図版3・30）、うち2点を図化した。209は長さ52.6cmを測り、左右側面での連続加工の痕跡が明瞭に残る。210は劣化が著しく加工痕は不明瞭である。209・210の長さは、土に埋まっていた深さを示しており、打ち込まれた深さに差があつ

たことがわかる。なお、209 の年代測定を行ったところ、4 世紀後半～5 世紀中頃という数値が示された。

河川 5 (211) 糸巻の棒木であるが、1 点のみの出土である。背面は丸く作出し、上下を緩やかに細めている。横木が結合される枘孔は 2 か所あり、孔の大きさは長幅 1cm 程である。年代測定では 7 世紀後半～8 世紀後半との値が示され、古代のものと判断できる。

河川 6 (212～214) 212・213 は片端を斜めに加工した棒状材である。断面形を見ると、いずれも整つておらず削割面のままであることから加工は丁寧ではない。212 は中央付近に刃物痕が少し認められる。214 も片端を斜めに加工したものであるが、板状の材である。下部は劣化が進み薄くなっている。

ピット・杭 (215～225) 215 は P145 から出土した。角棒状材の先端を斜めに切り落としたのみの、簡易的な杭と思われる。心去の分割材を使用している。劣化が進み加工痕は不明瞭である。216 は上部がやや扁平で、下部に向かって細める棒状材である。下部表面は剥落してつぶれており、上部は欠損していることから全形は不明である。217 は下端が欠損しているが、その他の面はすべて丁寧な加工がなされている。断面は隅丸方形で、上面は丸く作り出し細かい加工痕も認められる。218・219 は 38M グリッドの杭集中範囲、220・223・224 は 370 グリッドの杭集中範囲、222・225 は単独で出土した杭である。218・219 は直径 2cm 前後とかなり小さく、杭として機能していたのか疑問が残るものである。218 は表面 1 面、219 は表面と右側面の 2 面のみの加工である。218 の樹種はトネリコ属、219 はツブラジイである。220・221 は節が多く見られ、樹種はタラノキである。表皮直下の面が残っていると推測されるが、いずれも劣化が進んでいる。223 は表面と左側面の 2 面、224 は表面 1 面のみの加工である。これらも表皮直下の面が残っていると考える。樹種は 223 がクリ、224 がスダジイである。222 の杭は河川 1 の覆土に打ち込まれたものである。上半は乾燥が進み収縮している。木取りは削出で、年輪の弧が比較的直線的であることから、原本はかなりの大木と推測される。樹種はクリである。225 は上下とも欠損しているが、遺存状態が良好で加工痕は明瞭である。樹皮が残る。他の個体と比較して年輪幅が広い。

Mb 層 (226～240) 226 は箆約子である。右側縁が欠損している。加工は丁寧で、表面に削り痕が残る。下端から 2cm 程の部分から両側縁をわずかに削って細めている。227 は左右が欠損しているが、円形板と推測される。周縁の幅 1cm 程を斜めに加工し厚みを減じている。加工は丁寧である。劣化が進み、厚みがほとんどなくなっている部分もある。228 は何らかの製品または部材の一部であろう。左右を欠損しているため全形は不明である。上下とも弧状を呈するがそれぞれの弧の中心は一致しない。裏面は全面炭化している。230 は平棒状材の下部を弧状に細めるもので、252 と近似する。上下を欠損しており全形は不明である。231 は曲物側板の小片で、231a は綴じ孔が 1 か所、231b は左右に 2 か所認められる。232 は円形板の表面に桿皮縫じが 2 列、左右それぞれ孔が 2 か所認められるものである。中央には同心円状の孔が存在する可能性がある。しかしその孔? の弧は滑らかな弧度ではないことから、円形ではない可能性もある。裏面は一部が炭化し刃物痕も認められ、転用されたとも推測される。233 は曲物底板で直径は約 13cm である。木釘孔が 4 か所あり、そのうち木釘が 2 か所残る。木釘孔の深さは 7mm 程である。

234 は略半円形を呈する板材である。裏面には加工痕が見える。上端に炭化部分がわずかな範囲で認められる。235 は杭の先端部分と考える。劣化が進み加工痕は不明瞭であるが、断面は略正方形に整えている。樹種はクリである。236～238 は棒状の材である。236 は先端をわずかに細く加工する。237 は丁寧な加工で断面を円形に作り出し、先端は丸く仕上げる。炭化は見られない。238 も断面を整った円形に仕上げている。下部をわずかに細めるが、下端を欠損しているため形態は不明である。上部には水

平方向の擦痕があり、部分的にやや細くなっていることから、紐等で縛った痕跡と推測できる。239は右側縁下部に小さい抉りがあり、部材と判断できる。240は表面以外の3面を削り出し棒状材を作り出す。表面のカーブに年輪が平行しており、表面は原本の表皮近くの面が残っていると判断できる。下端は4面を加工する。表面から左側面にかけて全面に炭化している。

M層 (241～263) 241は連歯下駄、242は無歯下駄、243は差歯下駄の歯である。241は上下と右側が欠損し緒孔が1か所しか残っていない。緒孔の直径は1.3～1.5cm、高さは3.5cmであるが、底面の劣化が進んでいるため、これよりも高い可能性がある。樹種はモクレン属である。242裏面は、平坦ではなく木目に沿った凹凸が生じているが、劣化によるものであろう。緒孔の形は扁平で長さ0.7～1.0cm、幅0.8～0.9cmである。244は黒漆塗りの椀で、高台部分が剥落していると推測される。体部上半は面取りされる。245は円形板と推測される。中央に直径1.5cmの円孔を有し、蓋板の可能性がある。周縁の幅1cm程を斜めに加工し厚みを減じている。裏面は乾燥と劣化により凹凸が著しい。246は曲物底板で表面は一部炭化している。木釘孔は2か所認められるが釘は残存していない。劣化が進んでいることから、木釘孔周辺も崩れしており、表面下部も剥落している。248は杓子の底部である可能性が高い。形状は梢円形でおそらく圓面右側に柄がつくものと推測する。口縁部は残っておらず全形は不明である。器壁は接地部分が最も厚く1.9cmで、口縁部に近づくにつれ薄くなる。木取りは横木取りの柾目で樹種はフサザクラである。

249・250は鍤と判断した。249は丸木の一面のみ平らに加工し、その面に接して抉りを1か所入れる。劣化により上下端部の加工は不明瞭である。250は上下端を丸く作り出し、中央付近の両側(対面)2か所に抉りを入れる。249・250はどちらも直径3.6cmである。樹種は249がヤナギ属、250がノリウツギである。251は把手の未成品であろうか。あるいは紡糸機の一部かもしれない。断面形は台形で上下対称形をなす。表面の上部と下部は劣化が進む。253は左側面下部を抉り、ほかは角を落とすように斜めに加工する。表面にも加工痕が認められ、下部をより薄く加工している。裏面は劣化しており加工痕は不明瞭である。254は下端を斜めに加工し、上端は平坦に作り出す。何らかの部品であろうか。255は肩部を水平になるよう抉り、頭部を山形に作り出す。下部は右側面のみ斜めに加工する。製品の一部と考えられるが種類は不明である。256は半円形または円形を呈する部材である。孔が左側に2か所、右側に並んで2か所見られる。厚さは3mmと薄い。左側縁の上部は劣化が進み、側面がつぶれている。裏面は様々な方向の刀物痕が多数認められる。257も半円形あるいは円形の部材であろう。方形の孔にはめ込まれた材が孔の幅半分ほど残る。材は板厚の2倍ほどの長さである。表面下部は炭化している。258は断面円形を呈する棒状材で、上下と中心近くの3か所に孔がある。孔は柔らかく開けやすい早材の部分を貫通している。下部は劣化が進む。260～263は棒状材で、261は断面方形、その他は断面円形を志向する。いずれも程度の差はある片端を細めるものである。263は杭とも言える形状で、加工痕は明瞭である。

Ma層 (264・265) 264は上下の両側面に「く」字状の抉りを入れた部材である。抉り部分には擦痕等の使用痕は認められない。265は片端を枘状に作り出す。枘は端面中央ではなく端から作り出されている。下部は欠損しており、わずかに残る下端は炭化している。

III層 (266～273) 266・267は漆器椀である。266は内外面黒漆塗りで見込みに赤漆文様を描く。267は外面黒漆、内面赤漆が施される。内面は赤漆が一部剥落し、下地の黒色が見える。口縁部のみであり文様は不明である。268は弧状を呈する板状の材である。加工は丁寧であり何らかの製品の一部か

部材と考える。269 箸状木製品の先端は鋭く作出される。270 は接合しないが同一個体と判断できることから、図上復元した。方形を呈すると推測される。四隅を切り落とす際、側面のみを加工するのではなく、表裏それぞれの面から加工している。中心付近に孔が 1 か所見られる。271 は短冊状の部材である。表面のみ上下線を斜めに加工する。中央付近に小さな孔を 2 か所穿ち、上端にわずかな切込みを入れる。樹種はヒノキである。272 は角棒状の部材で、上下に孔を穿つが、上部の孔は未貫通である。表裏面とも丁寧に加工しているが、本体は直線的ではなくわずかに曲がっている。意図的に成形したものかどうかは不明である。273 は板状の部材で、左側縁に孔が 2 か所見られる。下端を弧状に加工する。上端は欠損しているが、右側面も欠損している可能性がある。観察による欠損の判断ができず推定線を入れていない。表面に多数の刃物痕が認められる。

自然木（274・275）写真のみの掲載である。274 は河川 4 の 1' 層から出土した自然木で、長さは約 16cm と 7cm、直徑は 5cm 程である。樹種はクマノミズキ類で、年代測定の結果 8 世紀後半～9 世紀後半という数値が示された。遺構の調査所見とは一致する。275 は SX102c から出土した自然木で、主に節の部分である。樹種はスギで、年代は 1 世紀で弥生時代中期頃という結果が示された。もともとは確認調査で検出したビットであり、平面形や堆積状況は不明ではあるが、下層（古墳時代）の遺構検出面より 40cm 下で検出していることから、弥生時代の可能性は高い。測定結果と一致すると言えよう。

第VI章 自然科学分析

1 樹種同定

樹種同定については、発掘調査を行った2007年度に11点分析を行っていることから、2014年度は掲載遺物のうち未同定の72点を分析した。以下、分析年度ごとに記載する。

A 2007年度分析

1) 試料

試料は、河川跡やビット、性格不明遺構、包含層等から出土した木製品8点と自然木2点の計10点(分析番号Y1~10)である。このうち、部材(分析番号Y4)は孔内に木釘が残存していたことから、板と組合せ材の2点より試料採取を行っている。したがって、分析対象とした試料は11点となる。

2) 分析方法

各試料の外観や保存状況、さらに、木取り等の観察を行った後、剃刀を用いて木口(横断面)・板目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取し、サンプル瓶内に水とともに封入する。採取した切片を实体顕微鏡で観察し、各断面に相当する切片を拾い出してガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東[1982]、Wheeler他[1998]、Richter他[2006]を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林[1991]、伊東[1995, 1996, 1997, 1998, 1999]や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3) 結果

結果は第2表に示す。木製品および自然木は、針葉樹1種類(スギ)と広葉樹2種類(スダジイ・クマノミズキ類)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

(1) スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.)

D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の

幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

分析番号	報告番号	樹種	分類群	種類	木取り	出土位置		
						グリッド	遺構番号	無位
Y1	226	スギ	工具	鐵門子	柱目	3501		N b
Y2	209	スギ	土木材	板杭	柱目	34019	河川2	
Y3	211	スギ	結構具	糸合の仲木	削出	36N23	河川5	1
Y4	257	スギ スギ	部材	板	削出	36N21		N
Y5	274	クマノミズキ類	自然木			35015	河川4	1'
Y6	275	スギ	自然木			38N3	SX102c	1
Y7	242	スギ	服飾具	無函下駄	遺構11	35021	イ	N
Y8	217	スギ	不明		削出	37N5	机23	
Y9	224b	スダジイ	土木材	杭	丸木	37012	机39	
Y10	215	スギ	土木材	杭か	分割 (心去)	36N9	P145	

第2表 2007年度分析 樹種同定結果

(2) スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、道管は1-3個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

(3) クマノミズキ類 (*Cormus*) ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が直立細胞となる異性、1-6細胞幅、1-30細胞高。

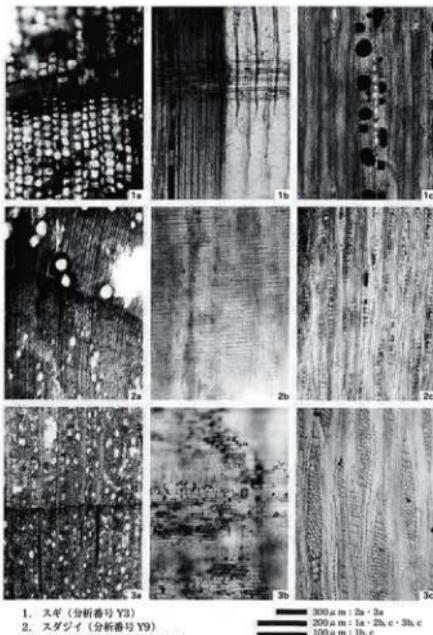
以上の特徴からミズキ属の中でもクマノミズキやヤマボウシと考えられる。

4) 考 察

木製品・杭材9点は、芯持丸木の杭1点(分析番号Y9)を除く8点がスギであった。木製品の器種は、杓子、部材および組合せ材、糸巻の棒木、板杭、下駄、杭と多岐に渡り、様々な木製品にスギが利用されていたことが推定される。スギが多く利用される傾向は、糸魚川市内の山岸遺跡・前波南遺跡・六反田南遺跡の調査でも確認されている。なお、スギが多用された背景としては、スギ材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性を有するといった材質的特徴や、特に割裂性を利用した板状の加工が容易であることから、籠杓子、板杭、無歯下駄などの板状の製品を製作するのに適していたことなどが推定される。

一方、自然木2点は、スギとクマノミズキ類であった。スギは、水分の多い土地を好む樹木であり、周囲の低地にスギが生育していた可能性がある。したがって、上記したスギ材が多用された背景には、周囲にスギが生育し、入手が容易であったことなども考えられる。また、クマノミズキ類は、林縁部などに普通にみられる落葉広葉樹であり、周囲の山地斜面などに生育していた可能性がある。

芯持丸木の杭に認められたスダジイは、暖温帶性常緑広葉樹林を構成する常緑高木である。新潟県では、沿海地を中心に常緑広葉樹が分布していることから、スダジイも周囲に生育している可能性がある。(2008年3月)



第13図 木製品の光学顕微鏡写真(1)

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz Land Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

B 2014 年度分析

1) 試 料 と 方 法

試料は、河川跡などから出土した曲物や漆器椀、下駄、斎串、杭材などの木製品 72 点である。遺構の時期は、河川 1・2・6 が古代、杭 12・18・22・30・34・36・43・51 が中世、層位では IV 層が古代～中世、IV b 層が古代主体、IV a 層が中世主体、III 層が中世と推測されている。

これらの試料から、削刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラーで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

2) 結 果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亞属、スギ、ヒノキ、アスナロの 4 分類群、広葉樹はヤナギ属、クリ、ツブライジ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、フサザクラ、ノリウツギ、タラノキ、トネリコ属トネリコ節(以下、トネリコ節)の 10 分類群、計 14 分類群が確認された。遺構および層位別の樹種構成を第 3 表、結果の一覧は巻末の観察表に示した。全体ではスギが 51 点で最も多く、過半数を占めている。その他の樹種は、それぞれ 3 点以下である。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 14・15 図に示す。

(1) マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科 第 14 図 1a-1c (No.225)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエビセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亞属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第 14 図 2a-2c (No.269)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂

性は大きい。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第14図 3a-3c (No.271)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(4) アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 第14図 4a-4c (No.259)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材の加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

(5) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 第14図 5a-5c (No.249)

やや小型の道管が、単独もしくは数個複合してやや密に分布する散孔材である。道管の穿孔は單一となる。放射組織は単列で、異性である。

ヤナギ属は暖帯、温帯、寒帯に広く生育する落葉高木または低木で、ケショウヤナギやコゴメヤナギ、シダレヤナギなど、日本では90種程度がある。材は全般に軽軟で、強度は低いが韌性があり、切削加工は容易である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 第14図 6a-6c (No.222)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(7) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 第14図 7a-7c (No.219)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

(8) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第14図 8a-8c (No.267)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は單一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイスブナがある。材は堅硬および緻密で、韌性があるが保存性は低い。

(9) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第14図 9a-9c (No.244)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3～5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

(10) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 第14図 10a-10c (No.243)

小型の道管が、単独もしくは3~4個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列~階段状、道管の穿孔は單一である。放射組織は1~2列幅で、上下端の1~2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木および高木で、タイサンボクやホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度だが、緻密で狂いが少ない。

(11) フサザクラ *Euptelea polyandra* Siebold et Zucc. フサザクラ科 第15図 11a-11c (No.248)

小型の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晚材部でやや小型化する。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は6~10列幅程度の異性で、細胞高は1mm以上ある。

フサザクラは温帯から暖帯上部に分布する落葉高木である。材はやや重硬で割れにくいか強い。

(12) ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. ユキノシタ科 第15図 12a-12c (No.250)

小型でやや角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は40段程度の階段状である。放射組織は異性で、1~2列幅で单列部と多列部の幅が同じである。

ノリウツギは北海道から九州（屋久島まで）に分布する落葉小高木あるいは低木である。温帯林の先駆樹種で、伐採跡地に最初に出現する種の一つである。材は強靭である。

樹種名	河川1	河川2	河川6	机12	机18	机22	机30	机34	机39	机43	机51	—			IV	IV b	IV a	III	計	
												下中	13	—						
樹種別 時期												古代		中世か	古代	~中世	古代土体	中世土体か	中世	
マツノ属 被子植物														1					1	
スギ	5	7	1	2	1									13	14	2	5	51		
ヒノキ														1		1		2		
アヌラロ														1				1		
ヤナギ属														1				1		
クリ														1		1		3		
ツブラジイ														1				1		
ブナ属														1				2		
ケヤキ														1				3		
モクレン属														1				2		
フサザクラ														1				1		
ノリウツギ														1				1		
タラノキ														1				2		
トネリコ属トネリコ節														1				1		
計	7	7	1	2	1	1	1	1	1	1	1		20	15	2	9	72			

第3表 道構別の樹種構成

樹種分類	結織具	服飾具	容器	食事具	祭祀具	土木材	その他								計					
							種	若	通	曲	舟	漆	漆	漆	均	均	漆	板	円	
樹種	名	器種名	器種名	器種名	器種名	器種名	材	若	通	曲	舟	漆	漆	漆	均	均	漆	板	円	
マツノ属 被子植物																				
スギ							5	2				4	2	1	2	1	2	1	7	1
ヒノキ																	2		2	
アヌラロ																	1		1	
ヤナギ属							1													
クリ																			1	
ツブラジイ																			3	
ブナ属																			1	
ケヤキ																			2	
モクレン属							1	1											2	
フサザクラ																			1	
ノリウツギ																			1	
タラノキ																			2	
トネリコ属トネリコ節																			1	
計	2	1	1	5	2	1	1	1	2	1	4	2	7	1	2	1	3	1	24	

第4表 器種別の樹種構成

(13) タラノキ *Aralia elata (Miq.) Seem.* ウコギ科 第15図 13a-13c (No.220)

年輪のはじめにやや大型の道管が数列並び、晚材部では小道管が単独もしくは数個複合して斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一である。放射組織は3～5列幅の異性で、不完全な鞘細胞がみられる。

タラノキは温帯から暖帯に分布する落葉低木である。材の強度は中庸である。

(14) トネリコ属トネリコ節 *Fraxinus sect. Ornus* モクセイ科 第15図 14a-14c (No.218)

年輪のはじめに大型の道管が1列程度並ぶ環孔材で、晚材部では厚壁の道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で1～3列幅である。

トネリコ節は温帯に分布する落葉高木で、トネリコやアオダモなど7種がある。材は中庸～やや重硬で、切削加工は容易、保存性も中庸である。

3) 考察

横マクリ遺跡から出土した木製品の樹種同定結果は、スギを中心とする樹種構成となった。なお、遺構ごとに分析点数が大きく異なるため、遺構や時期による樹種構成の違いまでは確認できていない(第3表)。

器種別の樹種構成を第4表に示す。鍤や下駄、漆器類、杭材では広葉樹が用いられているが、それ以外では、板状の木製品を中心にスギが多用されている。スギは軽軟なため加工が容易であり、また木理直通で割理性も大きく、製作しやすい材である。

筋縫具の鍤と思われる木製品では、ヤナギ属とノリウツギが各1点確認された。ヤナギ属は軽軟な材、ノリウツギは強韌な材である。

下駄は連歛下駄と、差歛下駄の歛が各1点で、ともにモクレン属であった。モクレン属の材は緻密だが加工容易で、下駄の素材としてよく用いられる。

容器では、曲物は底板、側板とともにすべてスギであった。一方、漆器碗や挽物では広葉樹のブナ属、ケヤキ、フサザクラが用いられていた。ブナ属とケヤキは、漆器の素材として一般的である。

食事具や斎壇、その他の用途不明木製品は、ほぼスギであった。短圓状の部材でヒノキ、不明木製品でアヌロも確認された。

杭材では、板杭でスギが1点みられたが、丸木や削出の試料ではスギは確認されず、マツ属複維管束亞属とクリ、ツブライ、タラノキであった。これらの材は二次林的要素の強い樹種である。杭材には遺跡周辺の植生が反映される傾向があるため、周辺は日当たりのよい開けた環境であったと推測される。

06年の調査で行われた樹種同定でも、エブリや浮子など木製品の多くにスギが用いられ、漆塗椀ではケヤキ、自然木ではハンノキ亜属が確認されている〔野村2008〕。今回の樹種同定結果も、以前の調査結果と類似した樹種構成を示している。北陸地方はスギを多用するスギ文化圏であり〔鈴木2002〕、地域の木材利用傾向とも一致する。

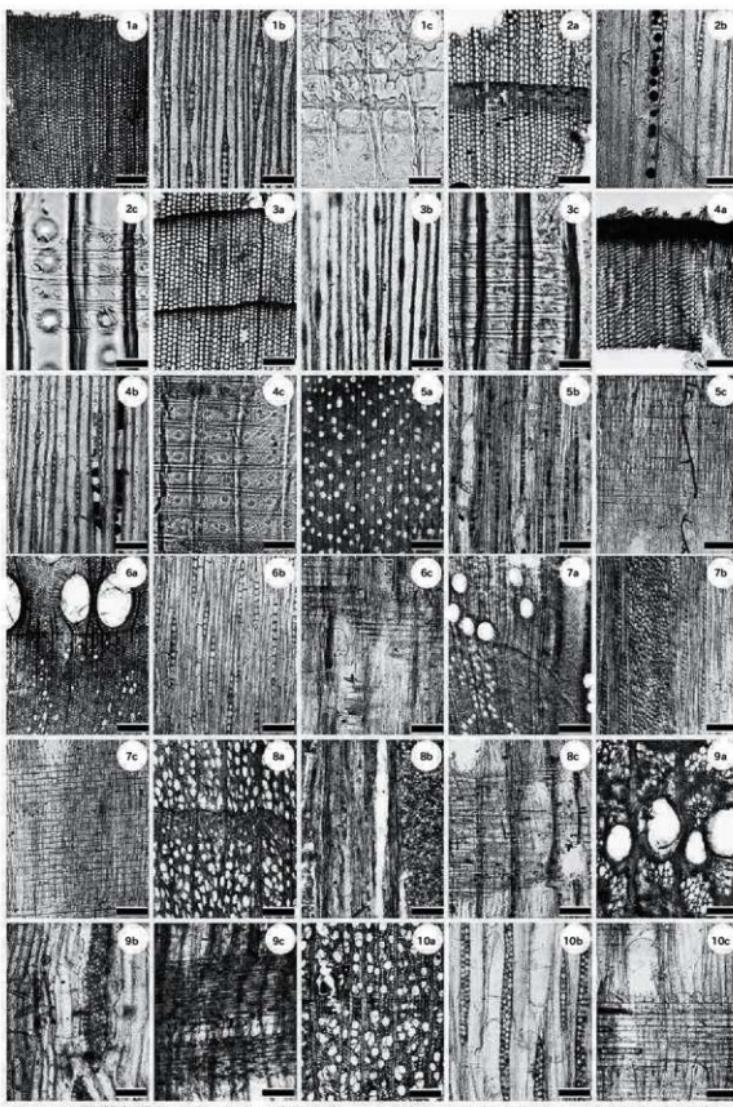
(2014年12月)

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。

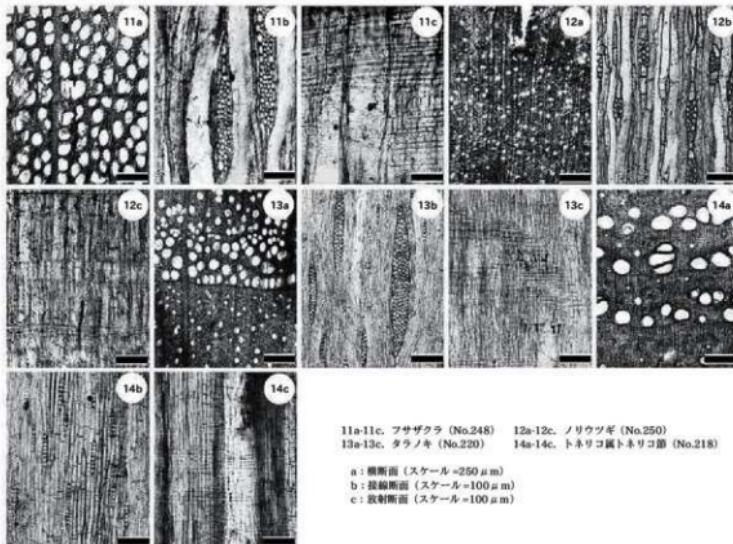
野村敏江(2008)樹種同定、「横マクリ遺跡」:48-49、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木三男(2002)日本人と木の文化、255p、八坂書房。



a: 横断面 (スケール=250 μm) b: 接線断面 (スケール=100 μm) c: 放射断面 (スケール=1-4:25 μm, 5-8:100 μm)

第14図 木製品の光学顕微鏡写真 (2)



第15図 木製品の光学顕微鏡写真（3）

2 放射性炭素年代測定

1) 測定対象試料

測定対象試料は、河川2(34019グリッド)から出土した加工材(試料⑦:IAAA-72558)、河川5(36N23グリッド)の1層から出土した糸巻の棹木(試料⑧:IAAA-72559)、杭39(37D12グリッド)(試料⑨:IAAA-72560)、河川4(35O15グリッド)から出土した自然木(試料⑩:IAAA-72561)、SX102c(38N3グリッド)から出土した自然木(試料⑪:IAAA-72562)、合計5点である。

2) 化学処理工程

1. メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
2. AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
3. 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
4. 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
5. 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

6. グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

3) 測 定 方 法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

4) 算 出 方 法

- 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 付記した誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定が行われ、測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{ApDB}) / ^{13}\text{ApDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ^{14}As : 試料炭素の ^{14}C 濃度 : $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{s}}$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{s}}$

^{14}Ar : 標準現代炭素の ^{14}C 濃度 : $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$

- $\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に (加速器) と注記する。

- $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 (^{14}As) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{As} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{As} \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (\%)$$

- pMC (percent Modern Carbon) は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のような。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、 ^{14}C 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1] = -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

- ^{14}C 年代値と誤差は、1 術目を四捨五入して 10 年単位で表示される。

8. 厳年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。厳年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差(1 σ = 68.2%)あるいは2標準偏差(2 σ = 95.4%)で表示される。曆年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算にIntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

測定番号	試料番号	採取地点	種類	$\sigma^{14}\text{C}$ (%) (AMS)	$\sigma^{14}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-72558	⑦ 河川2 (34019)	加工材	-25.14 ± 0.58	1640 ± 30	81.58 ± 0.29	
IAAA-72559	⑧ 河川5-1層 (36N22)	糸巻の枠木	-21.85 ± 0.76	1250 ± 30	85.63 ± 0.30	
IAAA-72560	⑨ 杖39 (37012)	杖	-24.48 ± 0.79	640 ± 30	92.29 ± 0.33	
IAAA-72561	⑩ 河川4 (35015)	自然木	-27.82 ± 0.70	1210 ± 30	86.03 ± 0.34	
IAAA-72562	⑪ SX102c (38N3)	自然木	-24.77 ± 0.79	1990 ± 30	78.07 ± 0.29	

[# 2125]

第5表 放射性炭素年代測定結果

測定番号	$\sigma^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)
	Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-72558	1,640 ± 30	81.55 ± 0.27	1635 ± 28
IAAA-72559	1,190 ± 30	86.19 ± 0.27	1245 ± 28
IAAA-72560	640 ± 30	92.39 ± 0.29	644 ± 28
IAAA-72561	1,250 ± 30	85.54 ± 0.31	1208 ± 31
IAAA-72562	1,990 ± 30	78.11 ± 0.26	1988 ± 30

[参考値]

第6表 曆年較正年代

5) 測定結果

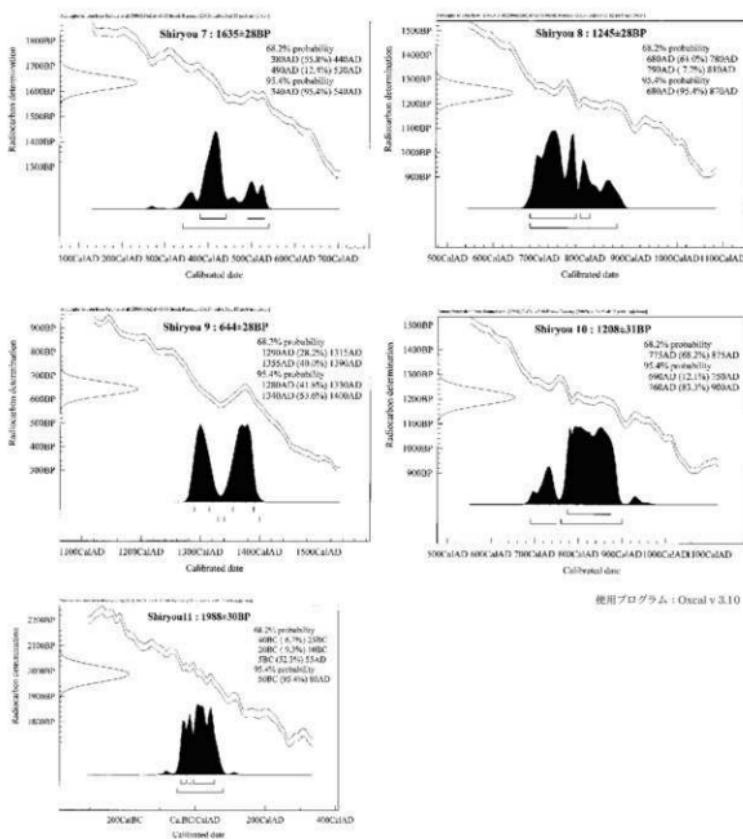
¹⁴C年代は、河川2から出土した加工材(試料⑦: IAAA-72558)が1640 ± 30yrBP、河川5の1層から出土した糸巻の枠木(試料⑧: IAAA-72559)が1250 ± 30yrBP、杖39(試料⑨: IAAA-72560)が640 ± 30yrBP、河川4から出土した自然木(試料⑩: IAAA-72561)が1210 ± 30yrBP、SX102cから出土した自然木(試料⑪: IAAA-72562)が1990 ± 30yrBPである。

曆年較正年代(1 σ = 68.2%)は、試料⑦が380 ~ 440AD(55.8%)・490 ~ 530AD(12.4%)、試料⑧が680 ~ 780AD(61.0%)・790 ~ 810AD(7.2%)、試料⑩が1290 ~ 1315AD(28.2%)・1355 ~ 1390AD(40.0%)、試料⑪が775 ~ 875AD、試料⑨が40 ~ 25BC(6.7%)・20 ~ 10BC(9.3%)・5BC ~ 55AD(52.3%)である。試料の炭素含有率は60%程と十分であり、化学処理および測定内容に問題がないことから、妥当な年代と考えられる。

(2008年3月)

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第16図 暦年較正年代グラフ

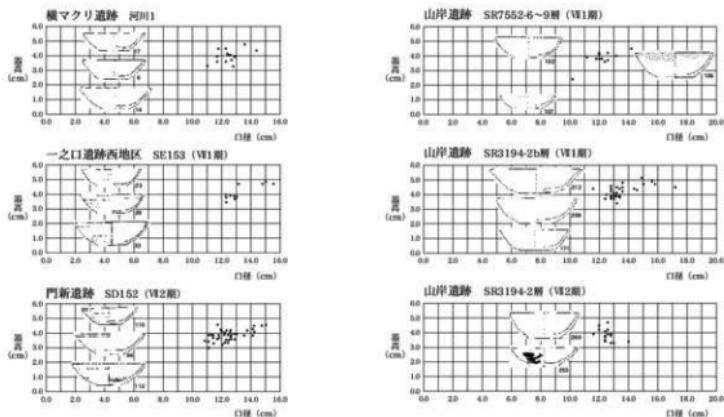
第VII章 まとめ

1 土器

A 古代の土器

07年調査区では、土師器食膳具を主体とする土器・陶磁器が定量出土した。特に河川1からは遺存状態の良好なものがやまとまっている。これらの資料の編年的位置付けを考えてみたい。

河川1から出土した土師器無台椀は口径11~14cm、器高3~5cm程度であり、第17図に図示した。口径12.5cm、器高4cmを中心にもとまり、一方、口径14cm前後に2点のみであるが分布する。法量の二分化が認められるようになるのはVII1期で、徐々に両者の差が広がると考えられている〔春日1997〕。また、当該期に位置づけられている山岸遺跡SR3194-2層・2b層、一之口遺跡西地区SE153等と傾向も一致することから(第17図)、VII1~2期に位置づけられる。



第17図 土師器無台椀の法量

〔春日1997〕・〔春日1997〕・〔鈴木1994〕より転載・改変)

器種構成比率を第7表に示す。遺跡全体の数値では時期の異なるものも含む。河川1において、製塙土器を除いた比率は、土師器食膳具97.8%、黒色土器1.3%、須恵器0.9%であった。煮炊具は出土していない。土師器が圧倒的多数を占め、煮炊具がほとんど出土しないのはVII~VIII期の特徴である。一括資料でないこと、V期の資料もわずかながら含まれているため参考程度ではあるが、器種構成比率においても概ねの傾向は一致すると考えたい。

本遺跡から出土した土器の大半は、近接する田伏山崎遺跡から流れてきたものと考えられる。田伏山崎遺跡出土土器はVII~VIII期と位置づけられており、今まで述べてきたことを実証する。ちなみに、田伏山崎遺跡では製塙土器が多数を占め、土師器の比率は10~20%、須恵器は10%に満たない〔佐藤ほか

器種	河内1			滋賀全体		
	範片数	口縁残存率/26	口縁部比率	範片数	口縁残存率/26	口縁部比率
土師器	160	305.5	54.92%	447	1129	68.65%
加古輪	1	2.5	0.53%	1	2.5	0.15%
有台輪				3	9	0.59%
輪						
有台器						
小瓶	6	29.5	6.22%	30	94.5	5.79%
黒色土器	4	4	0.84%	3	5	0.20%
加古輪				2	12.5	0.70%
有台輪				18	32	1.95%
輪	2	1	0.21%			
灰土器						
加古輪				1	2.5	0.15%
有台輪						
輪						
从知窓附 輪						
食器類 合計	180	396	83.46%	512	1362.5	82.85%
土師器 小瓶				2	3	0.18%
煮炊具 合計				2	3	0.18%
眞北器 席(巻)						
風						
壺または瓶				1	1.5	0.09%
壺または瓶				1	3	0.18%
焼				2	32.5	1.98%
壺または瓶						
貯蔵具 合計				4	37	2.20%
製陶土器 合計	73	78.5	16.54%	237	242	14.72%
合計	253	474.5	100.00%	755	1644.5	100.00%
				467	2210	100.00%

第7表 古代の土器 器種構成比率

2009]とのことで、その様相は若干異なるようである。

B 弥生時代～古墳時代の土器

次に、弥生時代～古墳時代の土器の編年的位置付けについて見てみたい。包含層からの出土が多いことから、器種ごとに様相を述べる。時期区分については〔淹沢2005・2011・2014〕を参考とし、呼び方については普遍的に使用されている漆町編年〔田嶋1986〕□群併行＝□期とする。

甕が全形がわかるものは4個体のみである。口縁端部が丸く(A3類)、球胴を呈する116、長胴を呈し底部内部調整が粗雑な90は12期前後と判断できる。ほかのA3類については口縁部のみであるため断定はできないが、同時期に属するものが多数を占めると推測される。ただし92は器形から8～9期と考えられる。A1類、A2類については8～9期の可能性が高い。B類は弥生時代後期の2期と考えられる。小型甕については変遷が明確でないため時期の確定はできないが、91は古墳時代前期(以下、前期とする)の可能性が高いと考える。

甕の口縁部形態について集計したものが第9表である。A3類が圧倒的に多い。06年調査区ではA1類が最も多くA2類・A3類とも比較的拮抗しており、様相が異なる¹¹。06年調査区では8～9期が主体で古墳時代中期(以下、中期とする)に位置付けられる土器は認められない。A3類自体は弥生時代から続く口縁部形態であるが、器形等の特徴から07年調査区の資料の大多数は12期前後と考えられ、新しい様相を示す。

器種	範片数	口縁残存率/26	口縁部比率	範片数	口縁残存率/26	口縁部比率
甕	254	700	59.40%	54	1140	37.20%
壺	34	251	21.20%	14	380	19.07%
壺か瓶	2	8	0.68%	13	205	10.29%
瓶	8	69	5.83%	4	71	3.56%
高杯	10	53.5	4.54%	17	110	5.52%
盤	7	94.5	8.02%	5	59.5	2.98%
高杯小盤合	1	2.5	0.21%	6	27.5	1.38%
合計	316	1178.5	100.00%	113	1993	100.00%

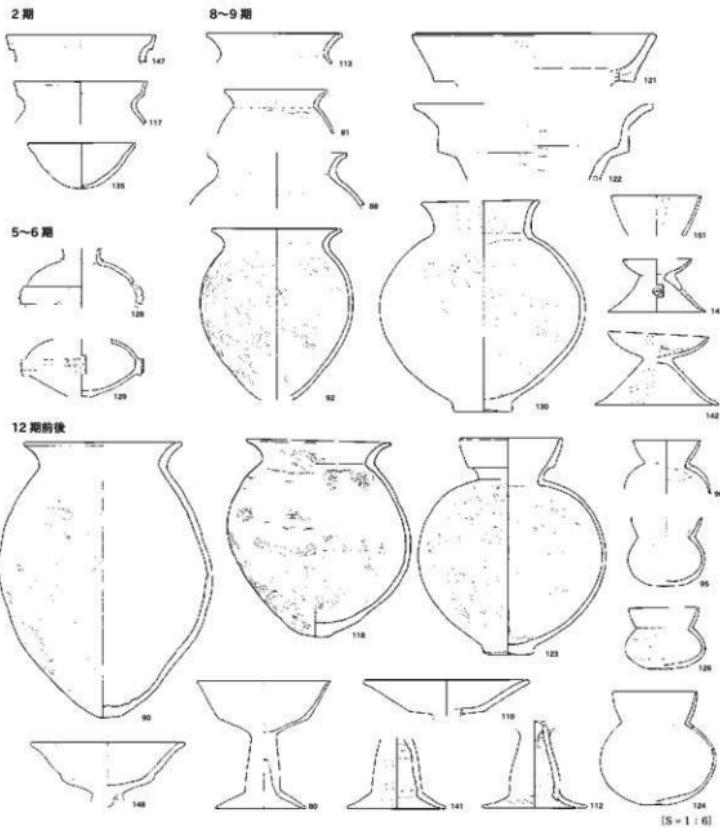
¹¹No.151・152は06年調査区出土となることからここに含まない。

第8表 古墳時代の土器 器種構成比率

1) 06年調査区ではブロック(遺物集中区)ごとに比率を示しており、ブロックによって様相は異なるが、全体的にA1類が優位という状況は変わらない。なお、06年の比率の算出は破片数による。

分類	範片数	残存率/26	比率
A1類	29	78.5	11.2%
A2類	35	122.0	17.4%
A3類	180	478.5	68.4%
B類	5	15.0	2.1%
分類不可	5	6.0	0.9%
合計	254	700.0	100.0%

第9表 甕の口縁部形態比率



第18図 弥生時代～古墳時代の土器

壺で特徴的なのは小型丸底のものが目立つことである。胴部最大径 10cm 程度と 14cm、2 タイプの法量が認められる。形態は口縁部が内湾し直立気味のもの（95・126 など）（浅沢 2014 の 1 型）と口縁部が開き球胴になると思われるもの（96）（同上類）、畿内系小型丸底壺の可能性があるもの（151）が存在する。151 は前期の可能性が高いが、それ以外のものは 12 期前後であろう。二重口縁壺のうち 136・137 は段が明瞭であることから、8～9 期に位置づけられる。123 は段が不明瞭で内湾口縁を持つことから中期と判断できる。広口壺（127・130）や、長い口縁部を持ち、球胴を呈すると推測される 149 は前期の可能性が高い。また、前期でも 5～6 期の資料として 128・129 の細頸装飾壺がある。102 は時期の特定が困難である。肩部に把手の痕跡があるが、把手を有する例は現在のところ認められない。

高杯は、脚部のうち器形が判断できるものは大多数が屈折脚で、ハの字形はわずかである。杯部は口縁部が大きく開き身の浅いもの(98・110)と、やや身の深いもの(109・120等)が存在する。いずれも12

期前後に位置づけられよう。その中でも 80 は脚部の膨らみが少なくやや古い様相を呈し、11 期¹⁾に属する可能性が高い。

鉢は出土数が少なく、判別できるものは可能な限り図化したが、掲載した 4 点ともそれぞれ器形が異なる。135 は口縁部にわずかな段を有し身が浅いものであるが、2 期に類例がある〔沢 2010〕。97 も同時期の可能性がある。134 は有段口縁を呈する鉢であるが、台が付くものは珍しい。鉢部分の器形から前期に属するものと推測できる。136 も 134 と同時期と考えられる。

器台も数が少ない。すべて前期に属するものと判断できる。そのなかでも受部径が大きめの 142 は古相を呈し、144 は 8 期、台部分が寸詰まり傾向の 143 はそれより新しく 9~10 期に位置付けられる。なお、透かしについてはほとんど認められず、図化した個体のほかに数点認められる程度である。

瓶は 1 点のみの出土である。中期でも新しい段階になると見られるものであるが、最も古い例として胎内市天野遺跡例が 13 期に位置づけられている〔沢 2014〕。1 例のみであり位置付けにはやや不安を残すが、13 期以降としておきたい。ちなみに、07 年調査区からは古墳時代の杯・碗は全く出土していない。

これらをまとめると、2 期：有段口縁甕・鉢、5~6 期：細頸装飾壺・(甕)、8~9 期：甕・壺(二重口縁壺・広口壺・畿内系小型丸底咲)・器台、12 期前後：甕・壺(二重口縁壺・小型丸底系)・高杯(屈折脚)があり、出土量は 12 期前後が最も多く、8~9 期が定量、2 期と 5~6 期はわずかという結果になった。なお、いずれの時期もすべての器種が揃うことはなく、器種構成が不明である。

以上のことから、06 年調査区では弥生時代後期と古墳時代前期(8~9 期)・後期の資料が出土しているが、07 年の調査により、8~9 期と 12 期前後を主体として弥生時代後期から古墳時代後期まで断続的に続くことが明らかになった。

2 玉作について

糸魚川地域では玉の素材となる石(ヒスイ・蛇紋岩・滑石など)が豊富にあることから、古来玉作が盛んであった。古墳時代においては、発掘された遺跡の多くから玉作に関連する遺物が出土していることが特徴的である。07 年調査区からは麋玉を主体として白玉・勾玉の未成品・成品が出土した。

本遺跡の 2km ほど西に位置する南押上遺跡では玉作関連遺物が多量に出土し、勾玉・管玉・麋玉の成品・未成品については工程分類が行われている。なかでも、全国的にも希少といわれる麋玉の

	地質剖		地G		セイ		合計		06 調査 出土点数	備考
	層位 番号	基層 番号	高さ (cm)	層位 番号	高さ (cm)	層位 番号	高さ (cm)	合計 高さ (cm)		
東玉 多角柱切形	19	17.46	2	3.94			21	20.80		
穿孔途中	15	13.99				15	13.99	3	うち 7-2 三脚れ	
穿孔途中	4	2.07				4	2.07	2	うち 2 三脚れ	
合計	38	33.52	2	3.94		40	36.86	5		
白玉 多角柱切形	1	0.36				1	0.36	1		
穿孔途中	1	0.58				1	0.58			
穿孔途中	2	0.62	11	2.26		13	2.88		うち 10 三脚れ	
完成品			1	0.12		1	0.12			
合計	4	1.58	12	2.38		16	3.96	1		
等玉 球形(中期一回轉) (中期(中期))	3	4.83				3	4.83			2
内腔(足 C 直接) 完成品		1	0.65	1	3.01	2	4.16			1
合計	3	4.83	1	0.65	1	3.01	5	8.99	3	
東玉 穿孔途中	3	4.83								1
完成品										1
合計	3	4.83								2
東玉 穿孔途中	3	4.83								1
完成品										1
合計	3	4.83								2
東玉 穿孔途中	8	82.04	2	62.32	8	137.66	16	282.02	363	
神 片	-	23.54						23.54		
黒 石						7	218.82	7	218.82	7
合計	31	356.51	17	68.69	16	359.99	84	785.19	382	

備考：例：3-2-07 年調査区では前回開削されているもので、神片を含む可能性がある。

第 10 表 玉作関連遺物の集計

1) 以前は 12 期から中期という考え方が主流であったが、近年、11 期を大きな二期としてとらえる動きがあり〔田嶋 2009 など〕、最近は 11 期から中期とする論文が多いようである。本書でも沢 [2011・2014] の分類と編年案に準じてることから、11 期で区分している。

製作工程品が100点近く出土している。第V章で述べたように、本遺跡とはかなり様相が近似していることから、南押上分類〔水落2011〕を参考として本遺跡出土資料をみてみたい。

棗 玉

第1工程：原石採集・素材の獲得段階 拳大程度の大型剥片が相当する。本遺跡では出土していない。

第2工程：荒削段階 大型の剥片から小型の剥片を剥離する。長さ4cm程度の剥片3点、2cm弱の剥片が2点出土しているのみである。

第3工程：調整剥離段階 手ごろな大きさの剥片に剥離を加えて寸胴な形に成形する段階。軟質な石材を利用しているため、管玉の側面調整のような剥離は認められないが、南押上遺跡では次工程の研磨段階に二次的な剥離痕を有する個体があり、この段階の存在を認めている。本遺跡では出土していない。

第4工程：多角柱研磨段階 寸胴に成形された剥片に研磨を施し、多角柱に整形する段階。中には、断面がほぼ円形になる程度に研磨し、稜が不明瞭なものもある(171など)。樽形を志向しているとわかる個体が多いが、その度合いはわずかで、明らかに胴部中央が張る形態のものは認められない。

第5工程：穿孔段階 すべて両面穿孔で行われている¹⁾。本遺跡で出土しているのは、片面から穿孔が開始されたばかりでそれほど進んでいない段階のもの、穿孔途中で破損したものが多数である。

第6工程：仕上げ段階 穿孔された資料をさらに研磨して整形し、綫長の偏球状に仕上げる段階。5点出土したがすべて削れており、縦方向に、孔を中心として二分された状態である。本遺跡では成品に近い形態のものは出土しておらず、前段階と同じ形態であることから、穿孔後早い段階、あるいは穿孔直後に削れたと推測でき、厳密には第6工程とすべきではないかもしれない。

本遺跡では第1・3工程が出土しておらず、第2工程も剥片が数点認められるのみで、主に第4・5工程と碎片のみの出土である。完成品は遺跡外へ持ち出されたと考えられることから不自然ではない。また、

	研磨(第4工程)	穿孔(第5工程)	完成品
横マクリ遺跡	 169 171 172 175 176 177	 178 179 181 182	
南押上遺跡	 582 581 618 755 680 584	 578 576 722 617 579 575 855 856 665 571 637 648 751	

第19図 棗玉の製作工程

1) 06年調査区において1点両面穿孔とされているものがあるが(報告番号192)、実見したところ回転痕は不明瞭であった。片面穿孔とは断定できないため、両面穿孔である可能性もある。

碎片の出土量がある程度認められることから、第2工程以降の作業も遺跡内で行われていた可能性がある。第1工程の原石・大型剥片が全く出土しなかったのは、調査範囲外には存在しているがたまたま出土していないか、もしくは第2工程の剥片の状態で遺跡に持ち込まれたかという理由が考えられる。南押上遺跡では原石以外の種類、第1工程から完成品まで揃っている。想像を逞しくすれば、南押上遺跡が最初から最後までの工程を行う大規模な工房だとすれば、横マクリ遺跡は研磨・仕上げのみを行う小さな工房であったのかもしれない。

勾 玉

半月形に成形して全体を研磨する段階（南押上第5工程）と、次段階の腹部に抉りを作出する段階（南押上第6工程）のものが計5点出土しているのみである。石材は蛇紋岩・ヒスイ・滑石の3種類がある。出土量の多い南押上遺跡でも、ヒスイ以外の石材については第1～第4工程は明らかになっていない。これについては「軟質素材の特徴を活かし、研磨作業に重きを置いている可能性が高い」とし、おそらくヒスイ同様に原石→荒削→形割（三角形状）→調整剥離、という工程を経ているのではないかと推測している。

臼 玉

白玉の未完成品は南押上遺跡では出土しておらず、類例は近隣の姫御前遺跡で確認できる。棗玉同様、初段階の工程は不明である。滑石製のものについては、186～188は扁平な素材を作出し剥離等により成形する段階のもので、平面形は不整形または正方形であるが、既に穿孔されている。姫御前遺跡では、周囲の形状を円形に仕上げてから穿孔する例が多いが、平面正方形の素材に穿孔する例も認められ、必ずしも画一的な製作過程をたどらない可能性があることが指摘されている[加藤ほか2008]。本遺跡においても、図化していない個体のうち、円形に近いと思われる未完成品（破損のため全形は不明）が2点ほど存在することから、姫御前遺跡とほぼ同じ様相であると判断できる。蛇紋岩製のものについては姫御前遺跡でも出土しておらず、現在のところ本遺跡のみである。06年調査区でも多角柱研磨段階のものが1点出土している（報告番号219）。研磨・穿孔段階のみであることから工程は不明であるが、石材を同じくする棗玉と同様ではないかと推測している。なお、182～184は便宜的に白玉と分類したが厚みもあり、前出の姫御前遺跡で算盤玉や平玉が出土していることから、それらの未完成品である可能性も否定できない。

管 玉

07年調査区では出土しなかったが、06年調査区において穿孔途中の段階のものが1点（南押上分類の緑色凝灰岩B）、完成品が1点（滑石製）出土している。南押上遺跡では管玉の石材は緑色凝灰岩に限定されており、06年調査区でも緑色凝灰岩の石核・剥片が少数であるが認められることから、本遺跡でも管玉製作が行われていた可能性も考えられる。

最後に、玉の種類と石材との関係について少し触れておきたい。第10表で示されるように、種類ごとに主体となる石材が異なる。近隣の遺跡と合わせて見てみると、棗玉は蛇紋岩（主体）・滑石（少）、白玉は滑石（主体）・蛇紋岩（僅か）、管玉は緑色凝灰岩（多）・滑石（少）という傾向がうかがえる。しかし勾玉については突出して使用される石材は認められず、滑石・蛇紋岩・ヒスイに加えてメノウ・石英岩など多様な石材が使用されているのが興味深いところである。時代・時期あるいは地域によって異なるものと思われるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 荒川隆史ほか 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一ほか 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 『糸魚川市史 資料集 1－考古編』新潟県糸魚川市役所
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学－出土木製品用材データベース』海青社
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 春日真実 1997 「越後ににおける 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』第 2 号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実ほか 2008 「六反田南遺跡・前波南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 202 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2012 「山岸遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 228 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第 V 章 I 遺構」「和泉 A 遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2006 「大角地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 173 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2008 「姫御前遺跡 I」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 184 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2011 「姫御前遺跡 II・竹花遺跡 I」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製經筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 木島 勉ほか 1986 「後生山遺跡」糸魚川市埋蔵文化財調査報告第 13 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989 「立ノ内遺跡・山崎三十三塚」糸魚川市埋蔵文化財調査報告第 16 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2007 「山崎 A・B 遺跡」「第 14 回遺跡発掘調査報告会資料」財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池勝典ほか 2011 「南押上遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 220 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林巖雄 2000 「I 概説 2 地質概説」『新潟県地質説明書（2000 年度版）』新潟県商工労働部商工振興課
- 坂井秀弥ほか 1986 「一之口遺跡西地区」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 40 集 新潟県教育委員会
- 佐藤友子ほか 2009 「田伏山崎遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 205 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 梶山林維 1972 「神坂峠」「神道考古学講座 5 祭祀遺跡特説」雄山閣
- 鈴木郁夫 1982 「I 地形分類図 1 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「I 概説 1 地形概説」『新潟県地質説明書（2000 年度版）』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木俊成ほか 1988 「小出越跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 51 集 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成ほか 1994 「一之口遺跡東地区」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 閔 雅之 1972 「田伏玉作遺跡」新潟県糸魚川市教育委員会
- 高橋 保 1988 「立ノ内遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 49 集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第 1 分冊 新潟県考古学会

- 滝沢規朗 2010 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第 8 号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面川流域の考古学』第 9 号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）－細別器種毎の変遷について－」『三面川流域の考古学』第 10 号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2014 「新潟県における古墳時代中期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面川流域の考古学』第 12 号 奥三面を考える会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年考察」『漆町遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その1）」『石川県埋蔵文化財情報』第 20 号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009a 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その2）」『石川県埋蔵文化財情報』第 21 号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009b 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その3）」『石川県埋蔵文化財情報』第 22 号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田中 靖 1995 『門新遺跡』和島村文化財調査報告書第 4 集 和島村（現長岡市）教育委員会
- 土田孝雄 1978 『第 2 章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで』『笛吹田遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄 1988 『須沢角地 A 遺跡発掘調査報告書』 新潟県青海町教育委員会
- 土田孝雄 1991 『加賀街道 第 II 章 1・2』『加賀街道・松本街道』 新潟県歴史の道調査報告書第 1 集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助ほか 1988 『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 50 集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』 吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一郎 1979 『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』 新潟県青海町教育委員会
- 長澤辰生ほか 2009 『角地田遺跡・平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 191 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊
- 平野團三・渡辺秀雄 1968 『西頭城郡』『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』 平凡社
- 水落雅明 2011 『第V章 2D 石器・石製品』『第VI章 2 南押上遺跡における古墳時代前期の玉作について』『南押上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 220 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 水澤幸一ほか 2009 『天野遺跡 3 次・4 次』胎内市埋蔵文化財調査報告第 16 集 胎内市教育委員会
- 森田 勉 1982 『14～16 世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川文化財調査報告 47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005 『平成 16 年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 49 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成 17 年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 53 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山本信夫 2000 『大宰府坊城跡 XV－陶磁器分類編』太宰府市の文化財第 49 集 太宰府市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 和田晴吾 1985 『7 渔獵具 1 土鍤・石鍤』『弥生文化の研究』第 5 卷 工具と技術 I 金闇 慶・佐原 真編 雄山閣
- 渡邊裕之ほか 2008 『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 188 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

観察表

横マクリ遺跡 遺構観察表(1)

凡例:

断面形 … *は底面に凹凸が見られるもの

規規 … ()は推定値

出土遺物 … 土:古代の土器器、黒:黒色土器、製塙:製塙土器、古墳:古墳時代の土器、木:木製品

多く出土したものから記載した。

切り合い関係

新>旧

グリッド	遺構番号	地盤	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	向面	出土遺物	切り合い関係	備考
330/340	河川II	V	-	弧状	-	252~456	104	7.10	レンズ状	古代	製塙・土無白陶・土有白陶・土小窓・黒釉白陶・土窓陶・土小窓2点・古墳瓦・木		
34N.O	河川II	V	-	弧状	-	152~262	75	7.23	レンズ状	古代	古墳陶・壺・土無白陶・(製塙片)・木		
34N.O/350	河川III	V	-	弧状	-	82~238	43	7.09	レンズ状	古代	古墳陶・土無白陶・(製塙片)・木		
35N.O/36N.O	河川IV	V	-	弧形・部分円形	-	308~394	28	6.42	レンズ状	古代	古墳陶・高杯・(土無白陶片・製塙片)・木	落ち込み部分深さ71cm	
36N.O	河川V	Va	-	弧状	-	70~584	13	6.84	単層	古代	古墳陶・高杯・壺		
37M.N/38M.N	河川VI	Va	-	弧状	-	212~844	89	6.09	レンズ状	古代	古墳陶・高杯・壺・蓋・蓋有合板・無合板・上無合板・木		
38N20/37N16	SX2	Va	不整形	弧状*	185	68	7	6.93	単層	古代	古墳陶		
37N17, 18, 23	SX3	Va	不整形	弧状*	246	88	8	6.88	単層	古代	古墳陶・高杯・上無合板・木		
38N2, 3, 7~8, 12~14	SX4	V	不整形	弧状*	340	539	12	6.75	単層	古代	古墳陶・高杯・上無合板・木	>SX101	
38N7	P9	Va	格子網状	U字形	(30)	23	(24)	6.46	水平	古代か	古墳陶1点		
35N17~20	S010	Vb	-	弧状	-	13~58	(17)	7.25	単層	古代			河川内
38M22	Rk11	Va	-	-	-	-	(21)	6.40	-	中世か			
38M23	Rk12	Va	-	-	-	-	(19)	6.97	-	中世か			
38M23	Rk13	Va	-	-	-	-	(19)	6.87	-	中世か			
38M23	Rk14	Va	-	-	-	-	(7)	7.00	-	中世か			
38M23	Rk15	Va	-	-	-	-	(13)	6.92	-	中世か			
38M23	Rk16	Va	-	-	-	-	(5)	7.02	-	中世か			
38M23	Rk17	Va	-	-	-	-	(5)	7.00	-	中世か			
38M23	Rk18	Va	-	-	-	-	(16)	6.90	-	中世か			
38M23	Rk19	Va	-	-	-	-	(22)	6.83	-	中世か			
38M24	Rk20	Va	-	-	-	-	(11)	6.94	-	中世か			
38M24	Rk21	Va	-	-	-	-	(5)	6.99	-	中世か			
38M24	Rk22	Vb	-	-	-	-	(26)	6.56	-	中世か			
37N5	Rk23	Vla	-	-	-	-	(43)	6.45	-				
37D7	Rk24	Vb	-	-	-	-	(23)	6.67	-	中世			
37D7	Rk25	Vb	-	-	-	-	(5)	6.81	-	中世			
37D7	Rk26	Vb	-	-	-	-	(17)	6.84	-	中世			
37D7	Rk27	Va	-	-	-	-	(8)	6.87	-	中世か			
37D8	Rk28	Va	-	-	-	-	(24)	6.63	-	中世か			
37D8	Rk29	Va	-	-	-	-	(7)	6.81	-	中世か			
37D8	Rk30	Va	-	-	-	-	(16)	6.71	-	中世か			
37D8	Rk31	Va	-	-	-	-	(17)	6.71	-	中世か			
37D8	Rk32	Va	-	-	-	-	(5)	6.82	-	中世か			
37D8	Rk33	Va	-	-	-	-	(21)	6.69	-	中世か			
37D8	Rk34	Va	-	-	-	-	(13)	6.72	-	中世か			
37D9	Rk35	Va	-	-	-	-	(21)	6.62	-	中世か			
37D9	Rk36	Va	-	-	-	-	(15)	6.69	-	中世か			
37D12	Rk37	Va	-	-	-	-	(14)	6.69	-	中世か			
37D12	Rk38	Va	-	-	-	-	(31)	6.72	-	中世か			
37D12	Rk39	Vb	-	-	-	-	(33)	6.40	-	中世			
37D12	Rk40	Va	-	-	-	-	(19)	6.59	-	中世か			
37D12	Rk41	Va	-	-	-	-	(23)	6.56	-	中世か			
37D13	Rk42	Va	-	-	-	-	(63)	6.14	-	中世か			
37N21	Rk43	Va	-	-	-	-	(19)	7.40	-	中世か			
36D13	Rk44	Va	-	-	-	-	(28)	6.54	-	中世か			
37N2	Rk45	Va	-	-	-	-	(23)	6.94	-	中世か			
38N17	Rk46	Va	-	-	-	-	(31)	7.12	-	中世か			
38D1	Rk47	Vb	-	-	-	-	(18)	6.68	-	中世			
38N24/39D4	Rk48	Vb	-	-	-	-	(25)	6.49	-	中世			
37N24	Rk49	Vb	-	-	-	-	(29)	6.42	-	中世			
34N21	Rk50	RkH1	-	-	-	-	(53)	7.09	-	中世			河川内
34N21	Rk51	RkH1	-	-	-	-	(63)	7.64	-	中世			河川内
38N/37N.O	RkH7	Vla	-	弧状	-	308	35	6.44	レンズ状	古墳	古墳陶・高杯・壺・説・跡	>SX102~107, SD151	
38N2, 7, 8, 12, 13	SX101	Vla	不整形	弧状*	384	130	11	6.56	単層	古墳		<SX4	
38N.O/39N.O	SX102	Vla	不整形	弧状	-	348	16	6.45	レンズ状	古墳	古墳陶・高杯・壺・説・跡		
38N8, 9, 12, 13	SX102b	Vla	不整形	弧状	294.8上	257	44	6.31	レンズ状	古墳	古墳陶		
38N8, 9	SX102c	Vla	不整形	白形状	59	53	35	5.94	単層	古墳			
38D4	SX103	Vla	不整形	弧状	111	66	6	6.45	単層	古墳	古墳陶 1点		
39N22, 39D3, 4	SX106	Vla	不整形	弧状*	140	908.1上	21	6.30	単層	古墳	古墳陶		
37N19, 25, 25	SX107	Vla	半塑形	弧状	150	136	19	6.45	単層	古墳	古墳陶・高杯合泊		

横マクリ遺跡 遺構観察表(2)

グリッド	遺構 種類	被出 標号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (m)	覆土	柱脚	出土遺物	切り合い面張	備考
37N22	P108	Vla	円形	U字状	(22)	20	21	6.62	単層	古墳			
37011	P109	Vla	円形	U字状	19	19	25	6.45	斜傾	古墳			
37011	P110	Vla	楕円形	半円状	18	14	11	6.64	単層	古墳	古墳1点		
37N21	P115	Vla	円形	U字状	18	16	16	6.61	単層	古墳	古墳1点		
36N25/3604, 5, 9, 10/3701, 6	SX119	Vla	不規則	弧状*	340	311	13	6.73	単層	古墳	古墳1点		
36010, 13, 14, 15, 19, 20	SX120	Vla	不規則	弧状	397	(189)	16	6.62	単層	古墳	古墳		
36013, 14	P121	Vla	円形	U字状	22	20	28	6.45	水平	古墳			
3609	P123	Vla	円形	U字状か	29	25	32	6.54	水平か	古墳			
3609	P124	Vla	楕円形	U字状	23	16	33	6.52	レンガ式	古墳			
3604	P126	Vla	円形	U字状	19	17	20	6.68	単層	古墳			
36N24	P128	Vla	円形	U字状	(22)	20	20	6.77	単層	古墳			
36N23, 24	SK139	Vla	楕円形	半円状	60	45	14	6.70	単層	古墳			
3602, 7	P133	Vla	円形	U字状	22	20	23	6.66	単層	古墳			
3601	P134	Vla	円形	U字状	18	17	23	6.73	単層	古墳			
3601	P135	Vla	円形	U字状	23	20	28	6.76	レンガ式	古墳			
3601	P136	Vla	楕円形	U字状	18	12	19	6.81	単層	古墳			
36N22	P137	Vla	円形	U字状	22	19	27	6.78	単層				
36N22	P138	Vla	円形	U字状	(17)	16	15	6.75	単層	古墳			
36N12	P141	Vla	円形	半円状	22	20	14	6.91	レンガ式	古墳			
36N12	P142	Vla	円形	半円状	22	21	20	6.91	単層	古墳			
36N9	P145	Vla	円形	U字状	26	24	45	6.66	柱脚	古墳			
36N9	P146	Vla	円形	半円状	18	18	15	6.87	単層	古墳			
35N25	P149	Vla	円形	U字状	20	18	19	6.91	水平	古墳			
37M25/38M16, 17, 21	SD151	Vla	—	弧状*	—	33~78	10	6.66	単層	古墳			
36012, 16, 17, 18	SX152	Vla	不規則	弧状*	(235)	131	13	6.77	単層	古墳			
38N22	P153	Vlb+	円形か	U字状	(25)	24	27	6.41	単層				

土器・陶器類観察表(1)

凡例:

正記:一定実存。一括記するが不明確。調整:文様・使用感。付用感:外縁、内縁、口縁部、底縁、全体。口=口縁部、底=底縁、全体。身=全体、底=底縁(小)=全体の約1mm程度)。底/^上(少)/^多(多)=全周的に付わるか/少な/多く。

編号 番号	分類	出土位置	法量(cm)	調査	支繩	壁上		混入物	使用感 付用感	備考
						上段 上段	下段 内段			
1 上部器 上部器	43P1	河原1 下層	11.3 3.2	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口	10V15.3に少・古墳 7.2YH6.4に少・古墳	鐵、灰、黑		VII~2期	
2 上部器 上部器	94011	河原1 中層	11.8 4.5	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口	5W7.6縦 5W7.6横	鐵、白、金		VII~2期	圓周
3 上部器 上部器	94017	河原1 中層	3.2 4.5	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口右	7.2YH6.8(浅黄緑 7.2YH6.8(浅黄緑)	鐵、且(少)、少 内各部位物 有り、		VII~2期	圓周
4 上部器 上部器	93025	河原1 中層	12.7 3.7	5.4	口クロナナ 底:回転系切り口	7.2YH7.4縦 5W7.6縦	鐵、石、灰		VII~2期	圓周 厚壁
5 上部器 上部器	33025	河原1 中層	12.8 3.3	6.9	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V7.4に少・古墳 10V7.4に少・明黄緑	鐵、(多)		VII~2期	圓周 厚壁
6 上部器 上部器	33025	河原1 中層	12.9 3.9	6.0	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V7.4に少・古墳 10V7.4に少・古墳	鐵、長		VIII期	
7 黒色土器 有柄土器	33025	河原1 中層	14.4 —	7.0*	内:クロナナ 外:クロナナ 且:ミガテ	10V16.7に少・古墳 2.2YH7.1墨	鐵(少) 内:黒化 外:白		VII~2期	
8 製造土器 製造土器	3406	河原1 中層	—	—	内:ナデ	7.2YH6.4に少・古墳 7.2YH6.4に少・古墳	鐵、白		VIII期	
9 製造土器 製造土器	3406	河原1 中層	—	—	内:ナデ	10V16.5に少・古墳 10V16.5に少・古墳	鐵、長		VIII期	
10 製造土器 製造土器	33020	河原1 中層	—	—	ナデ	10V16.5に少・古墳 10V16.5に少・古墳	鐵、長		VIII期	
11 上部器 上部器	43P1	河原1 下層	16.3 4.0	7.6	口クロナナ 底:回転系切り口右	7.2YH7.4に少・古墳 10V7.4に少・古墳	鐵、白、白		V期	
12 上部器 上部器	33015	河原1 下層	13.5 3.9	6.2	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V15.4に少・古墳 10V16.4に少・古墳	鐵、白?		V期	
13 上部器 上部器	33015	河原1 下層	13.6 4.8	5.6	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V17.3に少・古墳 10V17.3に少・古墳	鐵、石、チャ?		VII~2期	
14 上部器 上部器	34011, 16	河原1 下層	14.4 3.6	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口右	7.2YH6.8縦 7.2YH6.8横	鐵、白、金		VII~2期	圓周
15 上部器 上部器	34016	IVb	—	—	ナデ	10V16.4に少・古墳 10V16.4に少・古墳	鐵、長		VII~2期	
16 上部器 上部器	33020	河原1 下層	11.7 3.6	5.7	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V16.4に少・古墳 2.2YH7.1墨	鐵、白、金		VII~2期	
16 上部器 上部器	33035	河原1 下層	11.7 4.0	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口	10V17.4に少・古墳 10V17.4に少・古墳	鐵、白		VII~2期	
17 上部器 上部器	34017	河原1 下層	12.3 3.6	5.8	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V16.3に少・古墳 10V15.3墨	鐵、且、黑		VII~2期	
18 上部器 上部器	33035	河原1 下層	12.4 4.2	5.8	口クロナナ 底:回転系切り口右?	7.2YH7.4に少・古墳 7.2YH6.8に少・古墳	鐵、長		VII~2期	
19 上部器 上部器	33025	河原1 下層	12.5 4.1	5.7	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V16.4に少・古墳 10V16.4に少・古墳	鐵、白、金		VII~2期	
20 上部器 上部器	34021, 34P1	河原1 下層	12.6 4.1	6.2	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V16.5に少・古墳 10V16.5に少・古墳	鐵、长		VII~2期	
21 上部器 上部器	33011	河原1 下層	12.9 4.0	5.8	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V16.4に少・古墳 10V16.4墨	鐵、白、金		VII~2期	
22 上部器 上部器	33015, 20	河原1 下層	12.9 4.0	5.2	口クロナナ 底:回転系切り口右	10V17.4に少・古墳 10V15.2に少・古墳	鐵、石、白	口内:スヌ	VII~2期	

観察表

土器・陶磁器観察表(2)

番号	種別	器形	出土位置			法量(cm)	調査	文様	新土 上段：内面・輪 下段：内面・地		記入部	使用歴 付有物	備考
			通鑑 番号	グリッド 番号	層位				筋目	内面			
23	破壊器	壺	33020-7 -34016	河川1	下層	20.7			口クロナデ 底内・平行タガル 全体・同心円タガル	N4/0灰 10V6/1灰	白		V期
24	破壊器	壺	33020-8	河川1	下層	24.4*			口クロナデ	N5/0灰 N7/0灰	白		V期
25	破壊器	壺	34016	河川1	下層				口クロナデ	N4/0灰 N6/0灰	白		
26	破壊器	長瓶	33020	河川1	下層		5.1	6.6	口クロナデ 底内・回転系切り口 内・凹凸有り	N4/0灰 N2/0灰灰	白	破壊	V3期 撤入品
27	破壊器	壺または 瓶	34016	河川1	下層		10.8		口クロナデ	N2/0灰灰 10V7/1灰白	黒(少)		V1~3期
28	製塩土器	33015	河川1	下層		-			ナデ	2SY6/4.1灰・縦 3SY6/4.1灰・縦	黒、白、全		
29	破壊器	瓶	38N16	河川6	2層	12.3	3.8	7.5	口クロナデ底・回 転系切り口右	S3V6/3灰 S3V6/3米白	長、縦(少)	器外：墨書き	V3期
30	破壊器	有柄壺	38N12	河川6	2層	10.8	3.8	6.2	口クロナデ	S3V6/3米白 7.5V6/1灰	黒、白	器外：墨書き	V期
31	破壊器	壺または 瓶	33020	上石瀬	32.2*				口クロナデ	N6/0灰 N2/0灰灰	白		
32	土器	柱状石井	3406	上石瀬		4.1			口クロナデ	10V6/1灰・直井 10V6/1灰・直井	黒、白、全		V期
33	瓦輪陶器	壺	34012	上石瀬		7.0			口クロナデ	2.5V6/1灰白 2.5V6/1灰白	(織物)		V1~2期 滅ぼ 打文か
34	製塩土器	33010	上石瀬		-			内・ナデ	2.5V6/5.1明周 2.5V6/5.1縦	黒、白、全			
35	製塩土器	33010	上石瀬		-			底内・ハケ	2.5V6/5.1にぶ・縦 S3V6/4.1にぶ・縦	黒、長			
36	製塩土器	33015	上石瀬		-			内・ハケ	10V6/6.1にぶ・直井 10V6/6.1にぶ・直井	黒、長			
37	土器	瓶	3402	7	Nv	16.3	4.7	7.4	口クロナデ 底・回転系切り口右	2.5V6/6.1縦 2.5V6/6.1縦	黒、白		V期
38	土器	有柄壺	3407	Nv			8.7		口クロナデ	10V6/6.1にぶ・直井 10V6/6.1にぶ・直井	黒(少)		V期
39	製塩土器	34022	Nv		-			内・ナデ	2.5V4.3オーバー縦 2.5V6/3にぶ・縦	黒、白、全			
40	製塩土器	34011	Nv		-			内・ナデ	2.5V6/5.1にぶ・縦 2.5V6/5.1にぶ・縦	黒、白、全			
41	製塩土器	34012	Nv		-			内・ナデ	10V6/6.1にぶ・直井 10V6/6.1にぶ・直井	黒、長			
42	製塩土器	34018	Nv		-			内・ナデ 底内・ハケ	10V6/6.1にぶ・直井 10V6/6.1にぶ・直井	黒、長			
43	製塩土器	3407	Nv		-			底内・ハケ	S3V6/3.1にぶ・縦 S3V6/3にぶ・縦	黒、白、全			
44	製塩土器	34011	Nv		-			ナデ	2.5V6/7.1にぶ・縦 S3V6/3.1にぶ・縦	黒、丘			
45	製塩土器	35M19	Nv		-			ナデ	10V6/5.1にぶ・直井 S3V6/4.1にぶ・直井	黒、丘、全			
46	土器	小壺	34023	IV			5.9		口クロナデ 底・回転系切り口右	10V6/5.1黄面 10V6/6.1明黄面	黒、丘 内外：一部 大き、ダー ク?		
47	黒色土器	有柄壺	34022	IV			7.0		口クロナデ	10V6/6.1にぶ・直井 2.5V1/1直面	黒、丘		V1~2期
48	土器	有柄壺	34018	IV			7.0		口クロナデ	2.5V6/7.1にぶ・縦 2.5V6/5.1にぶ・縦	黒、丘(少)		V期
49	土器	小皿	34022	IV	10.2	3.4	6.1		口クロナデ 底・回転系切り口右	2.5V6/5.1にぶ・縦 2.5V6/5.1にぶ・縦	黒(少)	内：コゲ	V期 灯明細か
50	土器	小皿	34018	IV	10.0	2.5	6.0		口クロナデ 底・回転系切り口右	S3V6/6.1縦 2.5V6/6.1にぶ・縦	黒、丘		V期
51	土器	小皿	34015	IV	11.3	2.5	6.0		口クロナデ	10V6/1灰 10V6/1灰	黒、丘		V期
52	破壊器	杯	35N12	IV	12.1*				口クロナデ	10V6/6.1にぶ・直井 10V6/6.1にぶ・直井	白		V期
53	黒色土器	瓶	34N22	IV	13.5		6.6		口クロナデ 底・回転系切り口右	10V6/6.1にぶ・直井 2.5V2/1黒	黒、白	器外：墨書き	V期
54	製塩土器	3402	Nv		-			内・ナデ	2.5V6/5.1にぶ・縦 2.5V6/5.1にぶ・縦	黒、丘、全			
55	陶輪か 四耳壺	34N23	Nv					側・断面 体・弧状波	2.5V6/1米白 2.5V6/1米白	白			
56	廻転・茎 直柄	35G10	III			4.7				S3V2/1黒灰 2.5V6/2米白	白(少)		
57	白磁	梅	36N22	III	-					5V7/2浅黄 7.5V6/1米白			
58	青磁	杯	38N20	Nv	-				2.5G7/6.1オーバー 白	10V6/1米白		飯泉系	
59	青磁	絞花瓶	35N19	III	12.8				口内：文様	7.5G7/6.1棘灰 N7/0灰白	白?		
60	青磁	梅	36N16	III	14.0					7.5G7/6.1棘灰 N7/0灰白			
61	白磁	梅	34N2	IV	16.4				2.5G6/6.1灰オーバー 白	10V6/1灰白		梅吉屋	
62	白磁	梅	34016	上石瀬	13.5				轟下平ケヌリ・無 鉢	S3V6/5.1米白 S3V6/5.1米白	白(復)		
63	白磁	梅	34N21	I'		6.3				7.5V6/2灰オーバー 7.5V6/1米白		近藤打井、高田無 鉢	
64	白磁	梅	34N1	IV			5.9			5V6/2灰オーバー 7.5V6/1米白		全表面無・追加集	
65	青磁	壺	34019	I			18.1		口クロナデ	N6/0灰 N6/0灰	黒、白		

土器・陶磁器観察表(3)

順号	種別	器形	出土位置		法量(cm)			調査	文様	出土	出人物	使用歴、付着物	備考	
			通塗番号	グリッド番号	層位	口径	縦高							
66	陶器	壺	33N24		III	-		ロクロナデ 体外・タラキ	N5.0灰 N5.0灰	縦、白、長				
67	陶器	片口壺	39N24		IVa	-		ロクロナデ	内：波状文 N5.0灰	縦、長				
68	陶器	片口壺	39N18T		基灰色 粘土	36.0"		ロクロナデ	内：波状文 N5.0灰	縦、長、白				
69	陶器	片口壺	36N6		III			ロクロナデ	口：波状文 内：波状文 N5.0灰	縦、長		内：自然釉		
70	陶器	片口壺	33O10		IVa	20.0"		ロクロナデ	N5.0灰 N4.0灰	縦				
71	土器質土器	壺	33O15		III	12.3	-	手づくね	10V7/4にぶつ痕 10W7/4にぶつ痕	縦、仄、黄 内：火炎 ターナ?	打削痕			
72	土器質土器	壺	39N13		II	11.8	-	手づくね	10V5/5にぶつ痕 10W5/5にぶつ痕	縦、火炎 (少)	打削痕			
73	透視系陶器	壺	34N19		IVa			押印	SYR5/1透視 2.5V7/3透視	縦、石				
74	土器質土器	壺	39O1	SX102	16.5			ハケ(口上)：ナデ 土上	10V16/2に反表裏 10V17/2に反表裏	縦、仄、白	外：スルヌ 寸合	A2類		
80	土器質	高杯	39O1	SX102		16.3	11.1	摩耗著しく不明	10V16/2に反表裏	縦、仄	白(僅)			
81	土器質	壺	39O3.4	SX106	12.3			ハケ 口上：ナデ	2.5V7/3浅黄 10V6/3にぶつ痕	縦、長	外：スルヌ	A2類		
82	土器質	壺	39O4	SX106	I期	2.8		ハケ	SYR6/4にぶつ痕 10V6/4にぶつ痕	縦、長				
83	土器質	壺	39O4	SX106	19.6			口：ヨコナデ 体外：ハケ	10V6/4にぶつ痕 10V6/4にぶつ痕	縦、長				
84	土器質	壺	39O4	SX106	I期	19.1		摩耗著しく不明	10V6/4浅黄	縦、長	A3類			
85	土器質	壺	39O4	SX106	20.4			ハケ	10V7/4にぶつ痕 10V7/4にぶつ痕	縦、長	A3類			
86	土器質	壺	39O4	SX106	22.7			ハケ	2.5V7/3浅黄 2.5V7/3浅黄	縦、長	A3類			
87	土器質	壺	36O15	SX120	I期	18.0		外、ハケヨコナ 内、摩耗著 しく不明	10V7/7にぶつ痕 10V7/7にぶつ痕	縦、長、金	A3類			
88	土器質	壺	39O3	SX105	I期	16.9		外、体外：ハケ 内、摩耗著 しく不明	10V6/4浅黄 10V7/4にぶつ痕 SYR7/4にぶつ痕	縦、仄、黄 (少)	A2類			
89	土器質	壺	37O8	河H7		18.4		口：ハゲヨコナ テ、ナデ	10V6/3浅黄 10V6/3にぶつ痕	縦、長	A2類			
90	土器質	壺	37O3.8	RH7	18.8	33.8	-	26.5 口：ヨコナデ 体：ハケ	10V6/4にぶつ痕 10V6/4にぶつ痕	縦、白	外：スルヌ	A3類		
91	土器質	壺	37O3	RH7		13.0		口：ハケ 内：ナデ	2.5V7/3浅黄 10V7/3にぶつ痕	縦、長	小形			
92	土器質	壺	37O3.4.8	RH7	15.6	21.1	-	18.8 口：ハケ、ヨコナ テ、ナデ 体：ハケ、ナ デ	10V6/5にぶつ痕 10V7/7にぶつ痕	縦、長	外：スルヌ	A3類		
93	土器質	壺	37O3	RH7		5.0		ハケ、ナデ	10V7/3黒陶 10V7/4にぶつ痕	縦、長				
94	土器質	壺	37O4.8	RH7		3.6		馬：ハケ 内：ナデ	2.5V7/1黒陶 10V6/4にぶつ痕	縦、長				
95	土器質	壺	36N6	RH7		8.6	-	9.5 ハケ→ナデ	10V7/3にぶつ痕 10V6/3にぶつ痕	縦、長、白	底：黒陶			
96	土器質	壺	36N6	RH7		8.2		10.5 馬：ナデ 内：接合部既 然	10V6/3にぶつ痕 10V6/1黒陶	縦、長				
97	土器質	鉢	37O3	RH7		13.6	4.5	馬：ハケミ万方 ナデ	2.5V4/1黒陶 10V7/3にぶつ痕	縦、白	外：スルヌ			
98	土器質	高杯	37O2	RH7		19.9		ハケ→ミガキ	10V7/3にぶつ痕 10V7/3にぶつ痕	縦、白				
99	土器質	壺	34N23	RH12	下層	19.2		摩耗著しく不明	7.5V9/5にぶつ痕 7.5V9/4にぶつ痕	縦	A3類			
100	土器質	壺	33O17	RH12		15.8		口：ナデ 体外：内：ハ ケ	10V5/5にぶつ痕 10V5/5にぶつ痕	縦、長、石	A3類			
101	土器質	壺	35O18	RH13		-		体：ハケ 内：ナデ	10V6/5にぶつ痕 10V6/5にぶつ痕	縦、長	外：スルヌ	A3類		
102	土器質	壺	35O18	RH13	I期	11.8		23.0 馬：ナデ 内：摩耗 著しく不明	SYR6/6縦 SYR6/6縦	縦、長	洞部に把手			
103	土器質	高杯	36O11	RH16	I期	13.3		馬：ミガキ 内：ナデ	10V7/7にぶつ痕 10W7/7にぶつ痕	縦、白、長、金				
104	土器質	高杯	36N23	RH15	I期	14.3		馬：ナガキ? ナデ	2.5V7/3にぶつ痕 7.5V9/6にぶつ痕	縦、長				
105	土器質	壺	36N23	RH15	I期	7.6	-	10.0 馬：ナデ 線形狀 内：ナデ	10V6/2反表裏 10V6/2反表裏	縦、長				
106	余生土器 か	壺	38O2	RH16	2層	4.8		馬：ナデ 内：ナデ	2.5V12/1基黑 10V6/3にぶつ痕	縦、長	馬：スルヌ			
107	土器質	壺	38O7	RH16	2層		4.8	ナデ	SYR6/4にぶつ痕 2.5V6/4にぶつ痕	縦、長	(少)			
108	土器質	壺	38O7	RH16	2層		9.1	ナデ	10V6/2反表裏 10V6/2反表裏	縦、長				
109	土器質	高杯	37M25	RH16	1-2 層	30.0		ナデ? 摩耗著しい	2.5V3/3C-5A-4 2.5V3/3	縦、長、石				
110	土器質	高杯	38O7	RH16	2層									
111	土器質	高杯	38N22+	RH16	2層	20.0"		ナデ? 摩耗著しい	10V7/3にぶつ痕 10V6/3にぶつ痕	縦、長				
112	土器質	高杯	38N13	SX4	I期	14.0		馬：ミガキ? ナハ	10V6/3にぶつ痕 10V6/3にぶつ痕	縦、長				
113	土器質	壺	39N24		V	16.4			口：摩耗著しく不明 体外：ナハ	10V7/6明黄 10V8/6基縫	縦、長(少)	A1類		

観察表

土器・陶磁器観察表(4)

番号	分類	出土位置			法量(cm)			調査	文様	前上 上段：外山・輪 下段：内山・地		鉢入物	使用歴 付有物	備考	
		通鑑 番号	グリッド 番号	層位	口径	縦高	底径			上段	下段				
114	上部器	盤	36015	V	18.3			体丸：ハナツ 内：摩耗著しく不明	10VH6/4 深黄焼 10VH6/1 黒焼	縦、丸、直(多)		A2類			
115-a	上部器	盤	3901	V	17.0			内：ヨコナギ	10VH5/3 にぶつ痕周 10VH5/1 黒焼	縦、白		A3類			
115-b	上部器	盤	3901	V	—	18.9	ハナツ	10VH5/3 にぶつ痕周 10VH5/1 黒焼	縦、白	内：一部火 丸					
116	上部器	盤	37M23	V	19.8			摩耗著しく不明	10VH6/4 深黄焼 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、長		A2類			
117	共生上部	食	38N25	V	16.2			内：ヨコナギ 内：摩耗著しく不明	10VH6/3 にぶつ痕周 10VH5/3 にぶつ痕周	縦、直、G	口：スカリ	B類			
118	上部器	盤	38M24- 38N4	V	17.3	24.3	6.2	22.6	口：ヨコナギ 体丸：ハナツミガタ 体外：ハナツ	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH7/2 にぶつ痕周	縦、白、長	体外：スカリ	A2類		
119	上部器	盤	3904	V		1.5		ハナツ	SYR6/4 にぶつ痕周 10VH6/1 黒焼	縦、長					
120-火上部	食または 皿	3709		V		4.2		内：ハナツ 内：ナギ	10VH7/4 にぶつ痕周 10VH5/1 黒焼	縦、直	内：スカリ 下寸：				
121	上部器	盤	38M23- 38N2	V	29.0			内：ミガタ 内：ナギ	10VH7/4 にぶつ痕周 10VH6/3 明黄焼	縦、直、金(多)					
122	上部器	盤	38N9, 14	V	29.0			モロ年	10VH6/3 深黄焼 10VH4/1 黑焼	縦、直、白					
123	上部器	盤	3901	V	12.4	26.6	6.3	23.2	口：ヨコナギ 体丸：ハナツミガタ 体外：ナギ	10VH6/6 明黄焼 10VH5/4 にぶつ痕周	縦、直、白	口外、体外 下寸：スカリ			
124	上部器	盤	39N6	V	10.3	14.0	2.9	14.2	内：ミガタ?	2.5Y7/3 深黄 2.5Y7/3 深黄	縦、直	内：赤引			
125	上部器	盤	36010	V	11.3			内：ミガタ 内：ナギ	10VH6/3 にぶつ痕周 10VH5/3 深黄焼	縦、直、墨					
126	上部器	盤	34025ア- イ	V	8.5	7.6	—	9.8	体丸：ハナツ 体外：ナギ	10VH5/3 にぶつ痕周 10VH6/3 にぶつ痕周	縦、白、長	直：加厚			
127	上部器	盤	36015	V	13.4			ハナツヨコナギ	2.5Y7/2 にぶつ痕周 2.5Y7/3 深黄焼	縦、直、白(多)					
128	上部器	盤	39N6, 17	V				15.3?	摩耗著しく不明	10RS/6 細 10VH6/3 深黄焼	縦、直、白	内：赤引			
129	上部器	盤	29N17- 3004 30N11	Nh			3.0	15.0	摩耗著しく不明	体：実圓に 内文：ナギ 神妙浮游	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH5/3 黑焼	縦、直			
130	上部器	盤	34025ア- イ	V	14.3	26.1	6.6	25.3	口：ヨコナギ- ミガタ? 体外：ハ ナツミガタ? 体外：ナギ	10VH6/4 にぶつ痕周 10VH5/3 黑焼	縦、直、白	体外：スカリ スカリ			
131	上部器	盤	37016	Vx		6.8			摩耗著しく不明	SYR7/6 細、2/1 黑焼 SYR6/6 細	縦、直(多)	直背：黒周			
132	上部器	盤	3605, 10	V				24.1	摩耗著しく不明	2.5Y7/3 にぶつ痕周 10VH6/4 黑焼	縦、直	内：赤引			
133	上部器	盤	34025ア- イ	V		7.2	33.1	体：ハナツ 明黄	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周	縦、白、長	直背：黒周				
134	上部器	台付盤	3901	V	17.2	9.0	8.8		口：ヨコナギ- ミガタ? 体外：ハ ナツミガタ? 体外：ナギ	2.5Y7/2 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周	縦、直、白 (少)	体外：スカリ (少)			
135	共生上部	盤	36015	V	13.1	5.6	3.2		摩耗著しく不明	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、長				
136	上部器	盤	39N24	V	7.5	4.5	4.5	8.4	内：摩耗著しく不明 内：ミガタ?	2.5Y7/6 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、直、白	内：スカリ 下寸：			
137	上部器	盤	37N6	V				内：ミガタ?	10VH6/4 にぶつ痕周 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、直、白	内：スカリ 下寸：				
138	上部器	盤	37D4, 9	V				内：ミガタ?	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周	縦、直					
139	上部器	高杯	36N17	V			15.6		内：ミガタの摩 耗著しくナギ	2.5Y7/6 にぶつ痕周 2.5Y7/2 にぶつ痕周	白、縦、長				
140	上部器	高杯	38M24- 38N24	V			9.1		摩耗著しく不明	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH5/3 にぶつ痕周	縦、直、白		細部：イフ		
141	上部器	高杯	37N20	V			11.9		内：ミガタの摩 耗著しくナギ 内：ヨコナギ	10VH6/3 にぶつ痕周 10VH5/3 にぶつ痕周	縦、直、白				
142	上部器	高杯	36010	V	12.2	9.1	15.0		内：ミガタの摩 耗著しくナギ 内：ヨコナギ	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH6/4 にぶつ痕周	縦、直、白				
143	上部器	高杯	39015	V	8.6	6.5	11.9		摩耗著しく不明	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、直、白				
144	上部器	高杯	37N1, 7	V	9.9			内：ミガタ?	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH7/4 にぶつ痕周	縦、直、白(少)					
145	上部器	高台付	36010	V			10.1		摩耗著しく不明	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH6/3 深黄焼	縦、直、白				
146	上部器	盤か	38N5, 10	V	22.7				摩耗著しく不明	SYR6/6 細 SYR6/6 細	縦、直、白				
147	共生上部	盤	34025	V	18.2			ヨコナギ	10VH5/4 にぶつ痕周 10VH5/5 にぶつ痕周	縦、直、白(少)	口外：スカリ	B類			
148	上部器	高杯	34N21, 22, 23	V	18.3			内：ミガタ?	2.5Y7/2 にぶつ痕周 10VH7/3 にぶつ痕周	縦、白、長					
149	上部器	盤	36N17	Nh	14.8			内：摩耗著しく不 明 内：ミガタ? ハナツ	10VH7/3 にぶつ痕周 10VH7/4 にぶつ痕周	縦、直、白(少)					
150	上部器	盤	34P2	Nh	8.9	7.0	10.0	體一体再上：ミガタ 体外下：内：ナギ	2.5Y7/2 にぶつ痕周 10VH7/4 にぶつ痕周	縦					
151	上部器	盤	試掘TT		10.9			ミガタ?	2.5Y7/6 にぶつ痕周 2.5Y7/6 にぶつ痕周	縦、直、白(少)					
152	共生上部	盤	試掘TT		13.8	23.7	9.1	17.4	内：ハナツの摩 耗著しくナギ	SYR4/6 黑焼 SYR6/6 黑焼	縦、直	B類			

土錠觀察表

番号 通号	グリッド	解説	法量(cm/g)					鉢主	色調	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径	重量			
74 35N22	N		5.85	5.45	5.35	1.5	148.16	石・茶(小)(少)	7.5YR7/4 G.Ja-N格	
75 34O18	N		6.4	4.8	3.2	1.6	71.13	真・黄(少)	7.5YR7/6格	鉢1/2底
76 37O7	Ⅲ		7.2	3.75	3.6	1.35	82.99	鈍・真・黄(少)	10YR5/3に近い黄褐	微細顆粒性
77 33O19	Ⅲ		4.3	3.0	3.05	1.4	29.03	黄(理)	2.5YR8/4 淡黄	尚青一頭欠損、那山摩耗
78 34O21	埋没土上		3.9	3.25	3.35	1.3	32.80	石・茶(小)(少)	10YR6.3に近い淡绿	微細顆粒性にむかふる。

石器・石製品觀察表

番号 通号	種類	分類	石材	出土位置			法量(単位:mm/g)			備考
				グリッド	通査番号	鉢位	長さ	幅	厚さ	
153 磨刀形石器	砂岩	35N17	河川				96.0	136.2	25.5	32.46 銀灰・黄真下
154 磨刀形石器	砂岩	35N16	Nb				87.0	121.6	16.9	22.07 銀灰・灰下
155 磨刀形石器	ビンガ	35N25	N				85.7	123.0	18.7	22.01 銀灰・真面
156 磨刀形石器	砂岩	不明					83.4	101.8	18.5	17.65
157 磨刀形石器	砂岩	34O8	Nb				74.8	120.5	15.7	14.47 銀灰・真面
158 山林	砂岩	37N20	V				192.0	273.5	59.0	388.00
159 山林	安山岩	38O7	Ⅲ				77.0	110.5	27.5	305.60
160 山林	砂岩	36O15	Ⅲ				64.0	88.0	26.0	166.40
161 山林	安山岩	37N27	青灰色斜土				102.0	80.0	76.0	635.74 花化地石
162 磨石類	磨・削下	35O23	河川	1層			178.5	62.5	58.0	980.83
163 磨石類	磨・削表上	35O22	SK102				116.0	82.5	55.0	723.03 月端欠損
164 磨石類	磨・削	36O5	V				166.0	93.0	31.5	832.87
165 磨石	砂岩	35O23	河川				228.0	128.0	30.5	1270.98 粗面
166 台石	安山岩	33O20	河川	下層			321.5	218.5	76.5	1015.00 表・裏真・端打抜
167 磨石	砂岩	33O20	河川	下層			243.5	169.0	55.0	3455.00 粗面端、表・裏真・刃物級・河川上
168 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25	V			13.7	9.8	9.7	2.30
169 剣 5	未完成	弓舟刃	37N15	河川	1層		11.6	9.1	8.8	1.78
170 剣 5	未完成	空手中	34O25?	V			12.7	8.8	7.9	1.66 孔径1.3mm
171 剣 5	未完成	弓舟刃	36O16	Nb			14.6	7.6	7.4	1.56
172 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25	V			12.4	8.2	8.1	1.47
173 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25?	V			9.0	7.7	6.5	0.80
174 剑 5	未完成	弓舟刃	34O20?	V			8.2	6.6	6.1	0.59
175 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25	V			8.0	6.4	6.3	0.56
176 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25?	V			7.7	7.4	7.3	0.72
177 剣 5	未完成	弓舟刃	34O25?	V			6.8	7.8	7.7	0.66
178 剣 5	未完成	空手中	34O25?	V			10.8	8.4	7.8	1.21 孔径2.0mm
179 剣 5	未完成	空手中	34O25?	V			14.7	8.3	8.5	2.04 孔径2.0mm
180 剣 5	未完成	空手中	34O25?	V			14.5	9.8	9.3	2.39 孔径1.6~1.8mm
181 剣 5	未完成	空手中	34O25?	V			9.0	8.2	7.9	1.14 孔径1.8mm
182 11E	未完成	空手中	36N9	Vn			5.9	7.5	7.4	0.58 孔径2.1mm
183 11E	未完成	空手刃	34O25	V			4.7	6.0	6.0	0.38
184 11E	未完成	空手刃	36N8	Nb			5.0	7.4	4.7	0.27 孔径1.1mm 刃1/2欠損
185 11E	未完成	空手斜削	36N8	河川	1層		3.5	7.9	7.5	0.35 孔径2.0mm
186 11E	未完成	空手斜削	36N8	河川			6.5	11.0	5.3	0.39 孔径1.4~1.6mm
187 11E	未完成	空手斜削	36N8	河川	1層		7.5	9.0	1.7	0.22 孔径1.5~1.7mm
188 11E	未完成	空手斜削	36N8	河川	1層		8.0	8.0	2.1	0.25 孔径1.3~1.7mm
189 O/E	鉋	磨石	36N9	河川	1層		5.4	5.4	5.4	0.12 孔径1.2mm
190 O/E	鉋	磨石	36N9	Nb			12.0	8.3	3.8	0.76
191 O/E	鉋	平打前か	34O11	河川	中層		24.7	13.2	5.3	2.27
192 O/E	鉋	平打前	34O28?	V			18.0	10.5	3.6	1.39
193 O/E	未成品	近鉋	33N16?	V			13.8	9.3	3.2	0.69
194 S/E	未成品	近鉋	ヒスク	34O25?	V		21.6	13.4	7.5	3.51
195 S/E	ヒスク	ヒスク	36N9	P124			37.6	36.7	25.2	57.63

木製品觀察表(1)

凡例:

根絆: "→2007年分析、その他→2014年分析 法量: () →既存値

報告 番号	分類	種類	形状・断面	本取り	種種	出土位置			法量(cm)		備考
						グリッド	通査番号	鉢位	長さ	幅	
190 O/E	植物樹皮	板状(底)	板状	スギ	34O23	河川1	中層	長13.5	高4.0	0.6	神奈松、木片L1
192 O/E	植物樹皮	板状(底)	板状	スギ	34O26	河川1	中層	長7.0	高2.5	0.6	木片L1
198 O/E	植物樹皮	板状	板状	スギ	34O16	河川1	中層	長10.0	高2.0	0.6	
199 O/E	木片	棒状(直)	板状	スギ	34O17	河川1	中層	14.0	1.2	0.7	
200 O/E	木片	棒状(直)	板状	スギ	34O18	河川1	中層	15.7	1.2	0.8	
201 O/E	植物樹皮	板状	板状	カナキ	34O21	河川1	下層	20.8	1.6	1.1	
202 O/E	植物樹皮	板状	板状	カナキ	34O21	河川1	下層			11.8	
203 O/E	植物樹皮	板状	板状	カナキ	34O21	河川1	下層			11.0	外:一部崩化
204 O/E	樹皮	板状(直)	板状	スギ	33O15	河川1	下層	長31.8	四2.5	0.6	
205 O/E	樹皮	板状(直)	板状	スギ	34O21	河川1	下層	16.7	1.7	0.4	
206 O/E	樹皮	板状	板状	スギ	34O26	河川1	下層	17.5	4.4	0.7	
207 O/E	木片	棒状(直)	板状	スギ	33O20?	河川1	下層	32.8	1.1	0.6	
208 O/E	食卓用具	實木製品	圓柱	スギ	33O15	河川1	下層	9.7	0.5	0.5	
209 L-E	L-E	板机	板机	スギ	34O19	河川2		52.6	21.3	2.9	^C分析③: AD380~840
210 L-E	L-E	板机	板机	スギ	34O19	河川2		21.3	12.6	1.2	

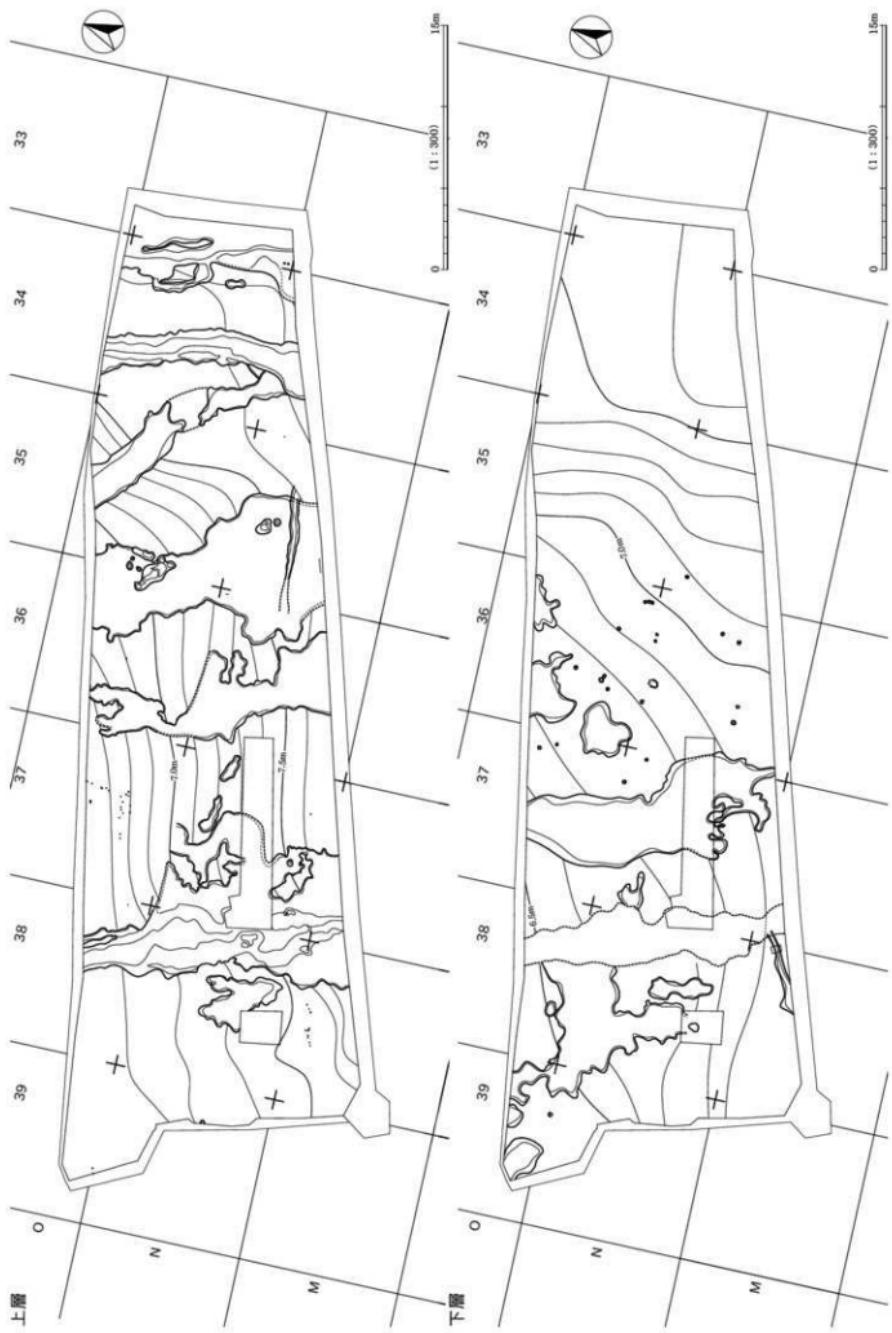
観察表

木製品観察表(2)

報告番号	分類群	種類	形状・表面	本取り	被検	出土位置			法量(cm)	備考	
						グリッド	遺物番号	部位	長さ	幅	
211	結構具	各角の枠木	棒状	削出	丸#	3DN23	河内5	I	23.8	1.9	2.3 °C分析番: AD680~780
212		机か	棒状(角)	削出	スギ	3RN1	河内6	3	41.1	3.4	2.1
213		机か	棒状(角)	削出	スギ	3TN5	河内6	I	62.9	4.6	1.8
214		不明	棒状	削出	スギ	3RN22	河内6	I	17.5	5.9	1.2
215	上木材	机か	棒状	削出	スギ	3RN9	P145		19.4	6.1	5.1
216		手明	棒状(平)	削出	スギ	3RN12	机22		26.4	2.2	1.9
217		手明	棒状(角)	削出	スギ	3RN5	机23		45.6	3.7	3.5
218		机か	棒状(円)	丸木	トヨリコ属 トヨリコ属	3RN23	机12		8.0	1.8	1.4
219	上木材	机	棒状(円)	丸木	ツヅクジイ	3RN23	机18		14.1	2.5	2.2
220	1.4M	机	棒状(円)	丸木	タラノキ	3T08	机30		15.1	3.6	2.9 剥皮一部残存
221	1.4M	机	棒状(円)	丸木	タラノキ	3T08	机34		12.2	3.4	2.2
222	1.4M	机	棒状(角)	削出	クリ	3RN21	机51		62.4	7.4	6.2
223	1.4M	机	棒状(円)	丸木	クリ	3T09	机36		13.6	2.9	2.9
224a	1.4M	机	棒状(円)	丸木	スダジイ科	3T012	机39		10.5	3.1	2.6
224b	1.4M	机	棒状(円)	丸木	スダジイ科	3T012	机39		22.9	3.2	2.5 °C分析番: AD1290~1390
225	1.4M	机	棒状(円)	丸木	マツ属	3RN21	机43		29.2	4.4	4.1 剥皮残存
226	工具	鉗子	棒状	削出	スギ	3P01	N/b		21.3	5.6	0.8
227		円形板か	知れず	削出	スギ	3R024	N/b		12.5	2.6	0.6
228		不明	知れず	削出	スギ	3A017	N/b		5.4	4.2	0.7 表面炭化
229	食器皿	實体木製品	削出	スギ	3A05	N/b			15.0	0.7	0.6
230		不明	棒状(平)	削出	スギ	3A24	N/b		18.0	2.5	1.2
231a	容器	漆物細部	削出	スギ	3M016	N/b			10.3	1.4	0.5 縫じれ孔
231b	容器	漆物細部	削出	スギ	3M016	N/b			7.4	1.5	0.4 縫じれ孔
232											中心縫り後きかく、丸2.1mm孔、神灰
233	容器	漆物底板(底)	削出	スギ	3MN24, 25, 3RN21~23	N/b			12.9	13.5	0.8 木町丸4(残2)
234		半円形板か	削出	スギ	3M016	N/b			15.6	0.6	1.7 上端わずかに炭化
235	上木材	机	棒状(角)	削出	クリ	3M04	N/b		12.4	3.9	2.9
236		不明	棒状(円)	削出	スギ	3A023	N/b		8.9	1.3	1.3
237		不明	棒状(円)	削出	スギ	3M06	N/b		15.6	1.6	1.4
238		不明	棒状(円)	削出	スギ	3MN24, 25, 3RN21~23	N/b		30.7	2.6	2.3
239	漆材	板状	削出	スギ	3A011	N/b			39.4	7.1	1.4
240		不明	棒状(角)	削出	スギ	3RN25	N/b		44.5	3.9	2.4 表面炭化
241	漆飾具	漆油下塗	削出	スギ	モクレン属	3M04	N/b		15.1	6.9	1.2 全縁1.3~1.5cm
242	漆飾具	無油下塗	削出	スギ	3M021	N/b			14.9	7.3	1.1
243	漆飾具	漆油下塗、漆	削出	スギ	モクレン属	3A09	N/b		8.0	12.6	1.9
244	竹器	漆油瓶	縫合・縫目	ケヤキ	3A25	N/b					(8.1)
245	竹器	漆油か	板状	削出	スギ	3MN19	N/b		12.1		1.3 中央に丸孔4、直径1.5cm
246	竹器	漆油底板	削出	スギ	3M016	N/b			20.6	12.7	1.3 木町丸2、表端一部炭化
247	食器皿	實体木製品	削出	スギ	3TM28	N/b			12.8	6.5	0.5
248	調理加工工具	竹子か	縫合・縫目	フサザク9	3T76	N/b			11.6		(丸孔) 約7.15cm、厚さ1.5~1.9cm
249	原始具	漆か	棒状(円)	丸木	ヤマモロ属	3M018	N/b		12.0	3.6	3.1
250	原始具	漆か	棒状(円)	丸木	ノリワツ科	3RN12	N/b		14.9	3.6	3.3
251		不明	分削(心丸)	スギ	3T01	N/b			13.0	4.7	4.0 手すまたまたは漆刷毛の一部か
252		不明	棒状(平)	削出	スギ	3P01	N/b		19.0	3.1	0.7
253		不明	棒状	削出	スギ	3M011	N/b		22.1	6.2	1.4
254		不明	棒状(角)	削出	スギ	3M022	N/b		5.7	2.6	2.0
255		不明	棒状	削出	スギ	3M037	N/b		11.0	6.2	2.0
256		漆材	漆油下塗	削出	スギ	3M019	N/b		11.0	4.1	0.3
257		漆材	漆油下塗	削出	スギ	3RN21	N/b		11.9	5.2	2.1 本体・組合材ともスギ
258		漆材か	板状	スギ	3M016	N/b			36.3	2.7	2.8
259		不明	棒状(円)	削出	スギ	3M019	N/b		8.0	1.6	0.6
260		不明	棒状(円)	削出	スギ	3M019	N/b		11.7	1.2	1.0
261		不明	棒状(角)	削出	スギ	3M013	N/b		16.7	1.7	1.4
262		不明	棒状(円)	削出	スギ	3M016	N/b		13.4	1.9	1.5
263		不明	棒状(円)	削出	スギ	3TM23	N/b		16.8	2.6	2.1
264		漆材	漆油下塗	削出	スギ	3A021	N/b		39.9	3.3	1.9
265		漆材	漆油(角)	削出	スギ	3A021	N/b		23.8	3.4	2.5
266	容器	漆油瓶	縫合・材目	ブナ属	3TM25	N/b					(5.6) 内舟: 漆油舟: 表面文様 外舟: 黒漆 内舟: 柚漆
267	容器	漆油瓶か	縫合・材目	ブナ属	3T01	N/b					
268		不明	板状	削出	スギ	3T25	N/b		8.5	1.9	0.6
269	食器皿	實体木製品	削出	スギ	3M014	N/b			12.6	0.7	0.4
270		不明	板状	削出	スギ	3M009	N/b		13.9	(14.0)	0.7 細は既定箇
271	漆材	漆油瓶	縫合	ビノキ	3M024	N/b			8.1	2.9	0.6
272	漆材	漆油(角)	削出	スギ	3M05	N/b			21.4	1.9	1.1
273	漆材	板状	削出	スギ	3M015	N/b			28.1	6.9	1.2
274	自然木	丸木		クマノミズク キ類	3M015	河内4	1'				°C分析番: AD775~875
275	自然木	丸木		スギ	3RN3	SN103c	1'				°C分析番: BCS~AD55

図 版

全体図(1)

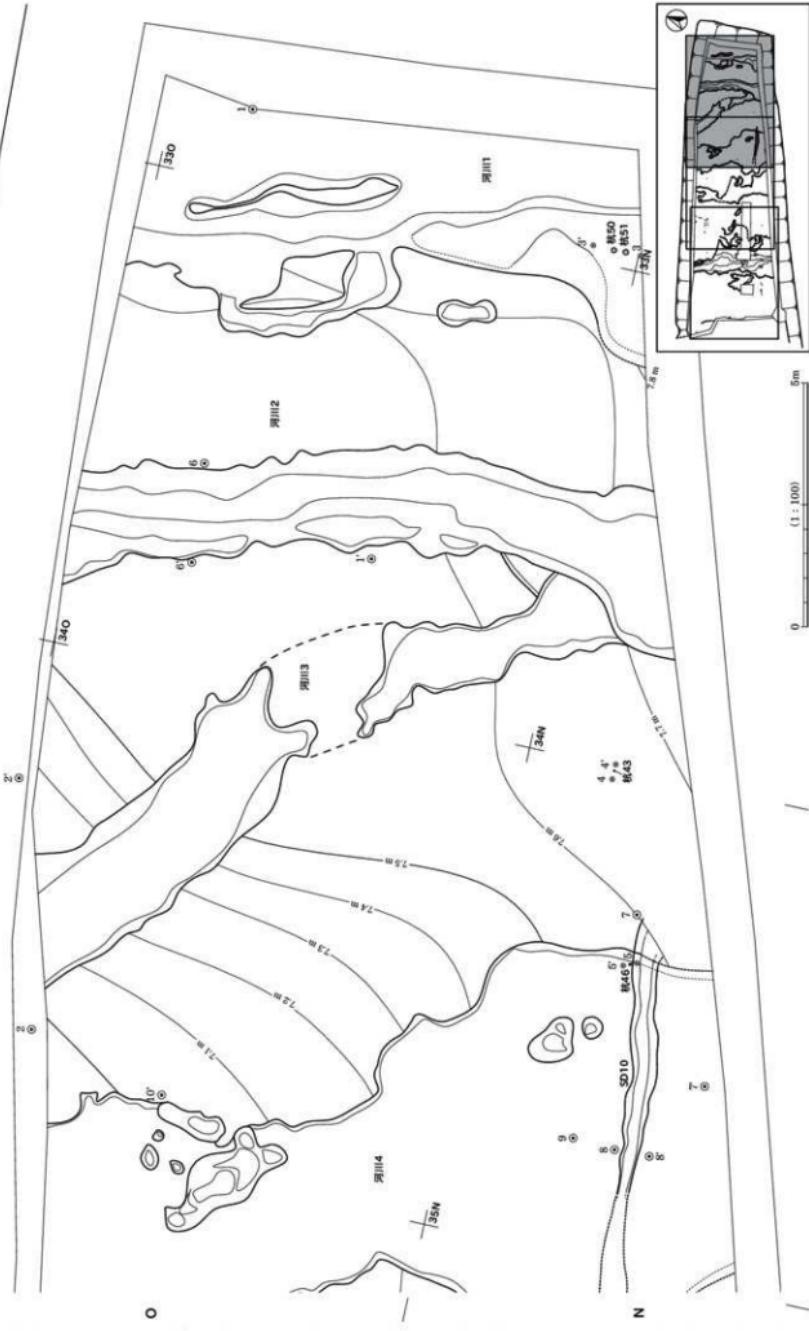


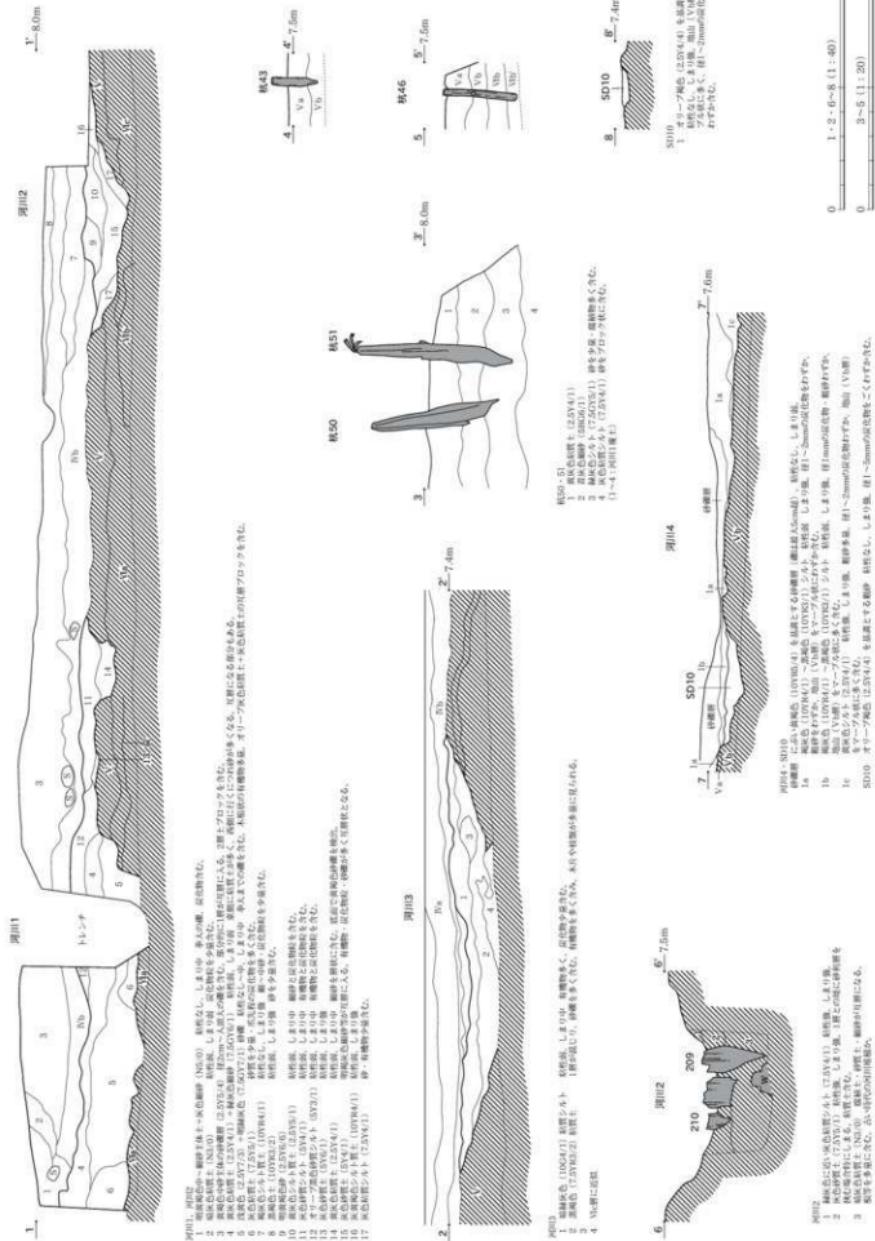
33

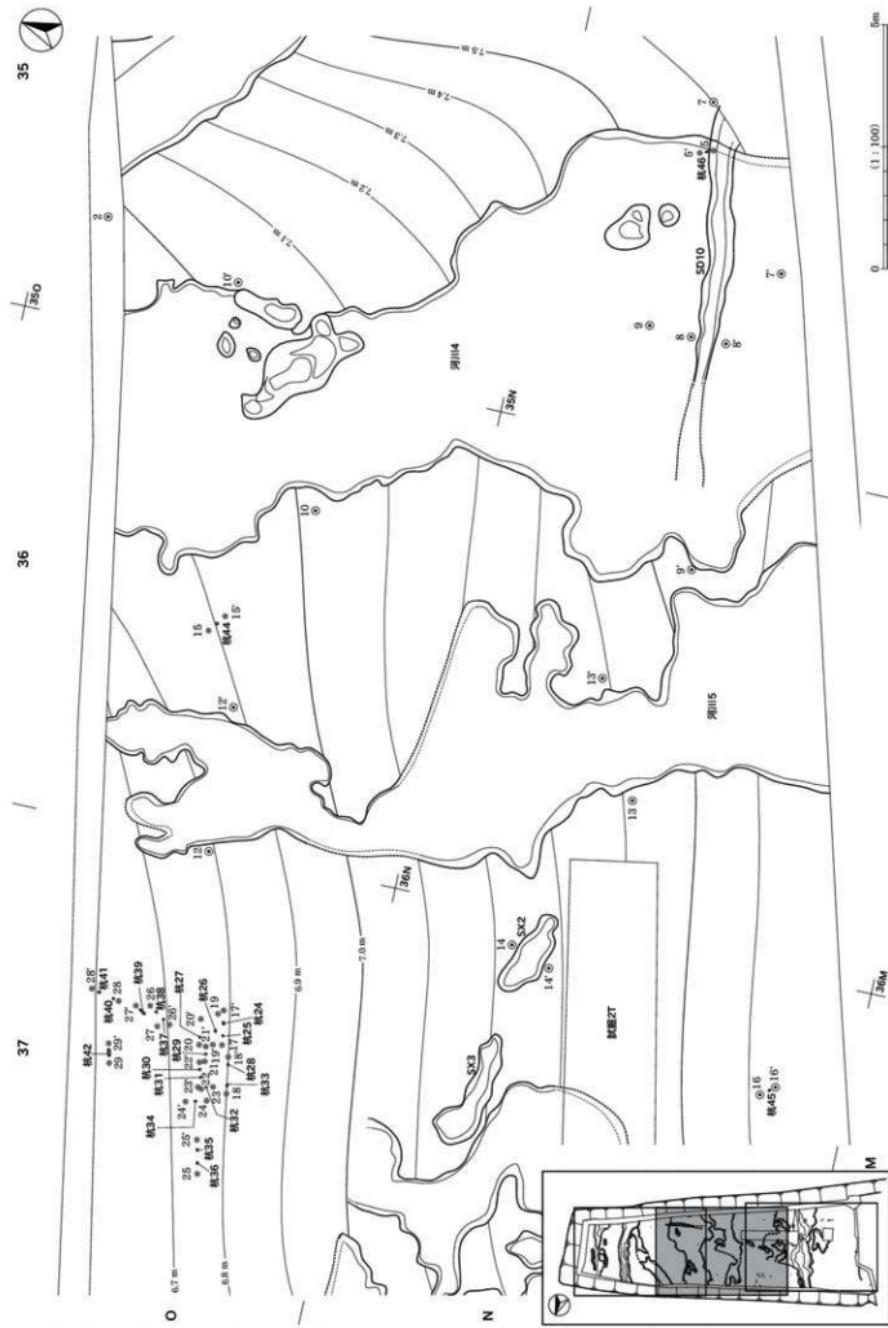
34

35

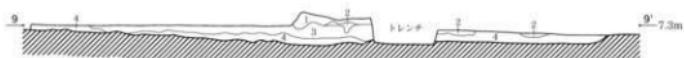
36

 $\frac{1}{350}$ $\frac{1}{350}$ $\frac{1}{350}$ $\frac{1}{350}$ $\frac{1}{350}$ $\frac{1}{350}$ 

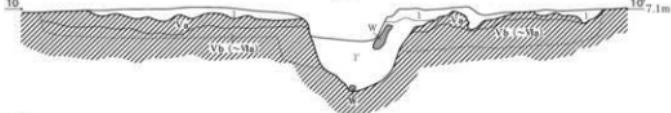




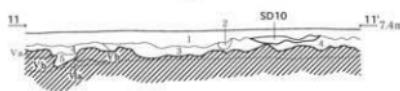
河川4



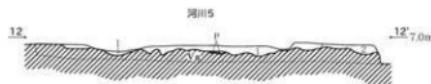
河川4



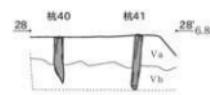
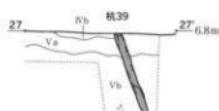
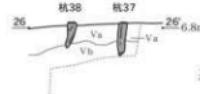
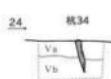
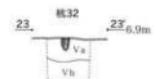
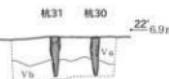
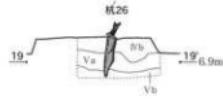
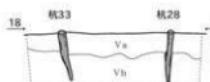
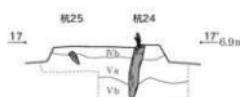
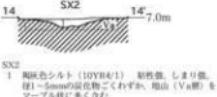
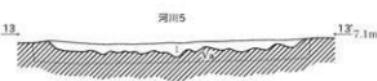
河川4



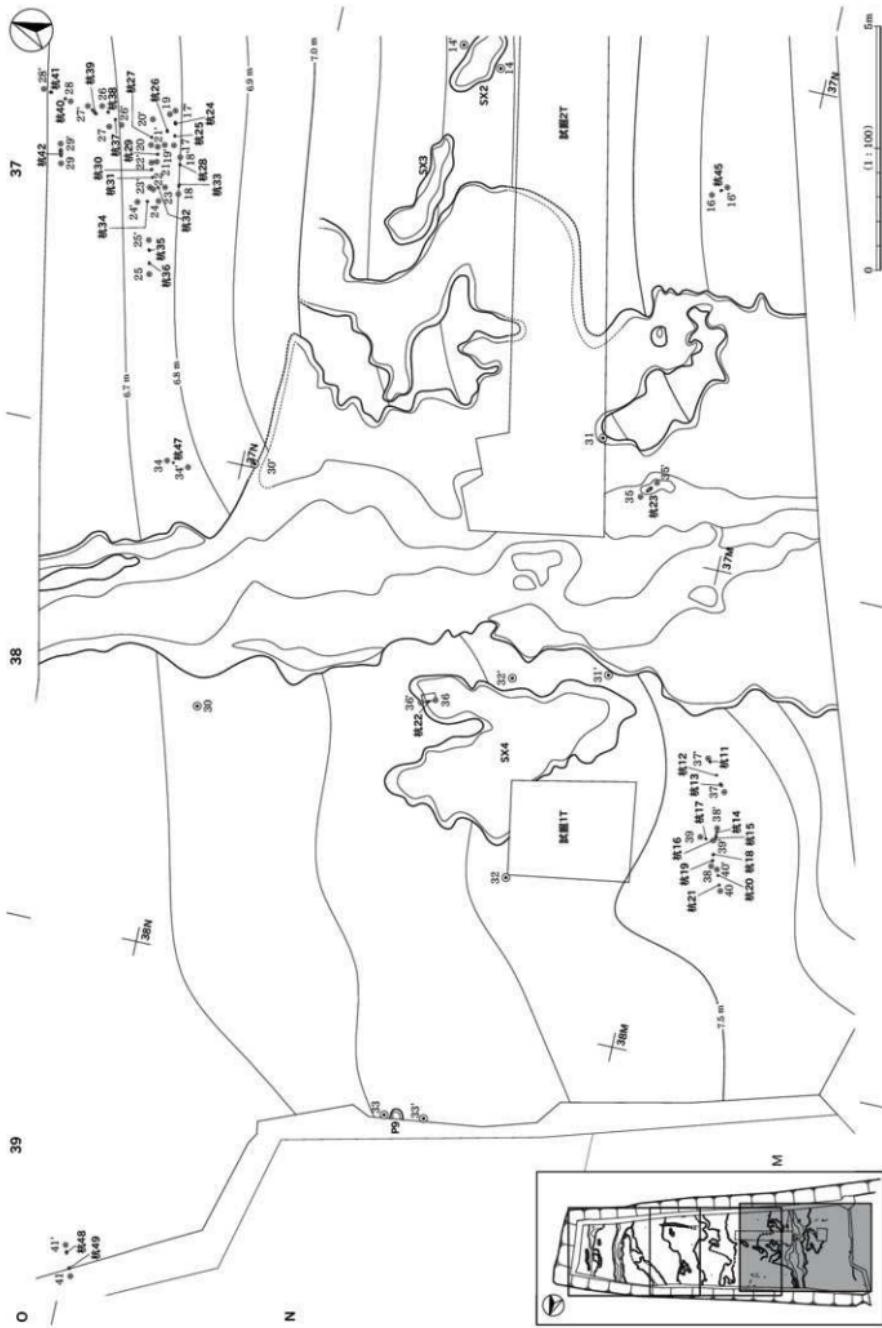
河川4

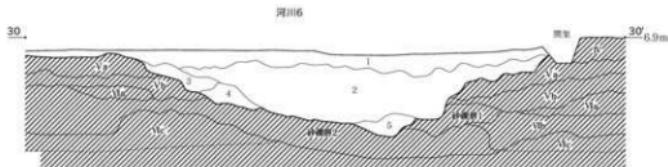


河川5



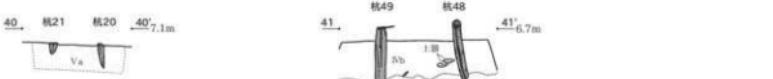
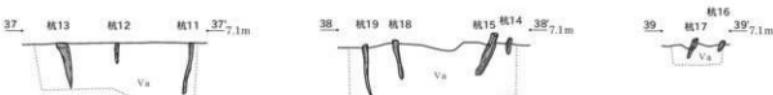
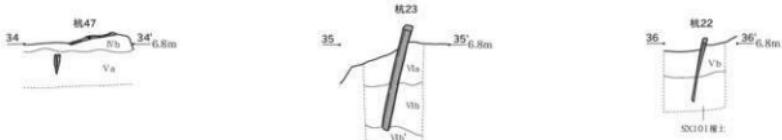
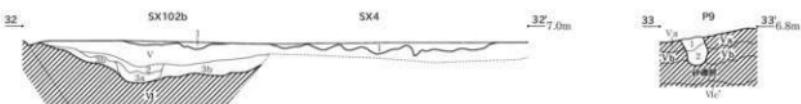
0 9~14 (1:40) 2m 0 15~29 (1:20) 1m



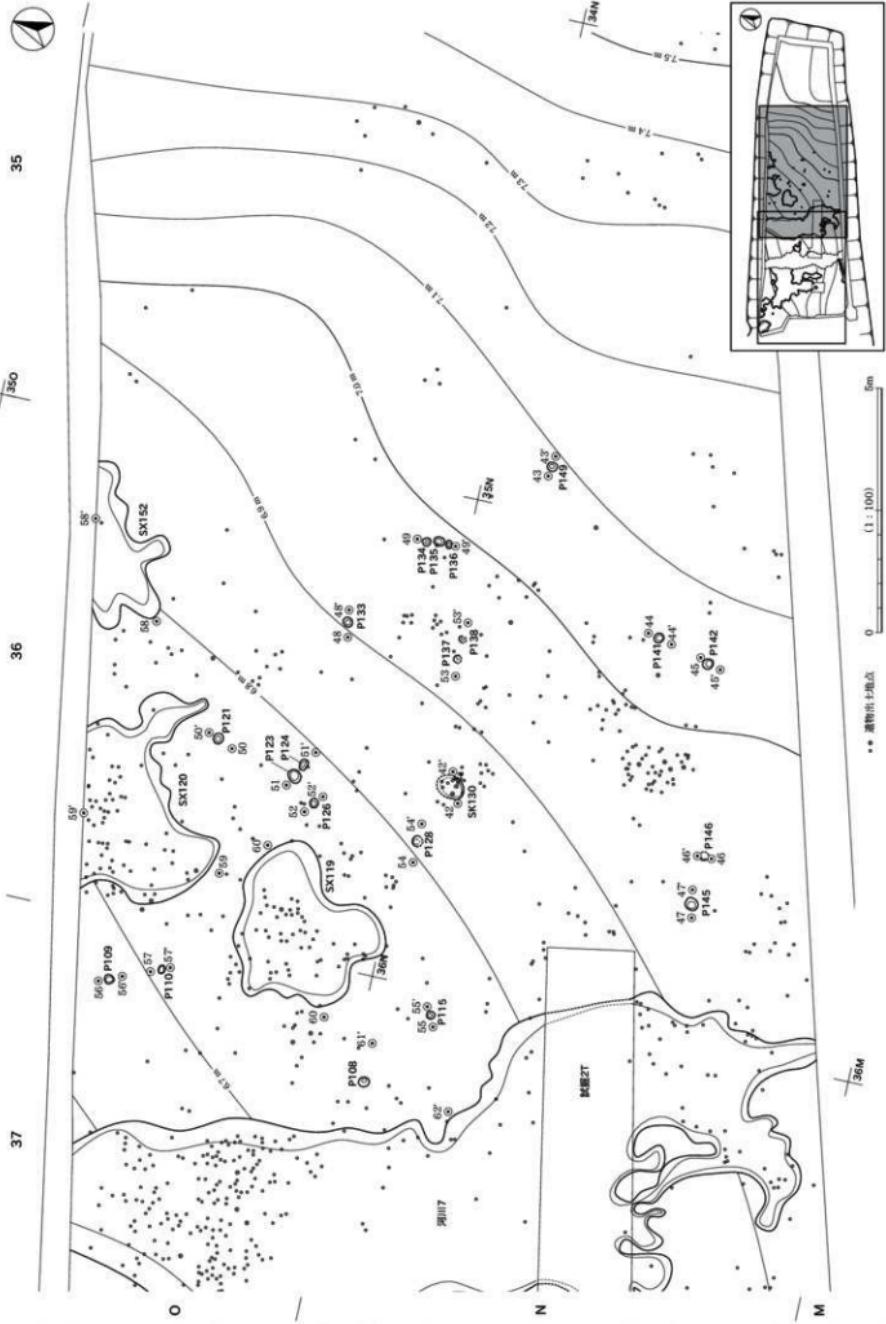


河川6

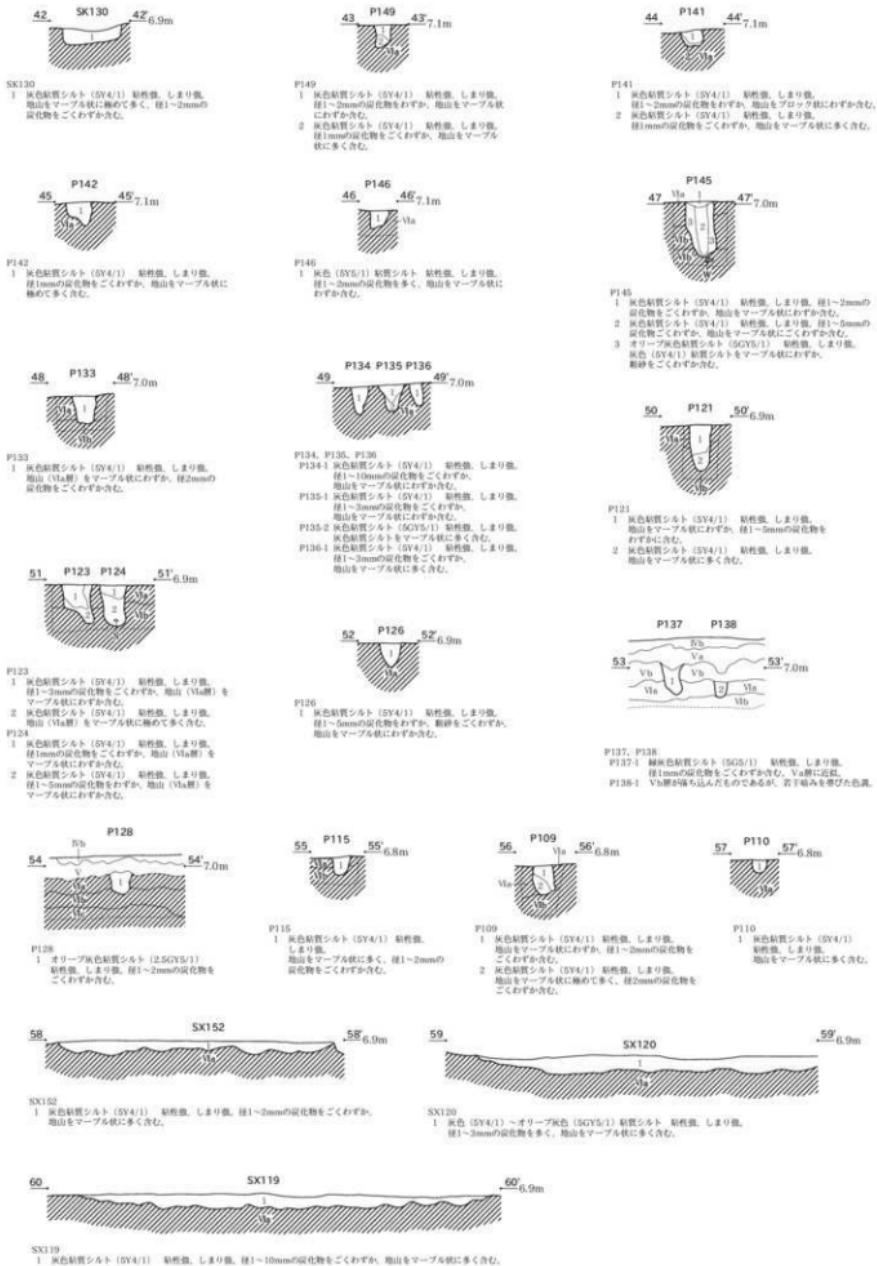
1 黄褐色 (10YR5/1) ~褐褐色 (10YR4/1) シルト・粘性泥。しまり無。粗砂をわずか。径1~5mmの炭化物をごくわずか含む。
 2 黄褐色 (10YR2/1) ~褐褐色 (10YR4/1) シルト・粘性泥。しまり強。粗砂を多く。径1~5mmの炭化物をごくわずか含む。
 3 黄褐色 (10YR5/1) ~褐褐色 (10YR4/1) シルト・粘性泥。しまり強。粗砂を多く。径1~5mmの炭化物をごくわずか含む。
 4 黄褐色シルト (10YR2/1) 粘性泥。しまり強。地山をブロック状に多く、粗砂をわずか。径3mmの炭化物をごくわずか含む。
 5 褐灰色砂質シルト (5G5/1) 粘性泥へ中。しまり強。径1~3mmの炭化物をごくわずか。地山 (Vb層) に近似。

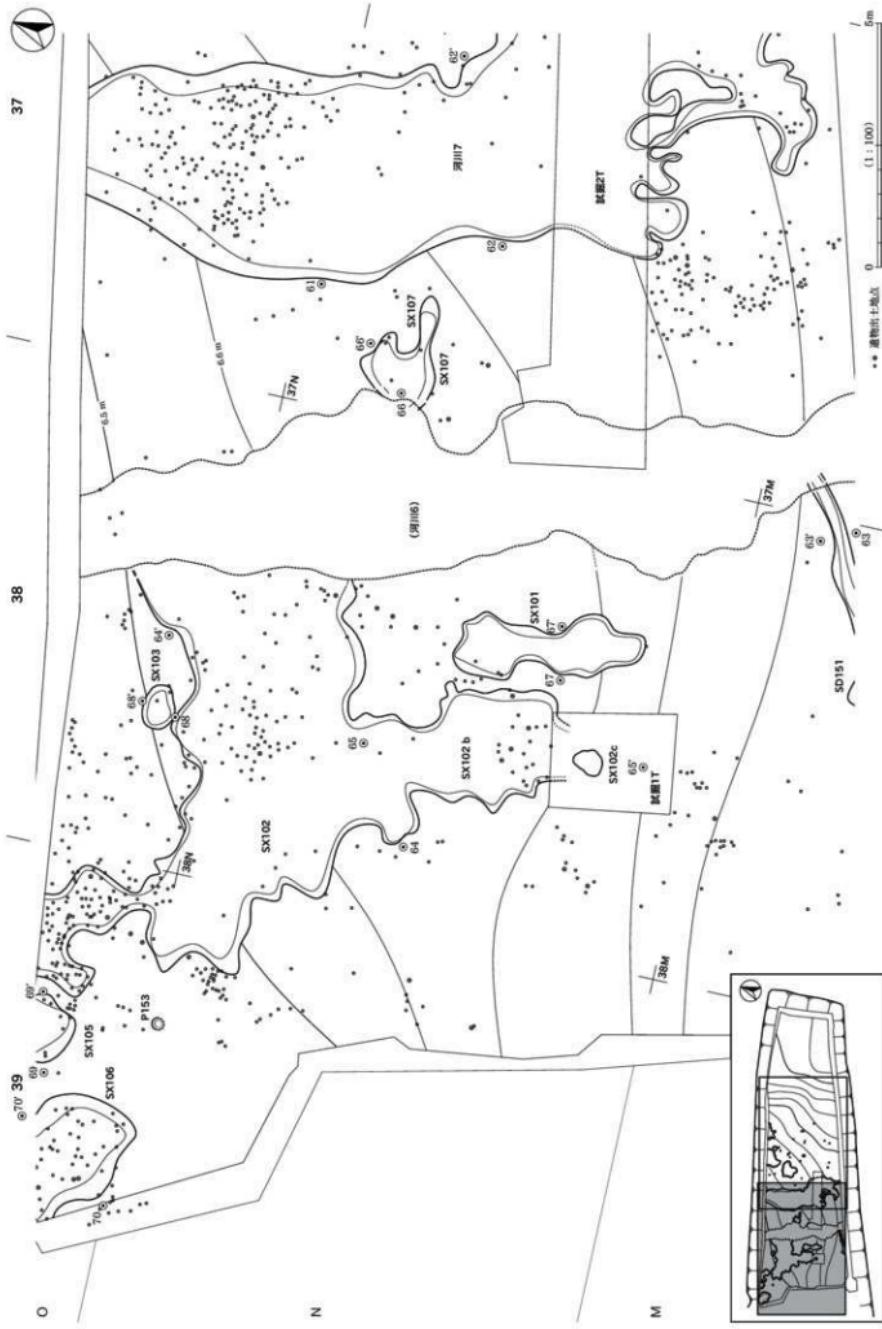


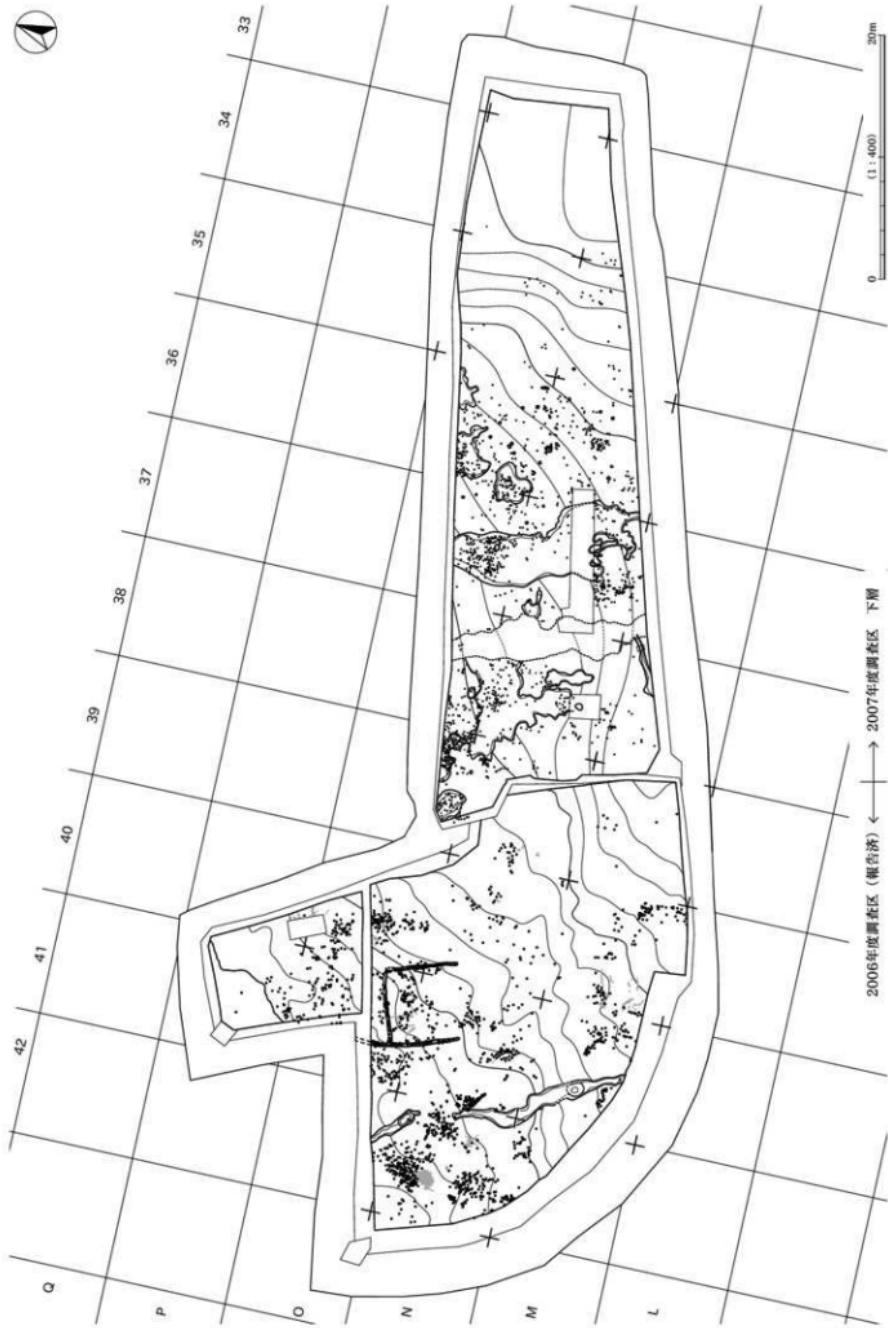
0 30~33 (1:40) 2m
 0 34~41 (1:20) 1m



下層 個別図(1)

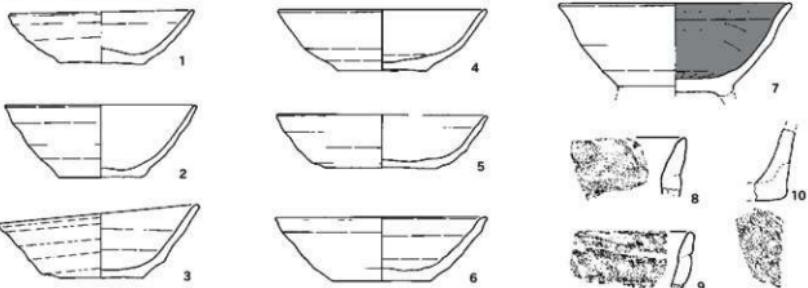




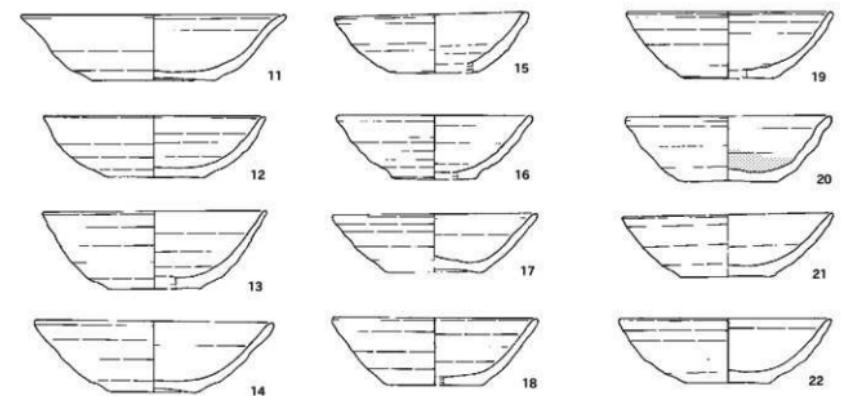


古代の土器(1)

河川1-中層・中～下層(1～10)



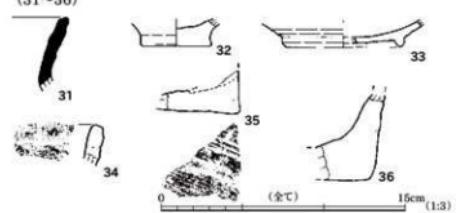
河川1-下層(11～28)



河川6(29・30)



河川1の上 土石流(31～36)

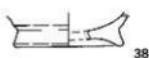
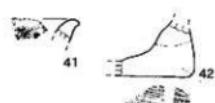
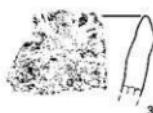


■ 黒色処理 ■ 炭化

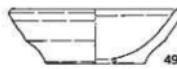
図版 14

古代の土器(2)、中世の陶磁器、土製品

Nb層 (37~45)



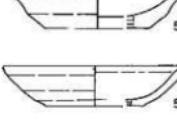
M層 (46~52)



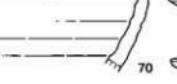
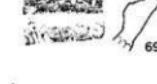
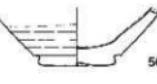
Ma層 (53~54)



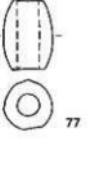
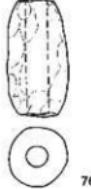
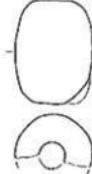
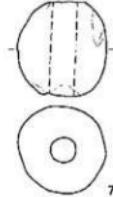
黒色処理



中世 (55~73)

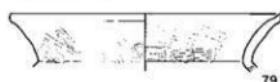


土製品 (74~78)

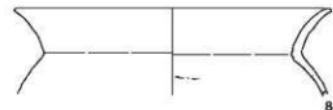
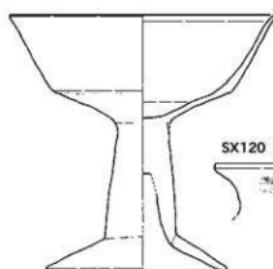
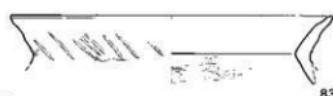
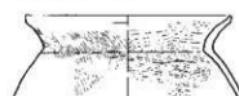


0 (全て) 15cm (1:3)

SX102 (79・80)



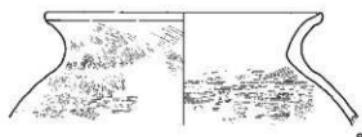
SX106 (81~86)



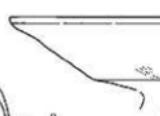
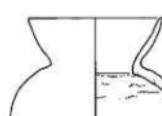
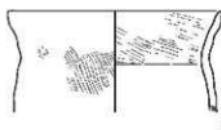
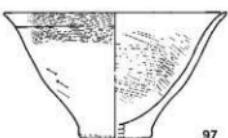
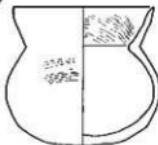
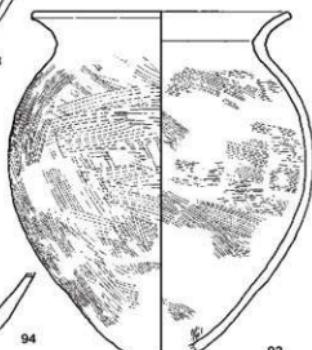
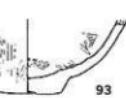
SX120 (87)



SX105 (88)



河川7 (89~98)



(全て)

15cm (1:3)

91

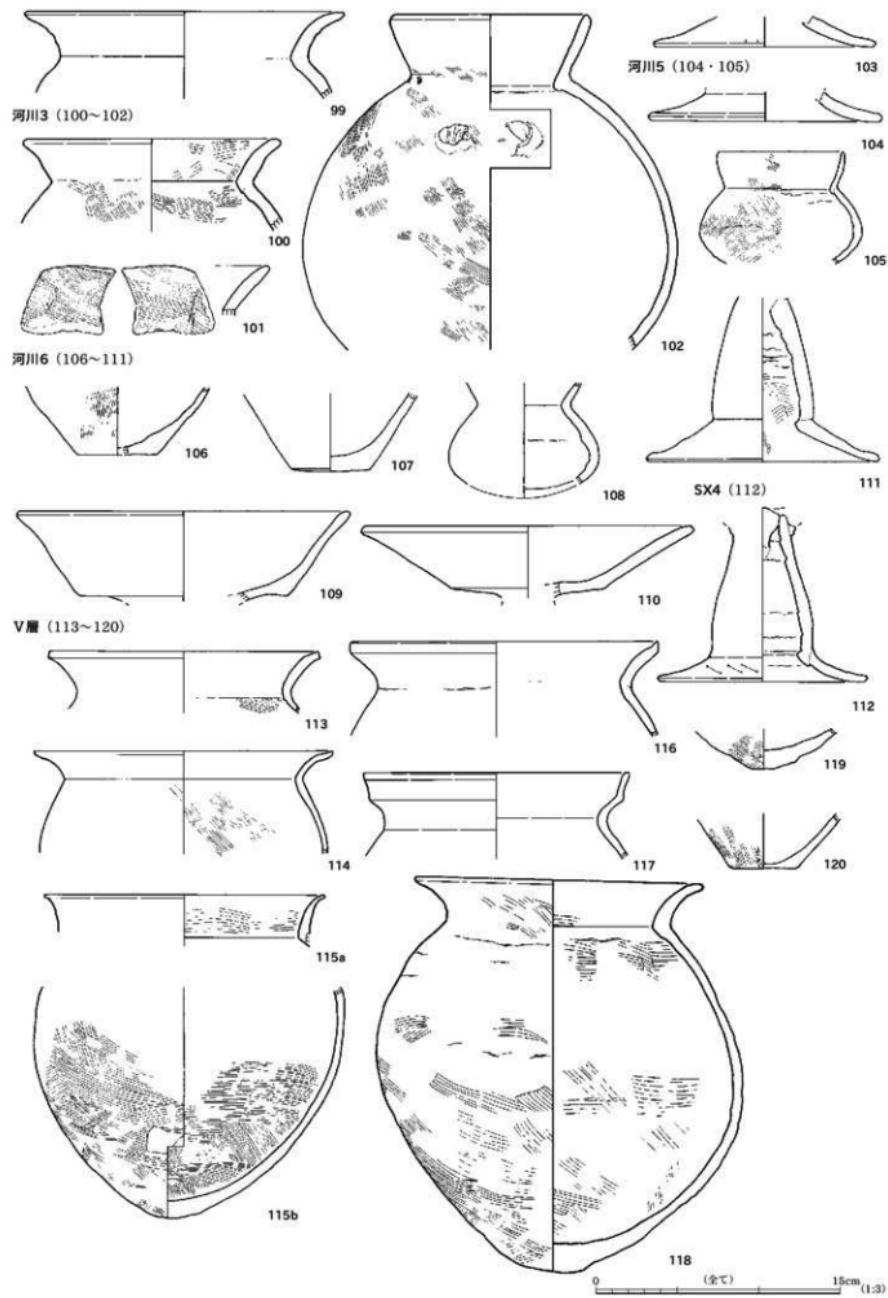
95

97

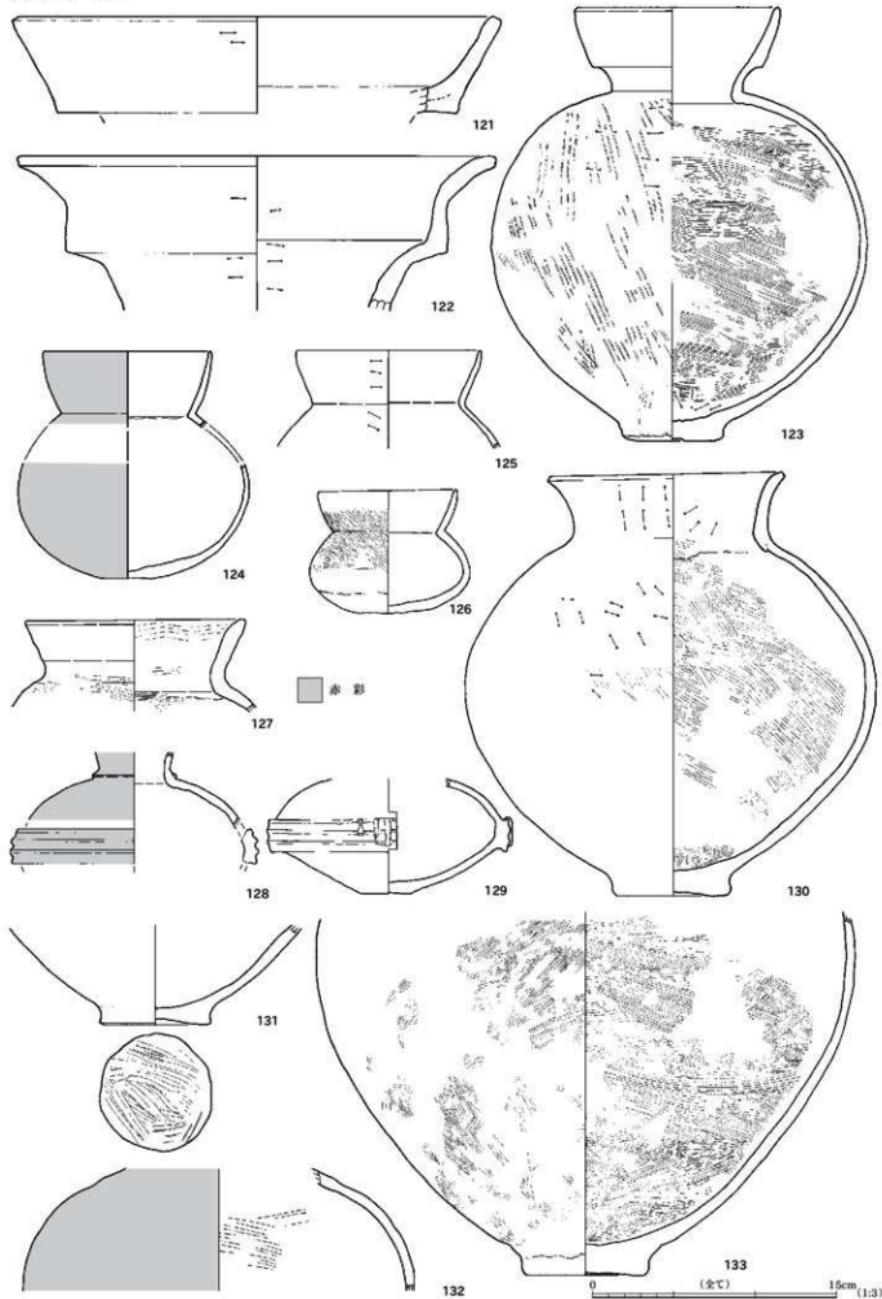
98

96

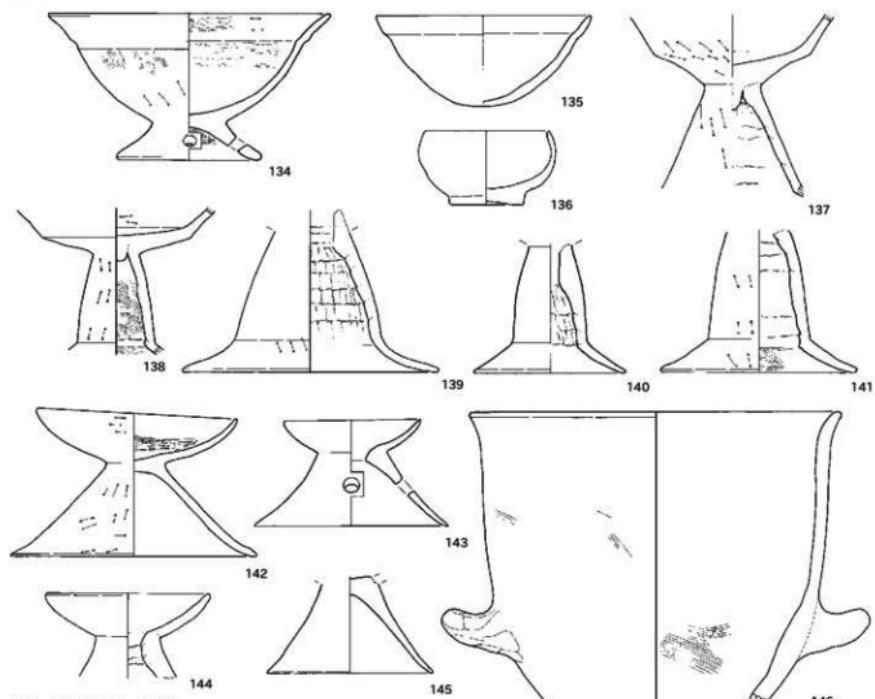
98



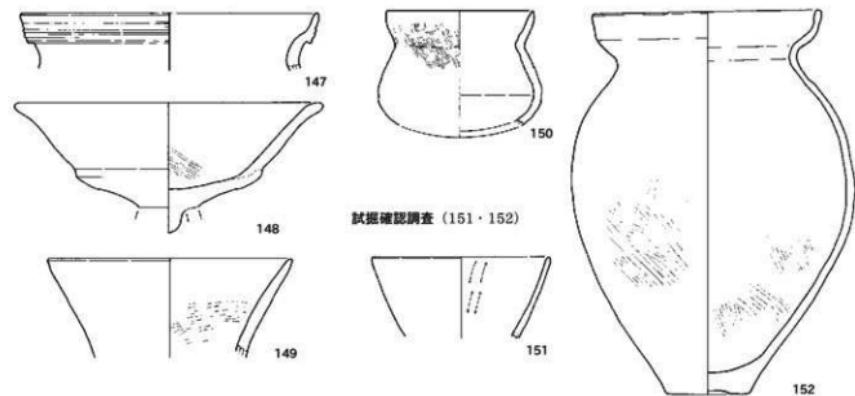
V層 (121～133)



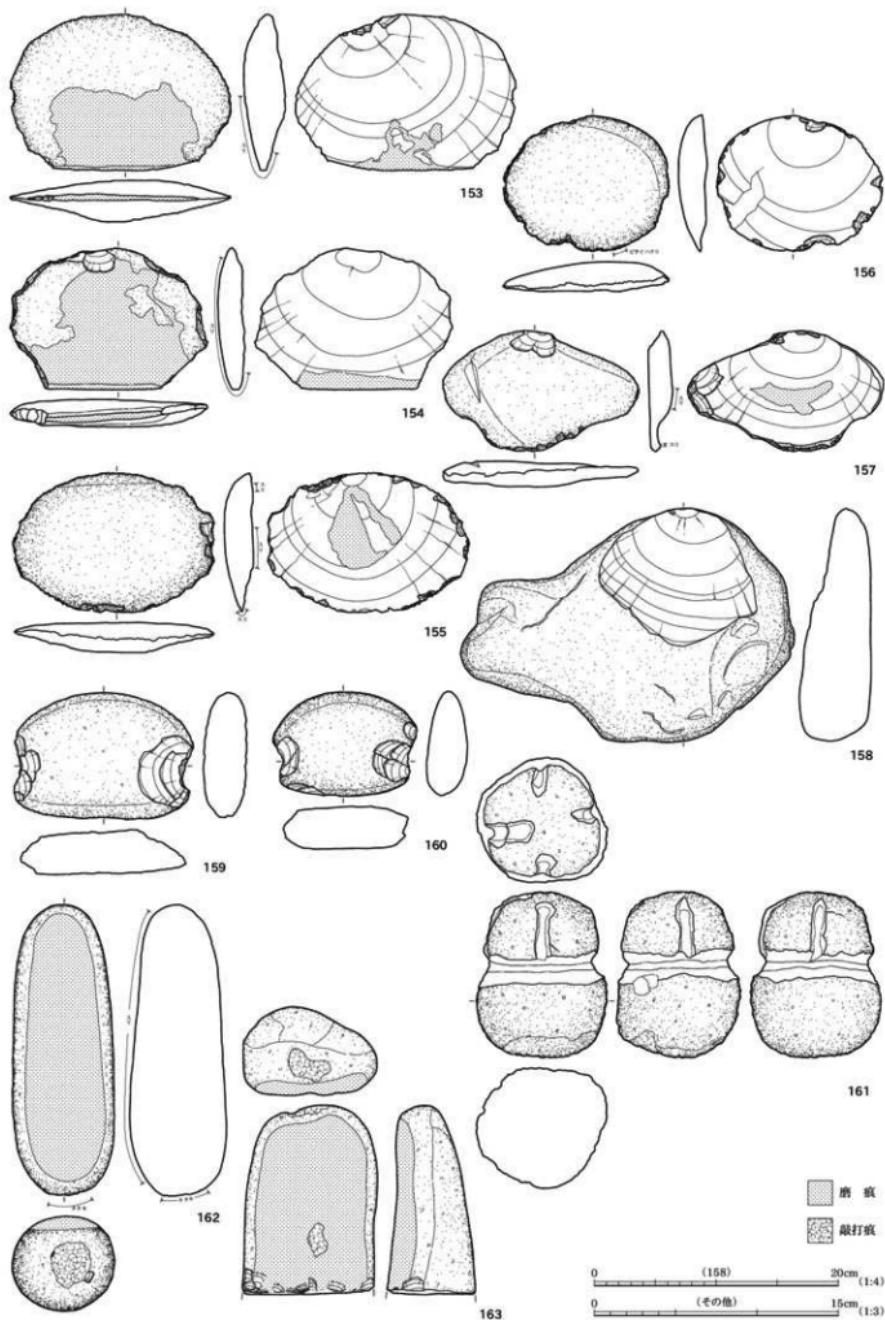
V層 (134～146)

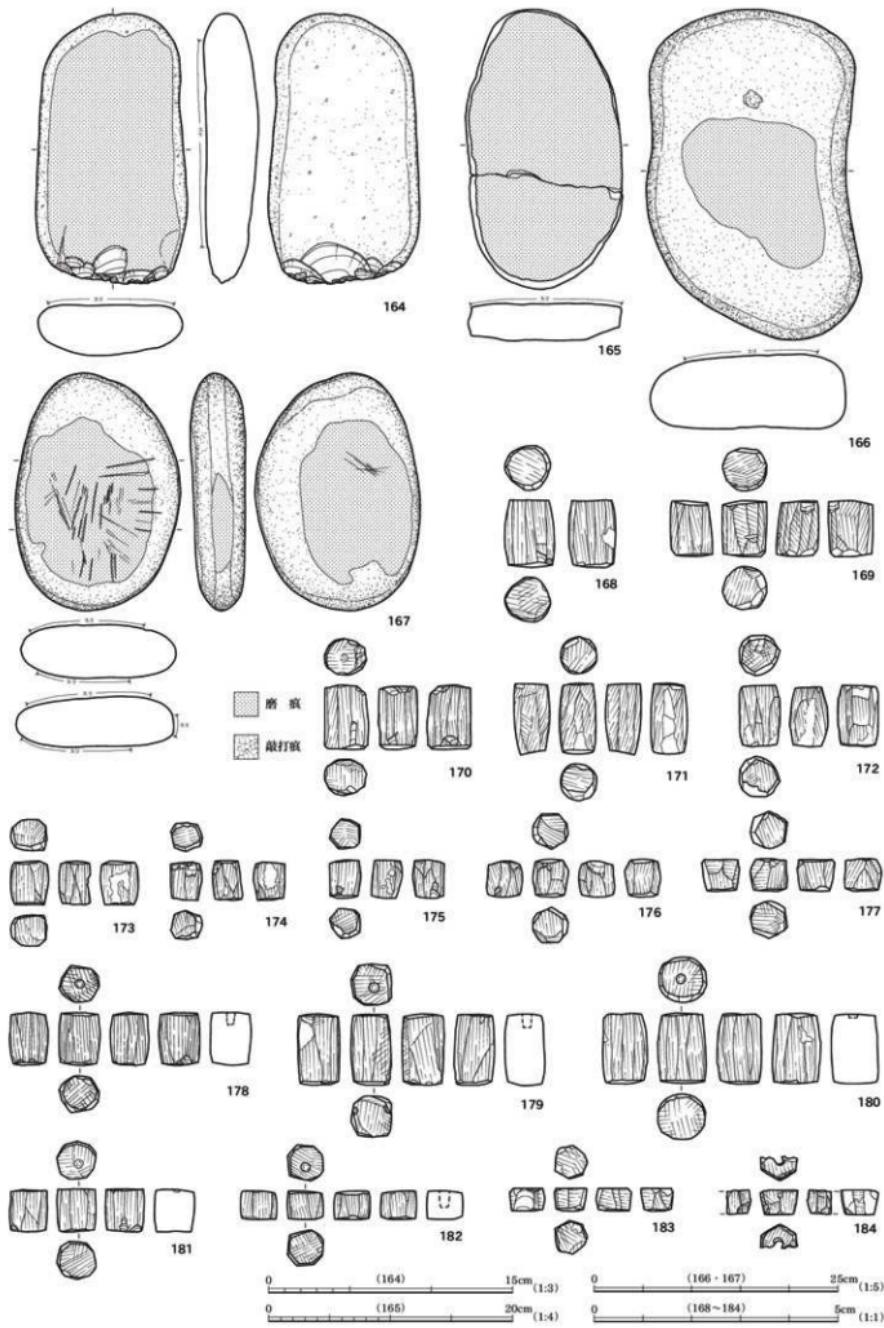


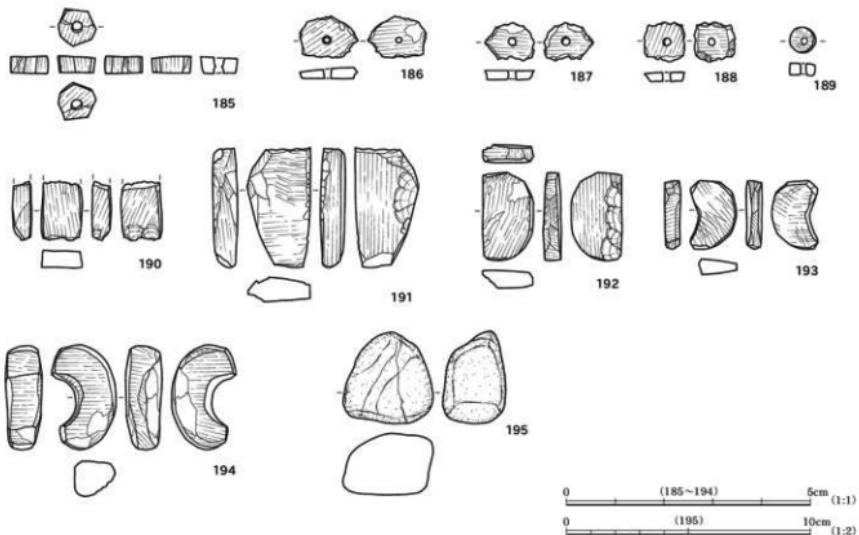
M層・Mb層 (147～150)



試掘確認調査 (151・152)



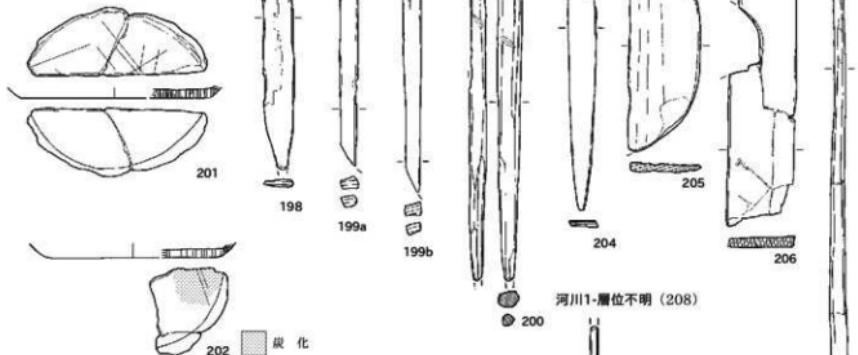




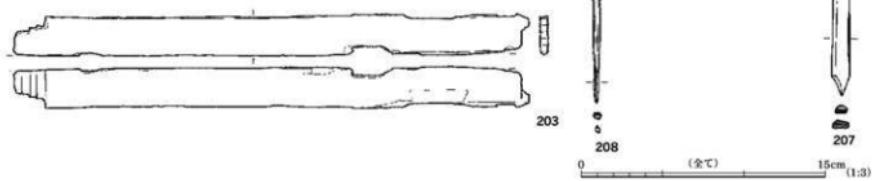
河川1-中層 (196~200)

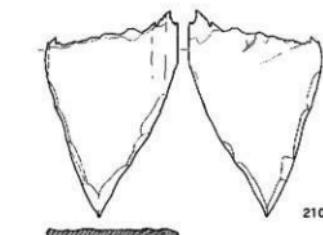
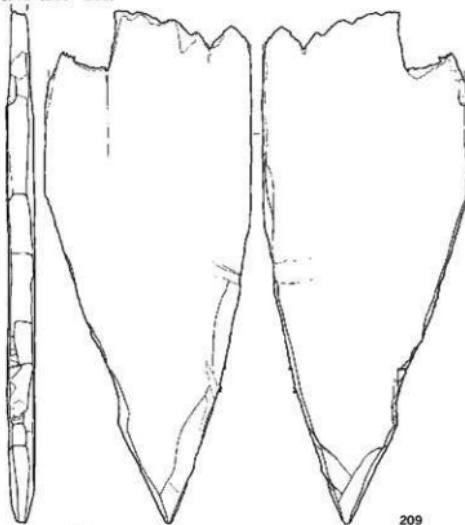


河川1-下層 (201~207)



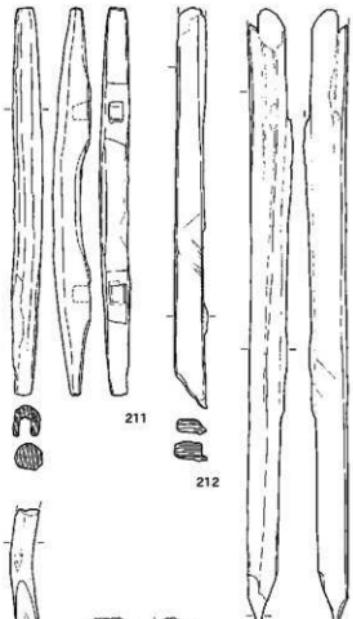
河川1-層位不明 (208)



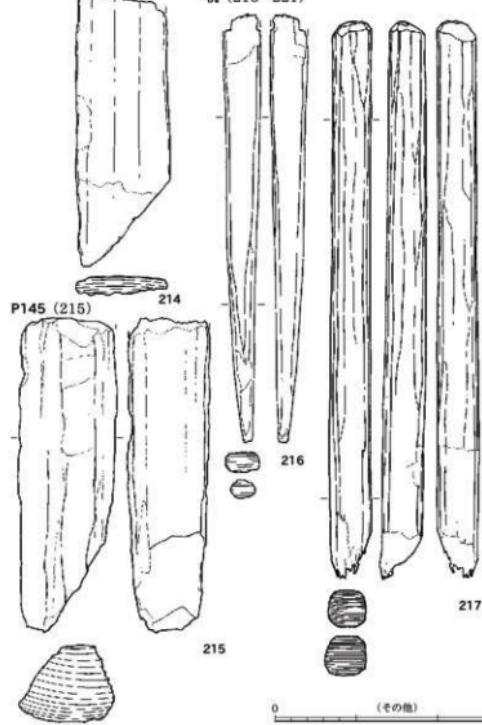


河川5 (211)

河川6 (212~214)

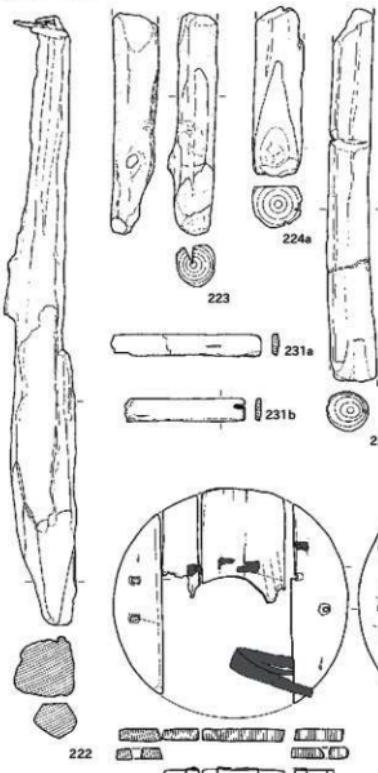


杭 (216~221)

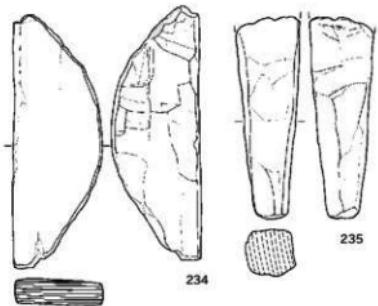
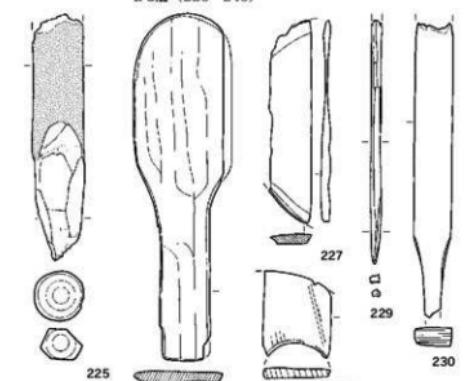


木製品(3) 杭、IV b 層

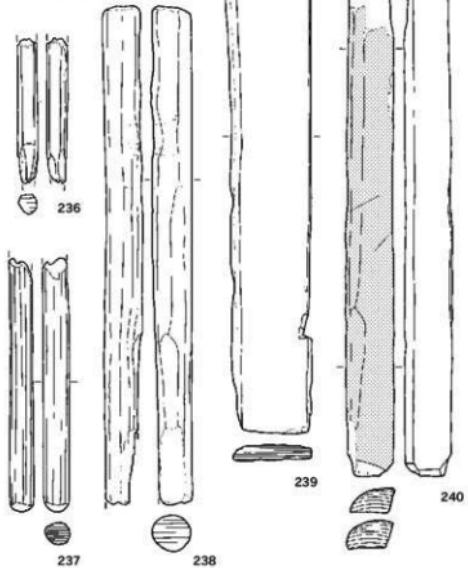
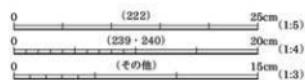
杭 (222~225)



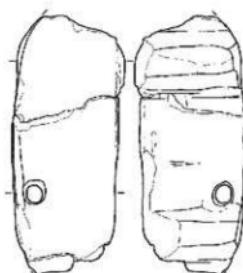
IV b 層 (226~240)



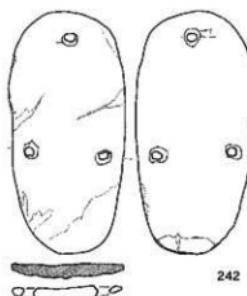
炭化



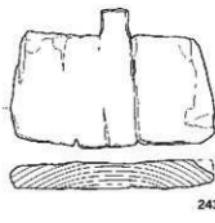
M層 (241~257)



241



242



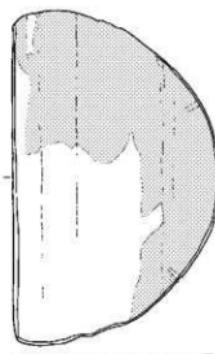
243



244



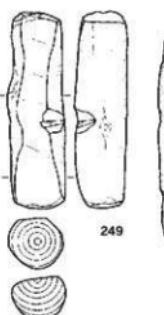
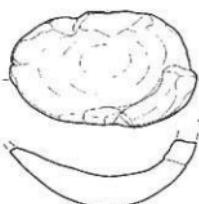
245



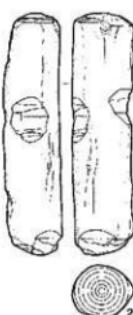
246



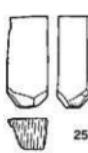
248



249



251



252



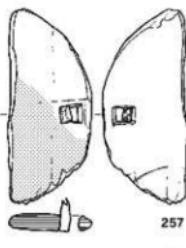
253



254



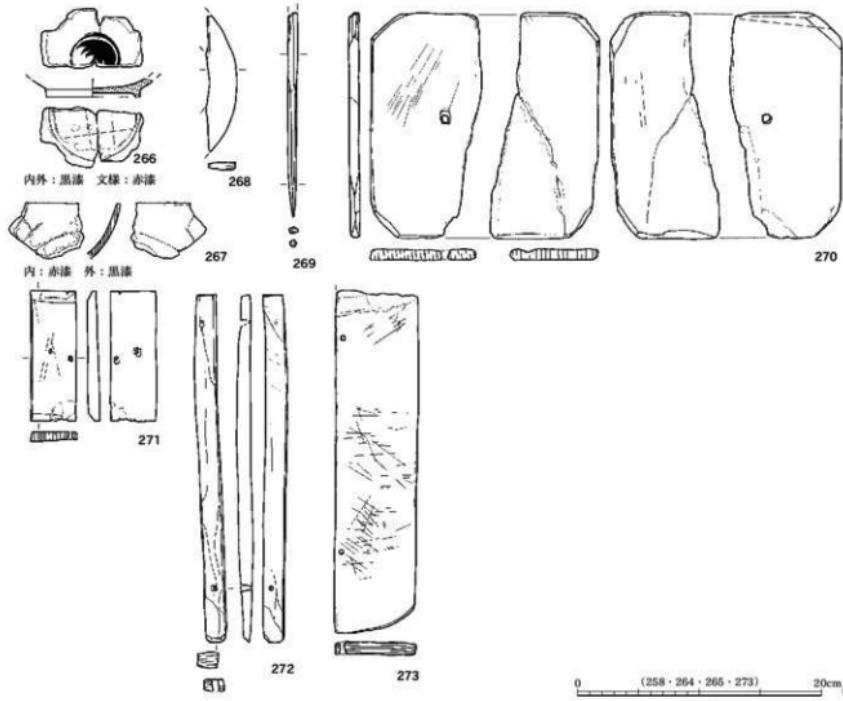
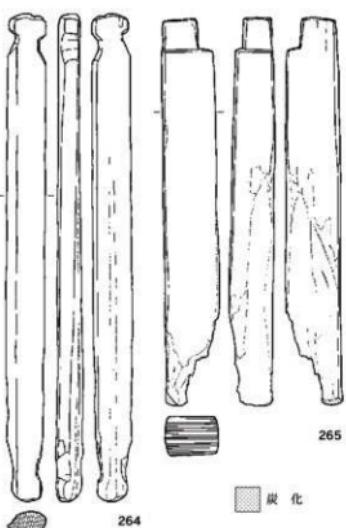
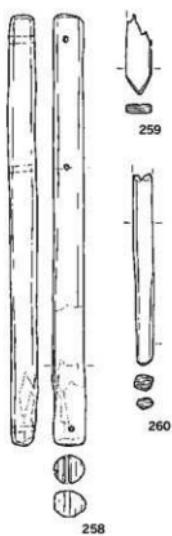
255



257

炭化

0 (全長) 15cm (1:3)



0 (258・264・265・273) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)



遺跡遠景 (西から)



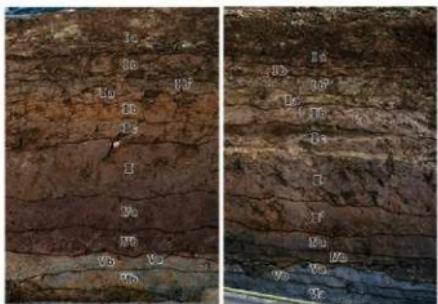
河川 2 断面 (北から)



河川 6 断面 (南西から)



河川 2 完堀 (北西から)



基本層序 (左 : 35P グリッド, 右 : 37M グリッド)



下層 完堀（上から）



上層 完堀（南西から）



河川 1 (330) 土器 (23) 出土状況（北西から）



杭 46 断面（東から）



河川 7 遺物出土状況



34025 土器・玉類未成品出土状況（南西から）



36N 土器 (139) 出土状況（東から）



古墳時代の土器



古代の土器



玉類未成品



墨書き土器



糞玉未成品 穿孔部断面



P9 断面(西から)



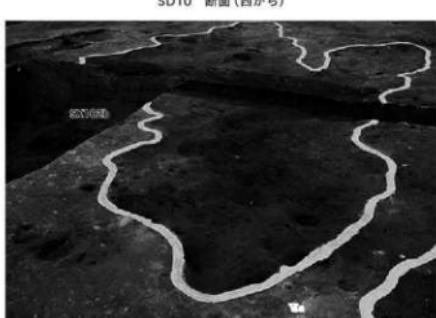
P9 完堀(西から)



SD10 断面(西から)



SX2 断面(西から)



SX4・SX102b 断面(南東から)



河川1 断面(北から)



河川1・2 断面(北西から)



河川1(340) 土器(14) 出土状況(南西から)



河川1(340) 土器(20)出土状況



河川1 完堀(北西から)



河川2 板杭(左:210、右:209)断面(北から)



河川2 自然木出土状況(北から)



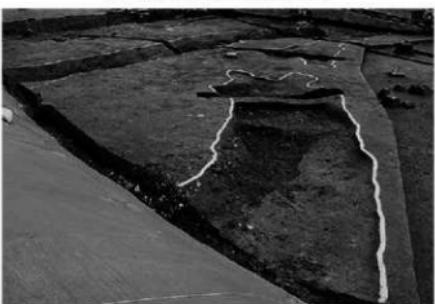
河川1~3 完堀(南から)



河川3(350) 遺物出土状況(南から)



河川3(350) 石製品(165)出土状況(西から)



河川3 完堀(北西から)



河川 4 断面(西から)



河川 4 (35・36O) 断面(南東から)



河川 4 完堀(南から)



河川 5 (36O) 遺物出土状況(北西から)



河川 5 完堀(南から)



河川 6 (38M) 断面(北から)



河川 6 (38N) 土器(29) 出土状況(南から)



河川 6 (38N) 土器(30) 出土状況(南から)



河川 6・SX3 断面(北西から)



河川 6・SX4 完堀(南から)



杭 11～21 断面(南から)



杭 23 断面(南西から)



杭 24～42 断面(南東から)



杭 25・24 断面(南から)



杭 42 断面(南から)



杭 48・49 断面(南東から)



杭 50・51 断面(東から)



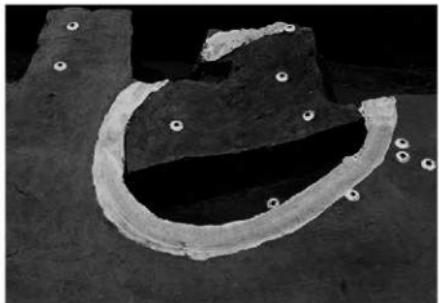
350 M層 木製品(242) 出土状況



350 Mb層 木製品(226) 出土状況



上層 完堀(東から)



SK130 断面(南から)



SD151 完堀(北東から)



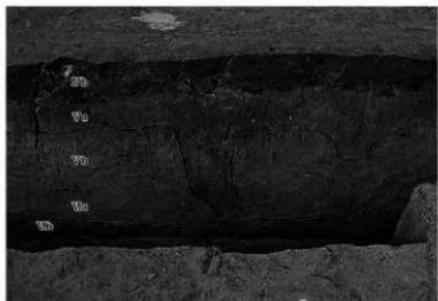
P108 断面(南から)



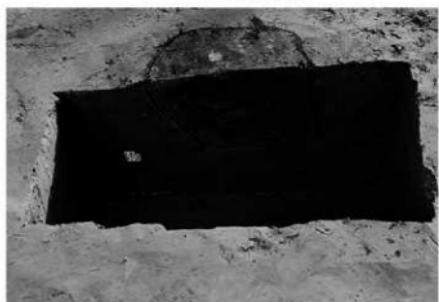
P115 断面(南東から)



P134 ~ 136 断面(西から)



P137・138 断面(南から)



P141 断面(北西から)



P145 断面(南から)



SX102 断面(南東から)



SX102b 断面(東から)



SX102c 断面(南東から)



SX103 断面(東から)



SX106 断面・遺物出土状況（南東から）



SX106 断面・遺物出土状況（北西から）



SX105 断面（南から）



SX119 断面（南東から）



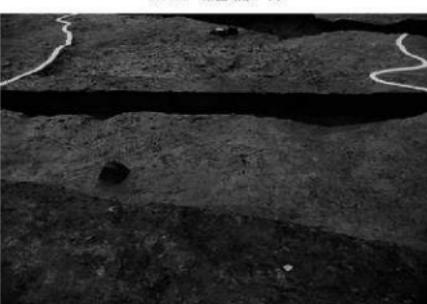
SX120 断面（東から）



SX152 断面（南から）



河川 7 断面（南から）



河川 7 断面（西から）



河川 7 (37O) 遺物出土状況（東から）



36O 遺物出土状況（東から）



36・37N 遺物出土状況（西から）



37N 遺物出土状況（南から）



37N 遺物出土状況（東から）



37O 土器出土状況（南から）



38N 土器出土状況（北から）



39N 土器（129）出土状況（北から）



39O 土器出土状況(東から)



39O 土器出土状況(東から)



下層 36・37 ライン完堀(南から)



下層 完堀(北東から)



下層 完堀(東から)



作業風景(西から)

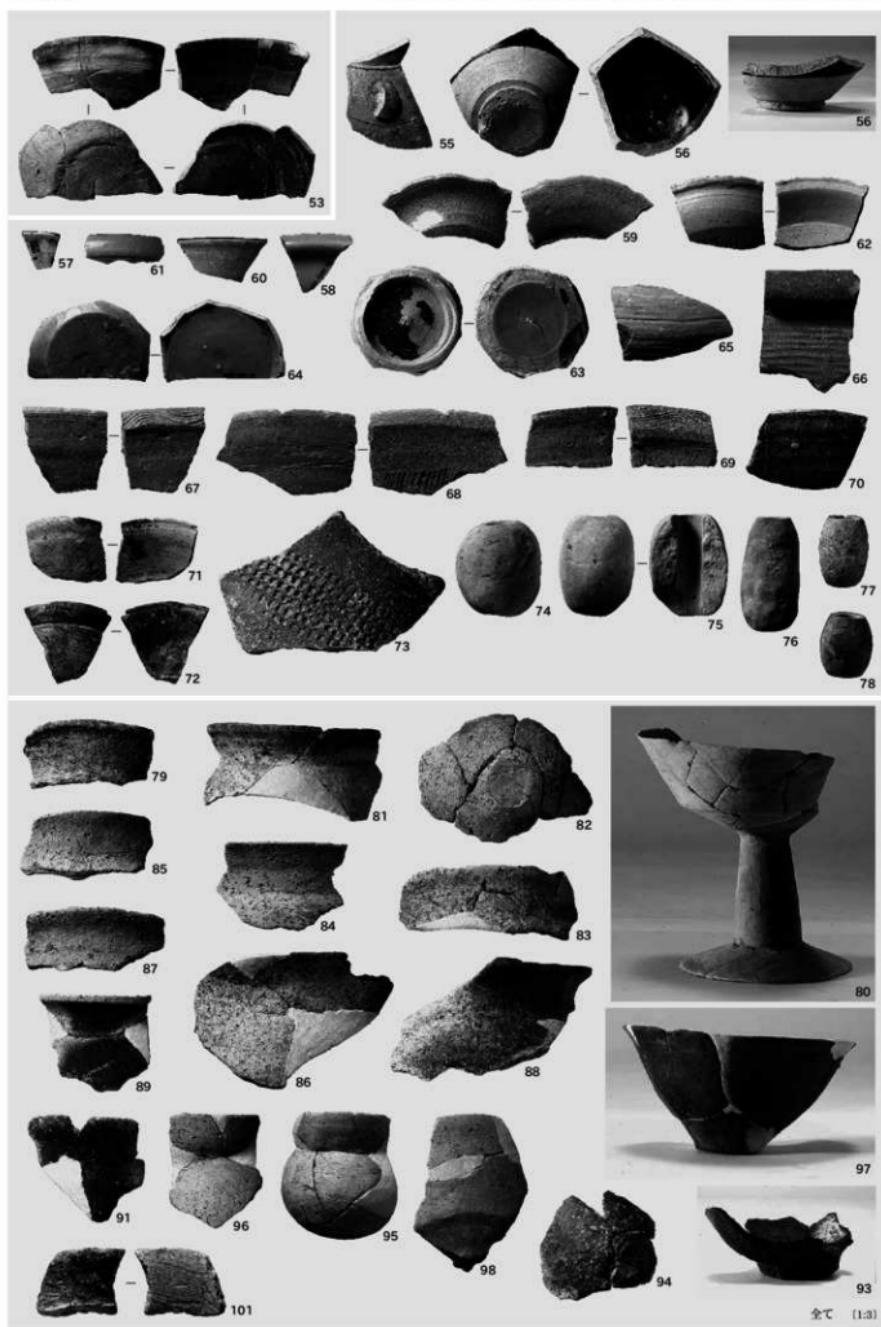


道路全景(北東から)

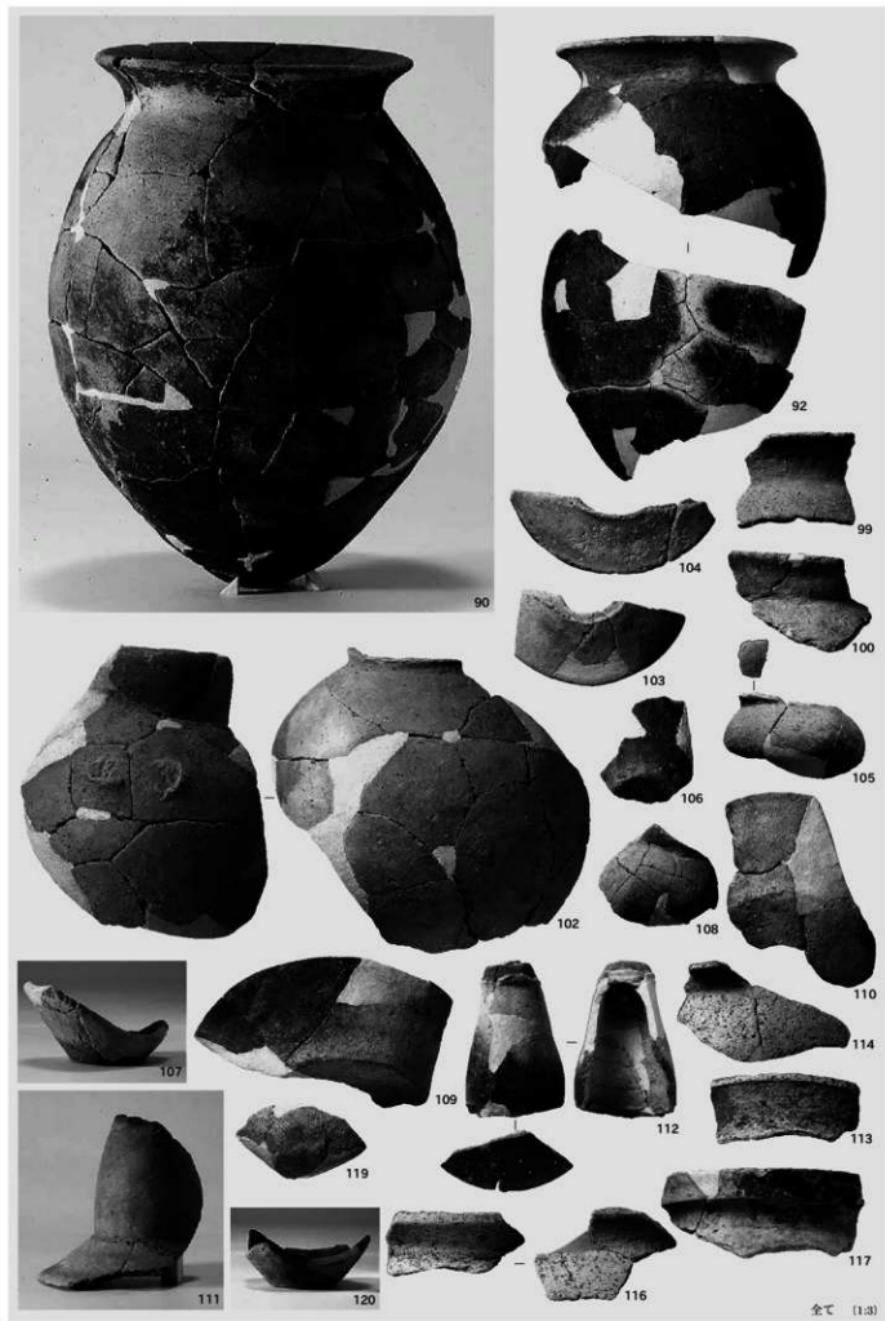


道路全景(南から)

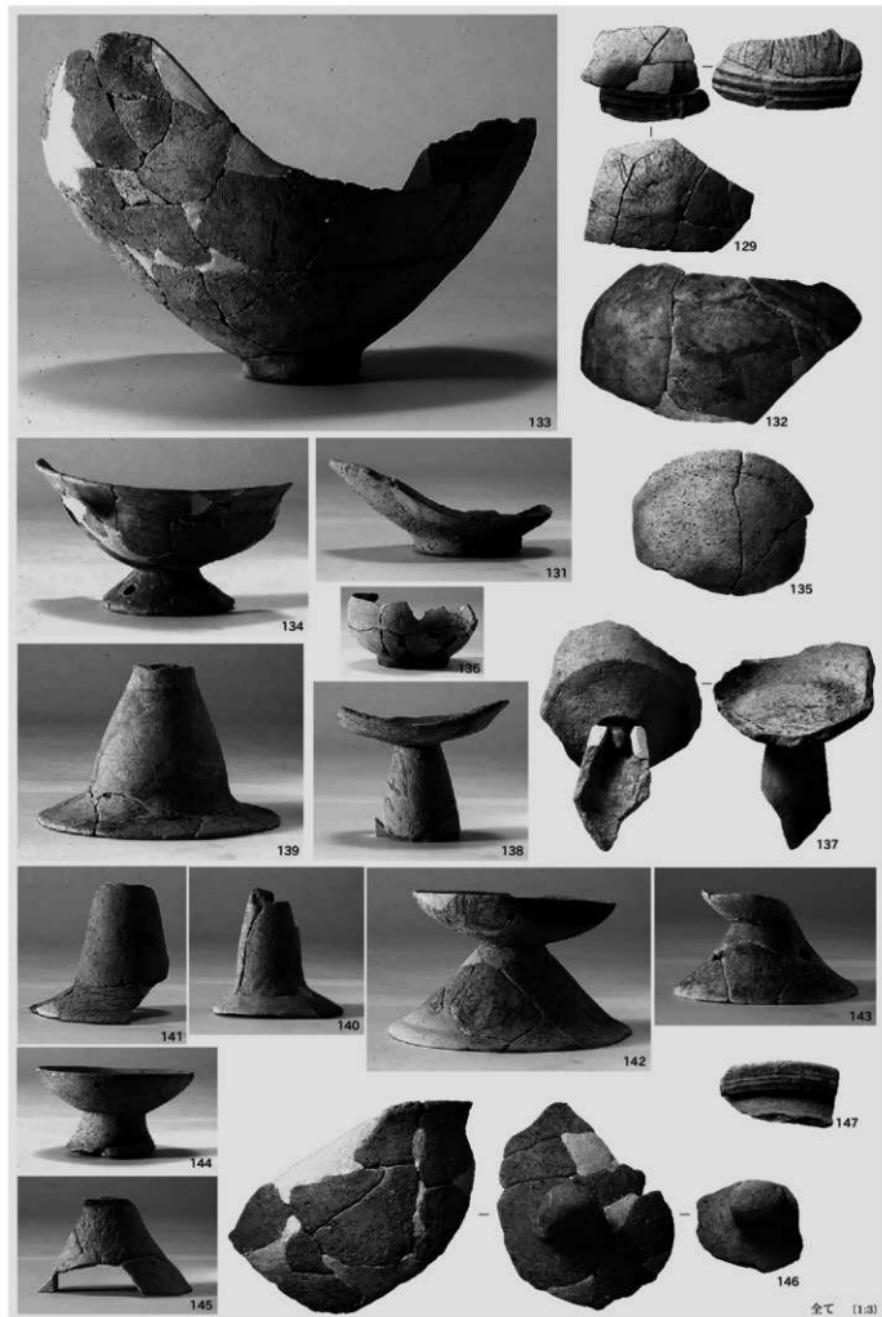




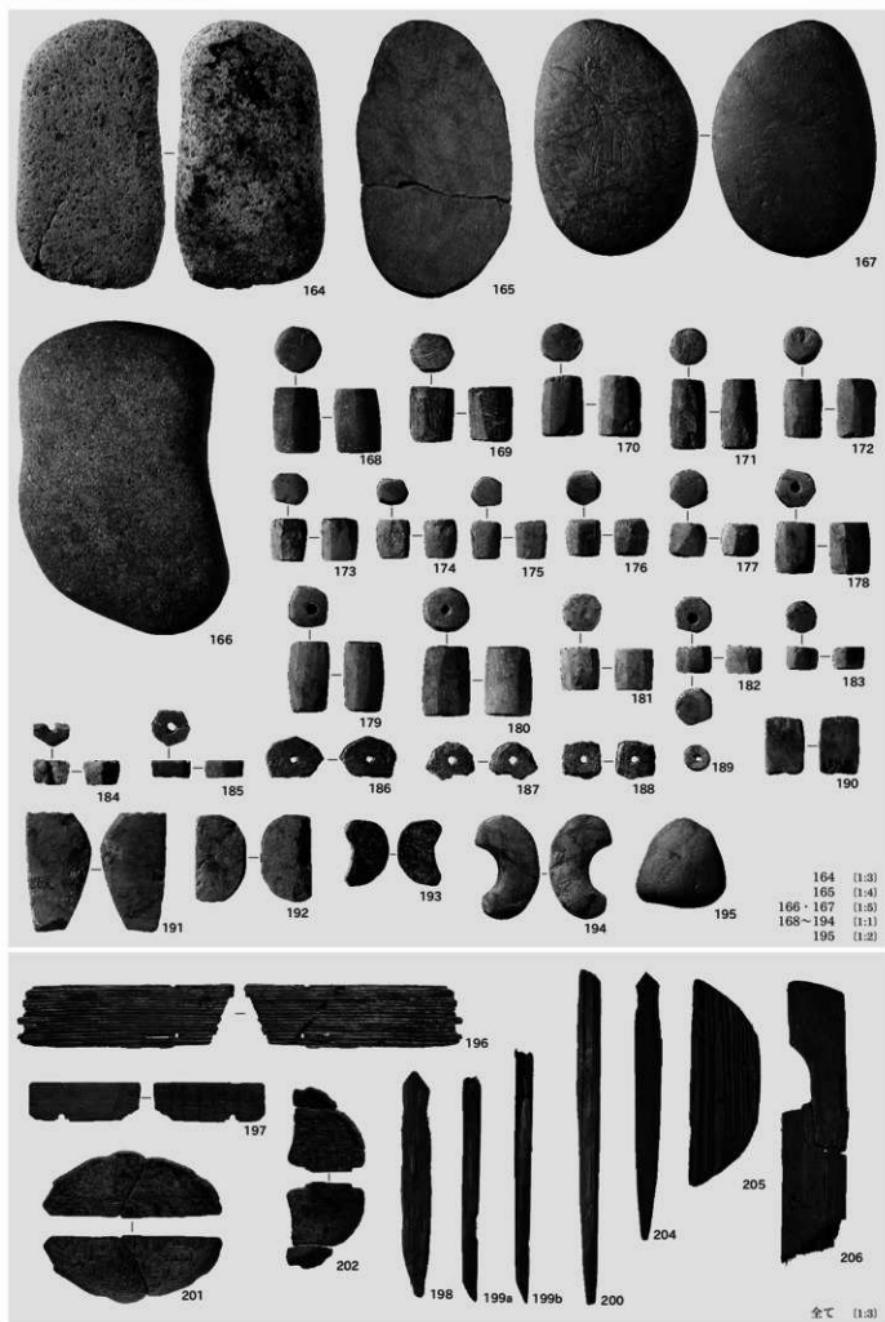
全て [1:3]

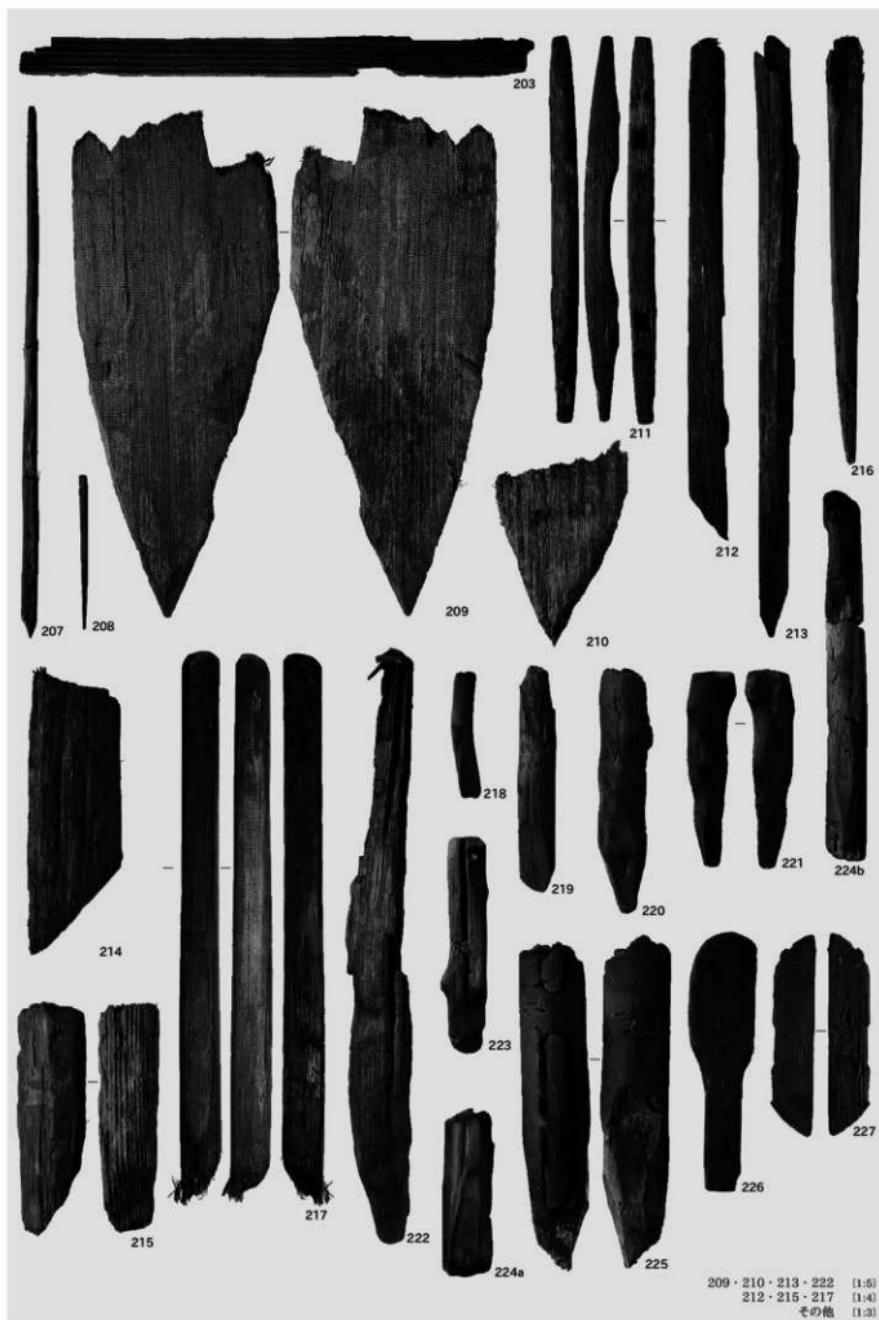


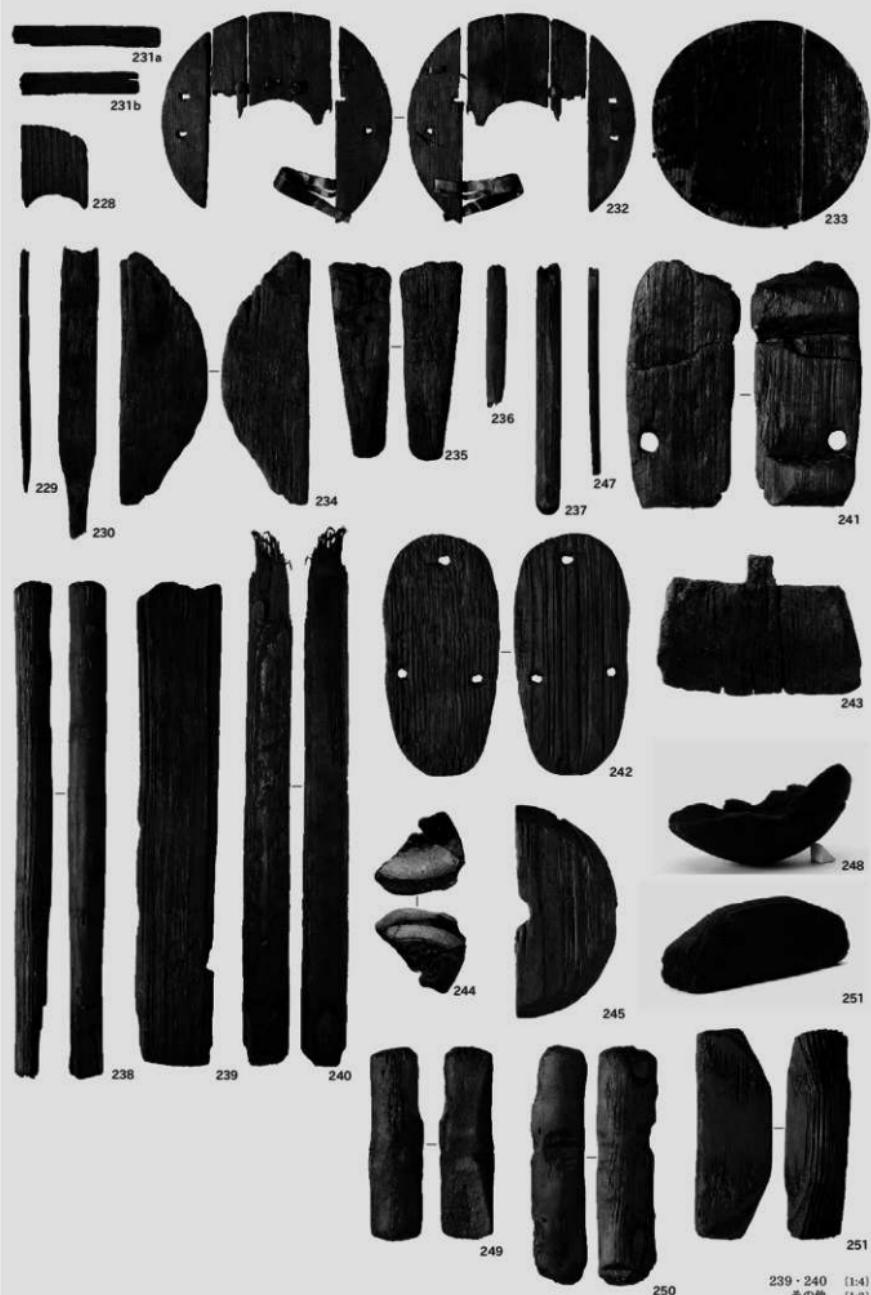


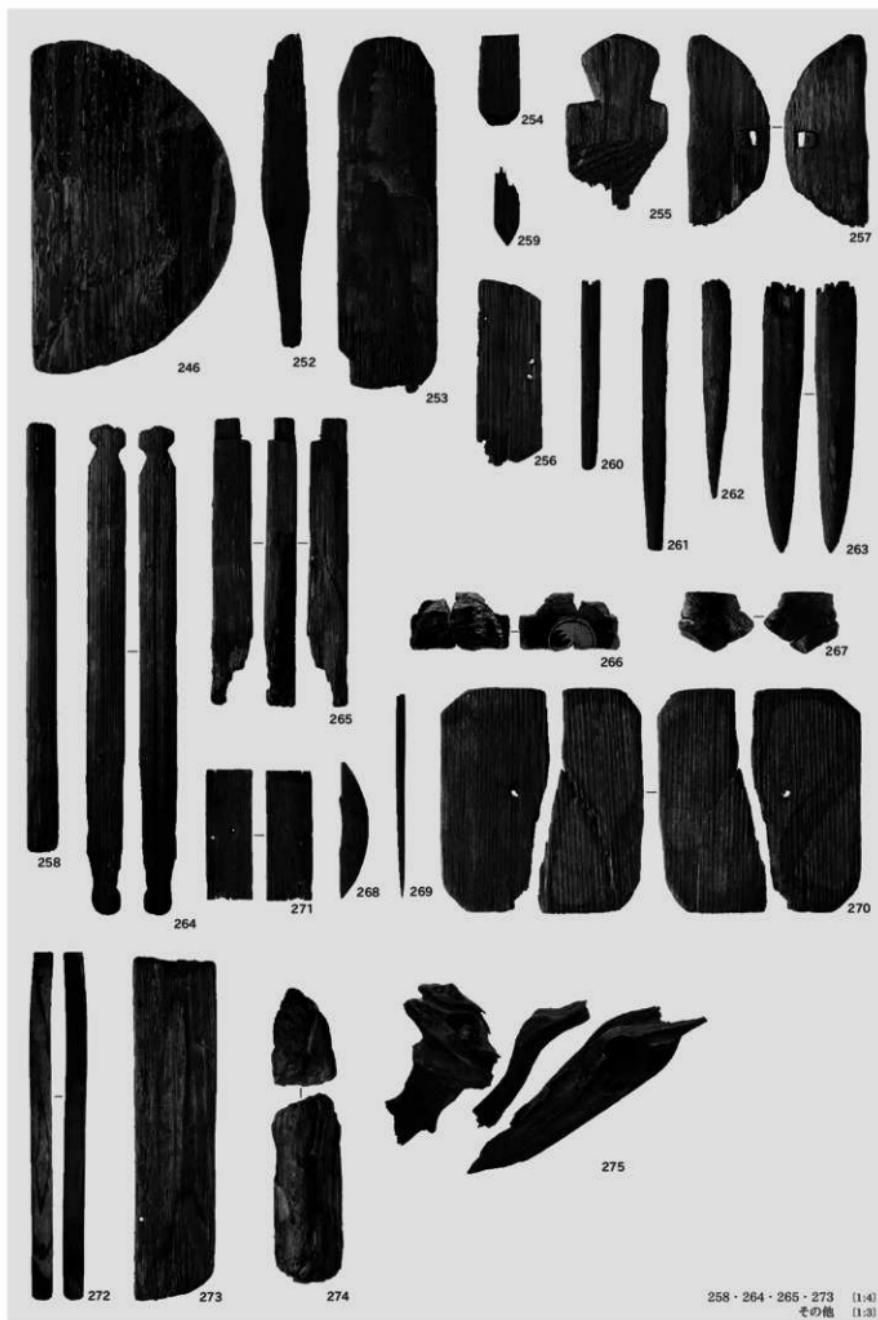








239・240 [1:4]
その他 [1:3]



258・264・265・273 (1:4)
その他 (1:3)

報告書抄録

ふりがな	よこまくりいせきに					
書名	横マクリ遺跡II					
副書名	一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書					
卷次	X					
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第257集					
編著者名	坂上に記（公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）、高橋 敦（株式会社 パリノ・サーヴェイ）、黒沼保子（株式会社 バレオ・ラボ）、株式会社 加速器分析研究所					
編集機関	公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団					
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981					
発行年月日	2015(平成27)年3月31日					
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
横マクリ遺跡 <small>新潟県系魚川市大学 田伏字横マクリ749 番地1ほか</small>	15216	281	37度 03分 10秒	137度 54分 0秒	2,040m ²	一般国道8号 系魚川東バイ パス建設
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項	
横マクリ遺跡	遺物包含地	弥生時代後期		土器		
	遺物包含地	古墳時代前期～中期	河川1条・ ビット	土器、玉作関連資料（廉玉・勾玉・白 玉未成品・剥片、ヒスイ原石）、石器、 石製品（横刃形石器、石鍤、磨石類、 砥石、台石）		
	遺物包含地	古代～中世	河川6条	土師器、須恵器、灰釉陶器、製塙土器、 青磁、白磁、褐釉、珠洲焼、瀬戸焼、 美濃焼、壺器系陶器、土師質土器、木 製品（糸巻轆、下駄、曲物、漆器、挽物、 箸状木製品、杓子、部材、杭など）		
要約	古墳時代前期～中期においては、廉玉の製作を主体とする玉作遺跡であるが、住居や工房などの遺構の存在は不明である。古代においては、小河川が平行して流れしており、土師器無台機と製塙土器が多く出土した。遺跡は度重なる土石流によって埋没したことが判明した。本遺跡からは弥生時代後期～中世まで断続的に遺物が見つかっているが、古墳時代前期～中期以外の時期の遺物は、山側に隣接する田伏山崎遺跡に由来する可能性が高い。					

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第257集

一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書X

横マクリ遺跡II

2015(平成27)年3月30日印刷
2015(平成27)年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社 新潟印刷
〒950-0134 新潟市江南区曇町3丁目5-5
電話 025(383)3900

第257集 横マクリ遺跡 II 正誤表

ページ	行	誤	正
脚注	1行目	…1点 <u>片面</u> 穿孔とされ…	…1点 <u>片面</u> 穿孔とされ…